元総社明神遺跡Ⅲ.Ⅳ

土地区画整理事業に先立つ埋蔵文化財発掘調査概報

1986

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

序

前橋市は、北に関東平野を一望できる雄大な赤城山をいだき、西に榛名山を仰ぎ、坂東太郎として名高い利根川が貫流し、市木であるけやきなどの街路樹が繁る自然に恵まれた水と緑の県都であります。

古代、東国最大級の豪族一上毛野氏が赤城南面を中心に栄え、律令政治の時代に入ると、元総社に上野国府が置かれ、国分寺や山王廃寺が立ち並び、奈良の都のような政治文化の中心地でありました。

市の西部にあたる元総社地区は、古代上野国の中心地域であり、数々の歴史的遺跡が残されています。時代の趨勢から区画整理事業が避けられない問題となりました。

そこで、元総社明神地区の土地区画整理事業の一環として、事前の発掘調査が継続されて、今年で4年目となりました。

今年度の調査では、古墳時代や奈良・平安時代の住居址や大溝・杭列を検出し、数多くの資料を得ることができました。残念ながら、現状のままの遺跡の保存は無理でありましたが、この調査により得られた成果が上野国府を解明するための手がかりとなることを期待しております。

最後になりましたが、この調査を実施するにあたり御協力いただいた区画整理第一課の担当者及び元総社第三（明神）地区区画整理審議委員や地権者の方々、極暑から厳寒の季節まで発掘作業に従事して下さった作業員の方々、遺物の整理にあたり指導助言いただいた関係機関や各方面の方々に厚く御礼を申し上げます。

昭和61年3月25日

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

団長　奈　良　三　郎

例　　言

1. 本書は、前橋都市計画事業元総社(西部第三明神)地区区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本遺跡の略称は、59年度調査分を59A7、60年度調査分を60A8とする。
3. 調査主体は、前橋市埋蔵文化財発掘調査団である。
4. 発掘調査の要項は、次の通りである。

調査場所	前橋市元総社町3716−1他20筆
調査期間	昭和59年12月25日〜12月27日
	昭和60年5月16日〜12月28日
整理期間	昭和61年1月4日〜3月31日
調査担当者	木暮　誠、町田信之、中野　覚、加部二生

5. 本書の編集は、調査担当者の協議に基づいて行われ、執筆は主に遺構担当者が行い、文末に文責を示した。遺物整理、図面整理、遺物写真等は、担当者および整理作業員が分担して行った。
6. 遺物観察表は加部二生が担当した。
7. 示標テフラ層等の同定には群馬大学教授、新井房夫博士の御教示を得た。
8. 庶務関係は、浜田博一、作宮　朗、諸田陽子の諸氏にお世話になった。
9. 本書の作成にあたり、次の方々の協力を得た。

新井房夫	石川正之助	石野博信	井上唯雄	上原真人	女屋和志雄
金子裕之	呉屋充庸	南雲芳昭	藤岡一雄	前沢和之	町田　章
宮本長二郎	山田昌久	山中敏史	綿貫綾子		
県史編纂室	群馬県埋蔵文化財発掘調査事業団				

10. 発掘調査・整理作業に参加した方々は次の通りである。記して感謝する次第である。

飯塚昭子	石田洋子	石堂千秋	岩田四郎	大塚美智子	加藤八重子
金井福治郎	川端久子	黒沢なつ美	木暮トミ	小林延寿	佐藤忠重
佐藤佳子	柴崎加代子	白井栄恵	住谷文彦	関　哲哉	竹内敏枝
髙島　康	田村恵子	千明香根子	千明徳至	塚越則子	角田弘子
渡木秋子	福島裕子	松田隆次	松本加代子	森永　保	柳原久仁江
湯浅たま江	湯浅道子	横坂英信			

11. 木製品の実測は、(株)中央航業に委託した。

凡　　例

1. トレンチの名称は、従来通り東西トレンチ算用数字、南北トレンチにアルファベットを用いて呼称し、過年度からの通し番号とした。
2. 遺構の略称は次の通りである。

   土師器使用住居址 → H　　掘立柱建物址 → B　　溝状遺構 → W　　土坑 → D

   井戸 → I　　ピット → P
3. 挿図の縮尺は、次を基本としている。

   遺構

   住居址 → 1/60　　カマド → 1/30　　掘立柱建物址 → 1/60　　溝状遺構 → 1/100

   土坑 → 1/60　　トレンチ全体図 → 1/200

   遺物

   坏・椀・高坏・甕・壺・坩・羽釜・蓋 → 1/4　　須恵器大甕 → 1/6　　瓦 → 1/6

   砥石 → 1/2　　斎串 → 1/2　　梯子・部材・杭 → 1/10

   木器 → 1/3・1/6
4. 挿図中に記した断面基線上の数字は標高を示している。
5. 遺構及び遺物挿図中の記号は次のとおりである。

遺構

焼土範囲断面　炭化物　地山　白色粘土　FPF−1

テフラ

遺物断面

土師器　須恵器　灰釉陶器

遺物表面（内外面）

炭火物　赤色塗彩　焼土付着部分

油煙
二次焼成
黒斑を含む

施釉部分
木器磨滅部分　硯研磨面　漆付着部分

目　　次

序
例　　言
凡　　例
I　発掘調査に至る経過 …… 1
II　遺跡の位置と環境 …… 1
1．遺跡の立地 …… 1
2．上野国府調査の歩み …… 3
III　発掘調査の経過 …… 5
1．調査方法 …… 5
2．調査の経過 …… 6
IV　遺構と遺物 …… 11
1．14トレンチ …… 11
2．Lトレンチ …… 15
3．Mトレンチ …… 16
4．3トレンチ …… 16
5．4トレンチ …… 20
6．Cトレンチ …… 24
7．15トレンチ …… 29
8．16トレンチ …… 31
9．17トレンチ …… 47
10．Kトレンチ …… 47
V　まとめ …… 48
1．住居址 …… 48
2．溝址 …… 49
3．杭列 …… 51
VI　遺物観察表 …… 53
VII　写真図版

I　発掘調査に至る経過

昭和48年より計画が策定された前橋都市計画事業元総社地区土地区画整理事業について、担当課長と市教委との協議が重ねられ、道水路部分を中心に埋蔵文化財の調査を実施することになった。

昭和57・58年度には、市教委が主体となり、国県補助金を受けて確認調査を実施した。その結果、上野国府に関連する遺構も含めて、濃密な遺構の分布が認められたため、再度協議を重ね、昭和59年10月15日付で『元総社（西部第三明神）地区土地区画整理事業に伴う元総社明神遺跡の発掘調査に関する覚書』が施行者の代表者である前橋市長と市教育長との間で締結され、今後の区画整理事業の進展に合わせて、市教委の組織する前橋市埋蔵文化財発掘調査団が、担当課の依頼を受けて発掘調査を実施することになった。

昭和59年度の調査は、計画が変更された道路部分について昭和59年11月15日付で調査が依頼され、12月14日に試掘調査を行い、遺構の存在を確認した。12月22日付で委託契約を締結し、12月24日から27日まで発掘調査を実施した。なお、報告書は次年度にまとめることとなった。

昭和60年度の調査は、昭和59年11月16日付で依頼され、協議を重ね、昭和60年４月19日には地権者に対する説明会を行い、５月11日付で委託契約を締結し、５月16日から８月10日までと９月９日から12月27日までの二期に分けて発掘調査を実施した。　（町田）

II　遺跡の位置と環境

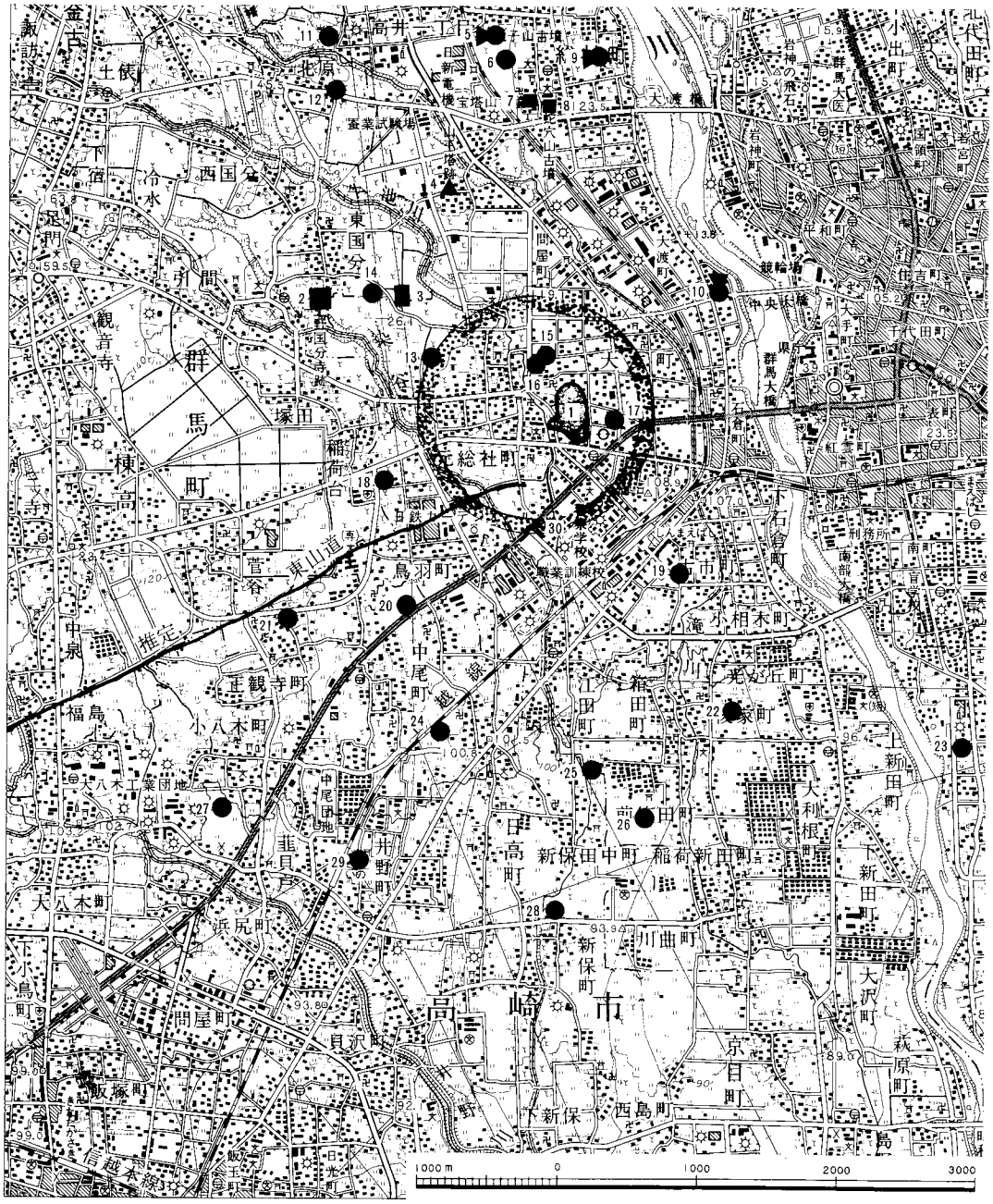
1.　遺 跡 の 立 地

元総社明神遺跡は、前橋台地の中央、利根川の西に位置する。前橋台地を北西から南東に偏流する染谷川と牛池川にはさまれた台地のすぐ東にあたり、微高地となっている。

本遺跡地の北西約２kmには上野国分寺・国分尼寺がある。さらに牛池川をはさんで北北西約２kmには山王廃寺があり、北約３km以内には、国指定史跡の総社二子山古墳・愛宕山古墳・宝塔山古墳・蛇穴山古墳・遠見山古墳・王山古墳等が入ってくる。南側に目を転ずれば鳥羽遺跡や日高遺跡が所在し、西からは推定東山道が伸びてくる。

こうした歴史的環境の中にあって本遺跡の所在する前橋市元総社町は、古代に重要な位置を占めていた。縄文・弥生遺跡の報告例は少ないものの、古墳時代から始まって律令の時代の上野の中心地に位置付けられよう。また、中世においては蒼海城が造営されたこと、八日市場城・村山城といった近世城郭の存在を勘案すれば、群馬の歴史の流れの中で、たえず中心的な位置を占めていたことになる。

今年度の調査は、元総社明神遺跡IIで報告された大溝の延長線にあたる地点を二ケ所で確認しているし、その他にも数々の事実を私たちに提示している。　（中野）



第1図　元総社明神遺跡と周辺遺跡(1/50000)

1	元総社明神遺跡	9	遠見山古墳	17	樋越遺跡	25	箱田境遺跡
2	国分寺	10	王山古墳	18	鳥羽遺跡	26	前箱田遺跡
3	国分尼寺	11	下東西遺跡	19	赤鳥遺跡	27	小八木遺跡
4	山王廃寺	12	北原遺跡	20	中尾遺跡	28	新保遺跡
5	総社二子山古墳	13	草作遺跡	21	正観寺遺跡	29	井野遺跡
6	愛宕山古墳	14	国分寺中間遺跡	22	五反田遺跡	30	推定上野国府域
7	宝塔山古墳	15	閑泉樋遺跡	23	中大門遺跡		
8	蛇穴山古墳	16	閑泉樋南遺跡	24	日高遺跡		

2. 上野国府調査の歩み

上野国府の本格的な発掘調査は、昭和36年群馬大学の尾崎喜左雄博士を中心にして開始された。元総社小学校の校庭で確認された東西13.20m（桁行５間）、南北6m（梁間2間）の建築遺構が、国府調査の発端となったということができよう。次第に高まる国府解明への動きは、やがて上野国府調査委員会へと発展し、巨費と発掘技術の粋をこらした精力的な発掘調査が実施された。

やがて、「朱烏分」などの地名や地割等の所見から、大友町村山及び雲雀街道へと調査地が移り、「この方八町の中央北端部は前に記した主要道路と推定される細長い地割が突き当る位置で、周囲に比べるとやや高く、東西230m、南北230mのほぼ２町４方で国衙跡と推定される部分である。」（昭和41年度上野国府跡発掘調査概報、１頁）とあるように、国衙跡をかなり意識した発掘調査が実施された。

昭和42年度の調査概報によれば、「以上の結果を更に整理し、設置当初の位置を求むれば、それは、今まで考えていた範囲を西方にずらすことが妥当と思える。元総社地区がもっとも有力視される。」（11頁）とあり、当初の国府の外郭の線引きを西へずらすという判断が下された。

昭和43年度の調査では、「この附近は国府跡との関係はないとみなければならない。」（昭和43年度上野国府跡発掘調査概報、6頁）、また「この地に国衙の存在を推定するには再検討を要する（前掲書、11頁）としている。

昭和43年度までの調査地は、元総社小学校の校庭を除けば全てが牛池川の東の台地上に位置することに留意しなくてはならない。国分寺や国分尼寺の所在する台地とは、牛池川を境として向き合う位置にある。

一方、最近の前橋市教委の調査では、天仁元年（1108）に降下した浅間Ｂ軽石を覆土中にもつ大溝が相次いで確認された。閑泉樋遺跡ではＮ―89°―Ｗの方位を指す東西方向の大溝が検出されたし、元総社明神遺跡IIでは、Ｎ―2°―Ｅを指す南北方向の大溝が確認された。（付図参照）昭和57・58年度の元総社明神遺跡の調査を担当した岸田治男氏は、この２条の大溝を国府域の北限・東限として、推定国府域を示した。（元総社明神遺跡II、46頁）また、昭和60年度の担当である木暮誠氏は、岸田氏の外郭線を、確認済みの大溝の地点と字早道周辺の地割によって微調整を加え、方８町の推定国府域を提示した。（文化財調査報告書、第15集、12頁）

これまでの国府調査の歩みは、次の３期にまとめることができる。

Ｉ期　元総社小学校庭の調査により、上野国府解明の糸口をつかむ時期（昭和36～39年）

II期　地名や地割を重視し、牛池川の東に国衙を追求する時期（昭和40年～43年）

III期　Ｂ軽石をもつ大溝を重視し、国府の外郭線を追求をする時期（昭和57～60年）

（中野）

第１表　上野国府調査の歩み

年次	年　月	地　　域	内　　容	調査主体	備　　考
1	36.11	元総社町2407－２（元総社小学校校庭北西部）	住居跡７～８、柱穴列、掘立柱建築遺構発見	群馬大学、尾崎研究室他	『日本考古学協会39年度大会研究発表要旨』『まえあし』１号
2	37.8	同　上	１号建築遺構確認	同　上	
3	38.8	同　上	２号建築遺構確認	同　上	
4	39.8	同上（元総社小学校校庭南東部）	忠霊塔（昭和20年）基礎国府との関連遺構なし	同　上	
5	40.7～8	大友町372－2 375・376	柱穴列、生活面、周溝確認	同　上	『群大史学会報』32号
6	41.7～8	大友町村山320 雲雀街道393他	７～13世紀の生活面、掘立柱建築遺構１、大溝、井戸、屋敷跡	上野国府調査委員会 前橋市教育委員会	『昭和41年度上野国府跡発掘調査概報』
7	41.9～10	元総社町2407－２（元総社小学校北部校舎跡）	住居跡、柱穴列、発見	同　上	
8	42.8	大友町村山396 閑泉樋南3359	住居跡15、溝、周溝、墓穴、柱穴列、井戸、古代建築遺構	同　上	『昭和42年度上野国府跡発掘調査概報』『前橋市史』第一巻「昌楽寺北遺跡」第一次発掘
9	42.12	樋越289	溝、近世道路址	県立前橋工業高校 社会科研究部 松島栄治	同　上
10	43.8	元総社町（昌楽寺裏）	住居跡15、溝、井戸、墓坑	上野国府調査委員会 前橋市教育委員会	『昭和43年度上野国府跡発掘調査概報』『前橋市史』第一巻「昌楽寺北遺跡」第二次発掘
11	43.10	元総社町（昌楽寺東）	溝？	同　上	同　上『前橋市史』第一巻「昌楽寺北遺跡」第三次発掘
12	43.12	元総社町2135他（字巣鳥分）	住居跡９～10井戸２、溝、墓坑	同　上	同　上
13	45	元総社町2407－２（元総社小学校校舎東側）	官衙遺構と思われる柱穴	前橋市教育委員会 藤岡一雄	
14	57.9～12	元総社町	住居跡45、土坑10、井戸８、溝10、ピット50、墓坑１	前橋市教育委員会	『元総社明神遺跡Ⅰ』
15	58.2～３	元総社町2－7－5 2－7－12	住居跡３、大溝（N－89°－W）	同　上	『前橋市文化財調査報告書』第13集「閑泉樋遺跡」
16	58.5～７	元総社町	住居跡96、大溝（N－２°－E）	同　上	『元総社明神遺跡II』

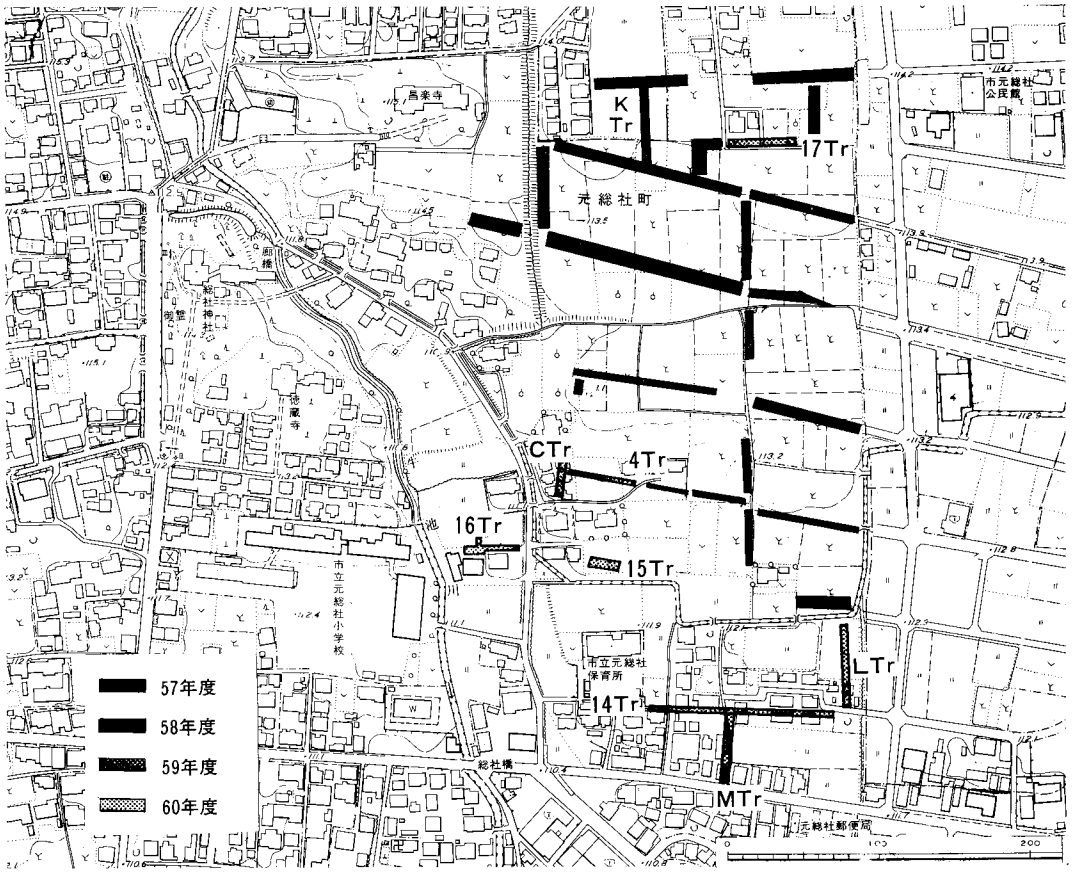
III　発掘調査の経過

1　調査方法

昭和57年度から始まった元総社明神遺跡の発掘調査は、今回で四年次を迎えた。調査対象地が道水路部分であるためトレンチ調査である。今年度も含めた調査区トレンチ全体図は、第２図に示した通りであり、トレンチの呼称については、東西トレンチに算用数字、南北トレンチにアルファベットを用い、全体を通し番号とした。

重機による表土掘削後、トレンチ内に４ｍごとの杭を打ちグリッドを設定した。グリッドは、トレンチと同様、東西方向に算用教字、南北方向にアルファベットを用いて呼称し、トレンチごとに平面国家座標に位置づけた。水準は、つくし公園の水準点（112.365m）を用いた。

グリッド設定後、プラン確認を行ない、各遺構ごとに調査工程を検討し調査を進めた。トレンチ調査であること、トレンチによっては住居址が密集していること等により調査は苦しい状況で進められた。　（木暮）



第２図　トレンチ設定図(1/5000)

2　調査の経過

昭和59年度の調査は、緊急的にKトレンチ（以下Trと略す）を実施し、12月14日に試掘を行い本調査を12月24日から3日間行った。

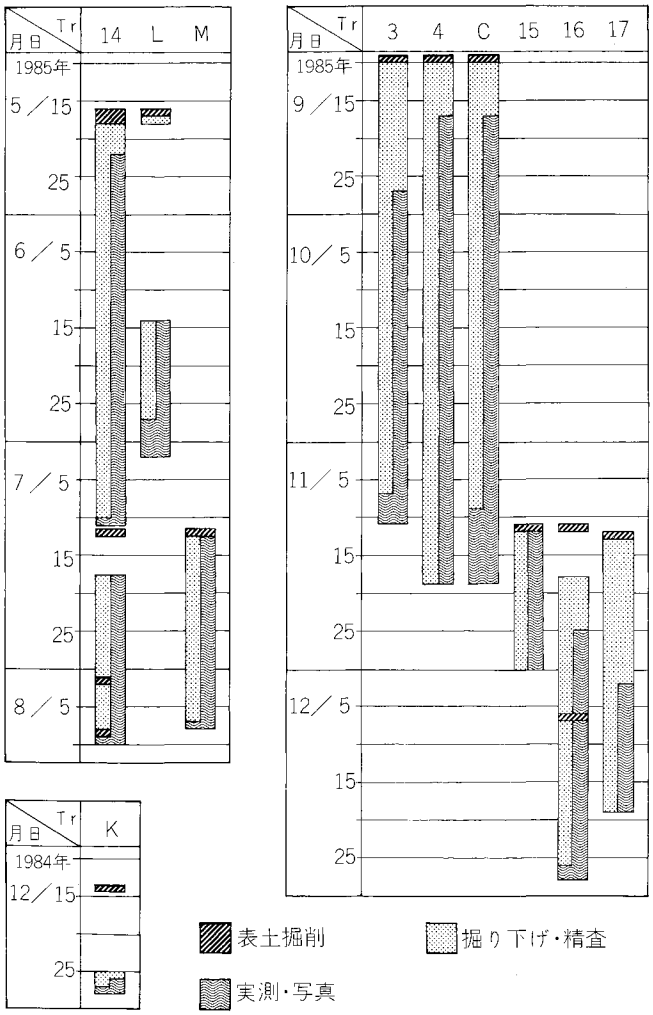
昭和60年度の調査は、二期に分けて実施した。5月16日に器材運搬をし、同日の14Tr東半分とLTrの調査から開始した。しかし、土層が見分けにくく、住居址・溝・土坑等の遺構が複雑に重っており、調査に時間を要し、加えて、梅雨期に入り、雨での中断や湧水の激増など自然の悪条件も重なり、進度が遅れたが、7月11日終了した。続く14Tr西半分とMTrの調査は、湧水や猛暑と戦いながらも能率よく、8月2と9日に大溝の検出のため14Trを拡張して、8月10日には完了した。

第二期の調査は、9月11日から開始し、3・4・CTrの表土を剝ぎ、調査にあたった。遺構の保存状態が良好で、遺物の数も多く、農繁期で作業員の平均が6～7人という少ない状態で、進み具合が悪かった。

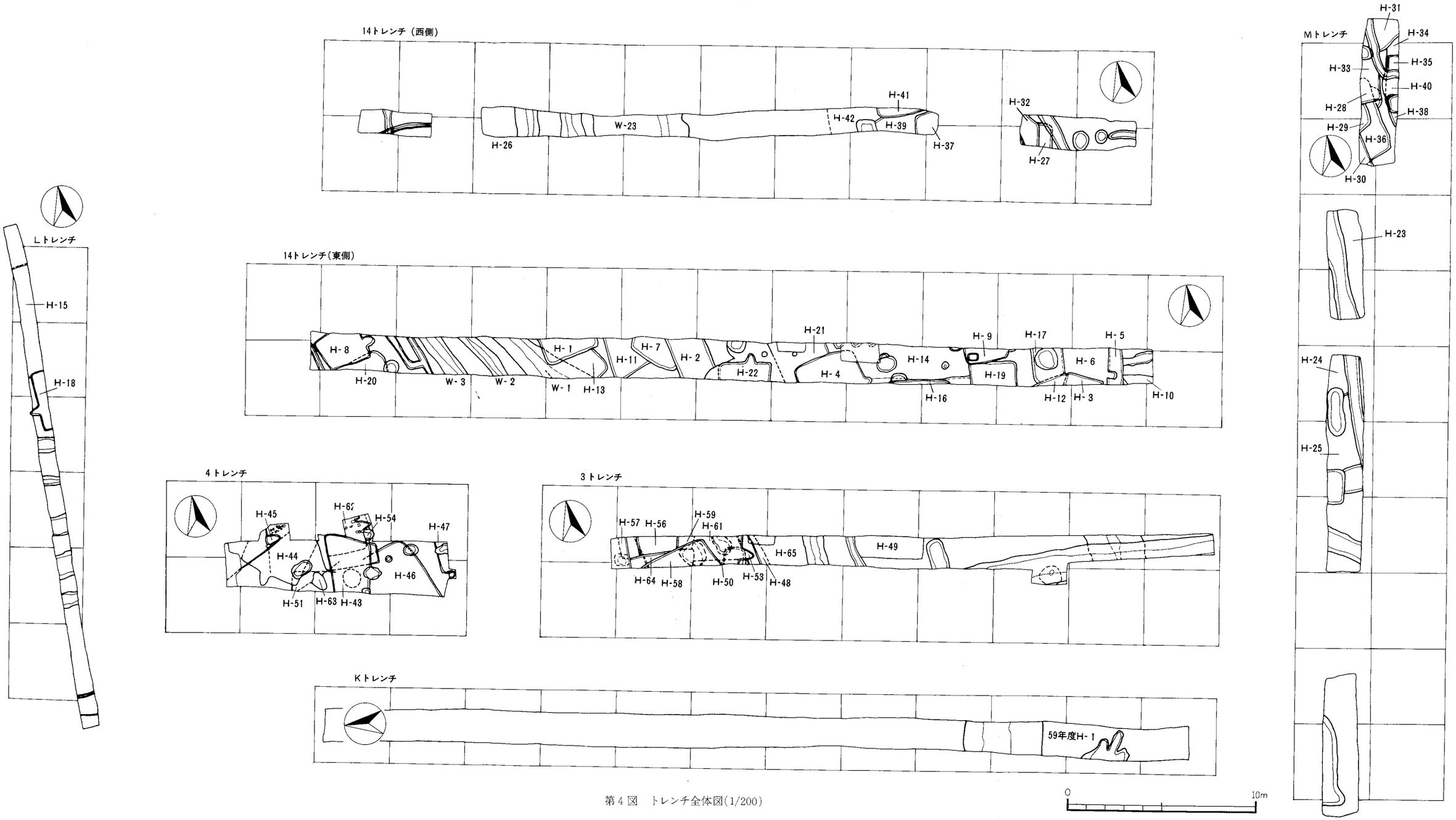
11月より作業員を増員し、大溝の検出するために3Trを拡張し、続いて、15・16・17Trの調査では、遺構数が少ないために月初めで終了する予定であった。

ところが、11月28日に16Trから杭列が発見され、県内に調査例のない遺構であり、上野国府との関連も考えられることから、取扱いを協議し、期間と予算を追加して、トレンチを拡張し、遺溝の広がりと性格を明らかにすることになった。12月6日に16Trの拡張を行い、寒風の中、多数の杭や建築部材・木器などを検出して、防寒対策や保存方法に苦労し、各方面の指導助言により取り上げを行い、12月27日に調査を終了した。

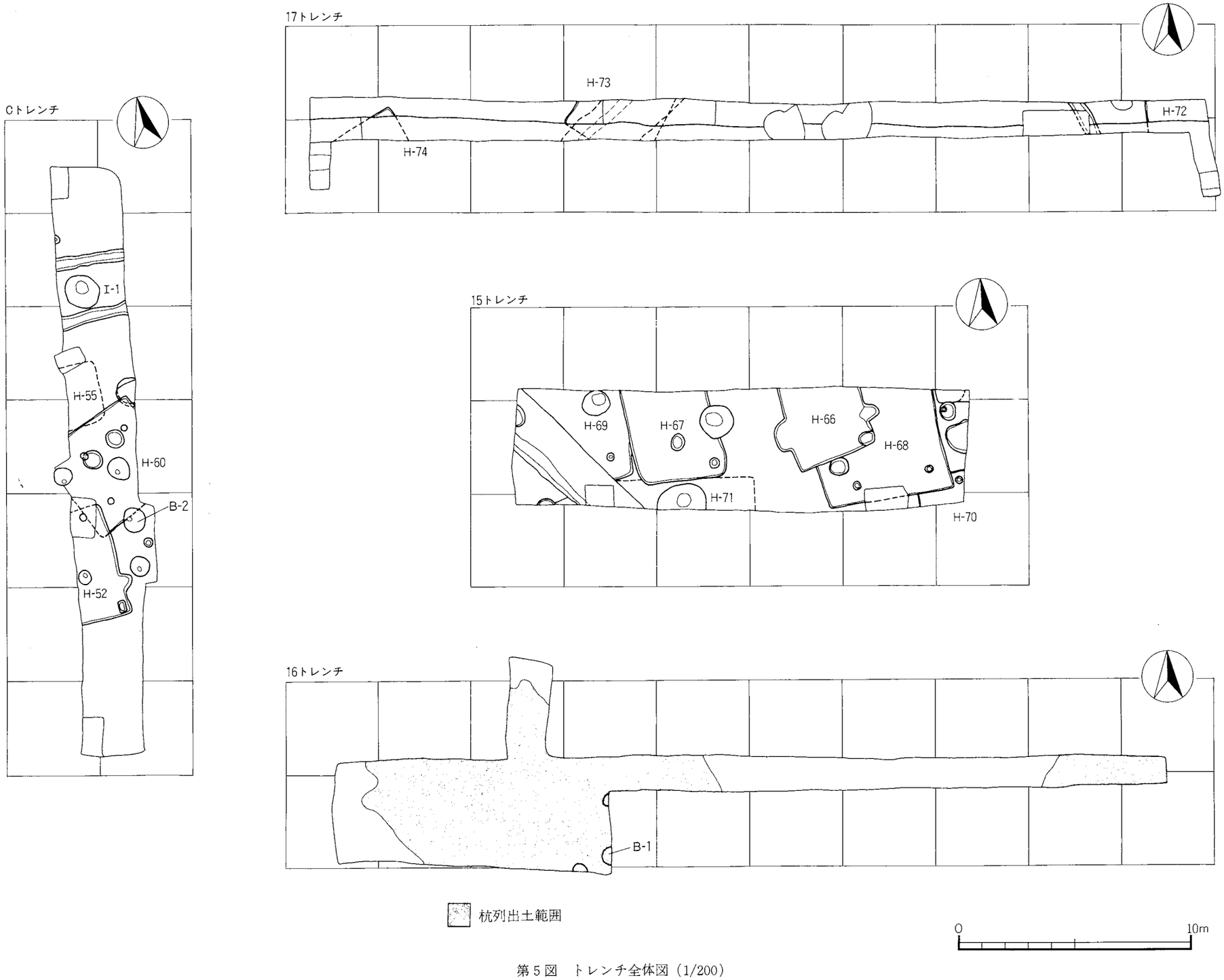
（町田）



第3図　発掘調査経過表



第4図　トレンチ全体図(1/200)



第５図　トレンチ全体図（1/200）

Ⅳ　遺構と遺物

1.　14トレンチ

幅2m、長さ40mをこえる14トレンチは、住居址22軒、溝5条、土坑10基と種々の遺構を検出した。発掘面積に大きな制約を受けているため、全体像をつかむのが困難であった。とくにトレンチ東側は住居址が幾重にも切り合っており確認が容易ではなかった。２２軒の住居址には、石田川式土器を伴うものが３軒でその他は奈良・平安時代のものがほとんどである。平面プランは、方形が多く、規模は小さい。溝の５条のうち、W－１・２・３号溝は平行して走行し、N－40°～50°－Wを測る。人工的な造成と見られる。また、W－23号溝は、ほとんど南北方向を示しており、昭和58年度の元総社明神遺跡Ⅱで報告された南北方向の大溝が南へ伸びたものと判断した。標高は、トレンチ東側が111.70m、中央が111.50mと東ほどわずかに高い。14トレンチを概観すると、東側には住居址が密集し、西へ進むほど住居は減少する傾向が見られる。　（中野）

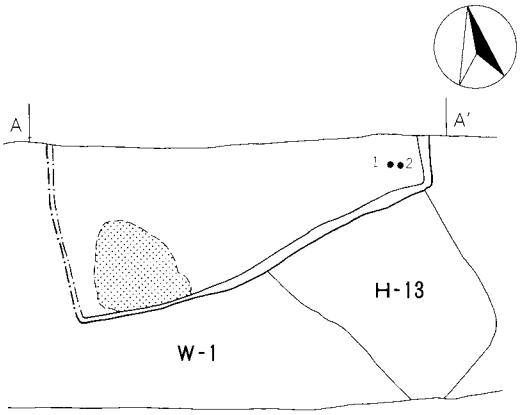
Ｈ－１号住居址

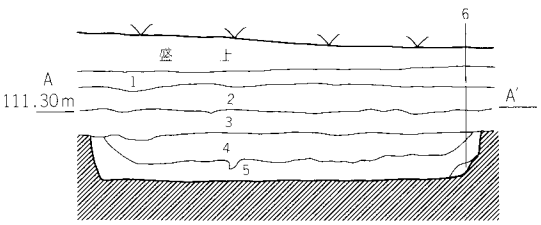
本住居址は、14トレンチの東の中央に位置する。すぐ西に所在するW－１号溝の埋没後に構築されている。南に隣接するH－13号住居址を切っている。新旧関係は、W－１号溝の埋没、H－13号住居址の構築・廃棄、H－１号住居址の構築と判断できる。

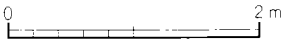
平面形は、住居址の全域を調査していないものの、概ね長軸方向が３m前後の歪んだ方形であろうと推定できる。床面は、比較的堅緻で凹凸が少ない。住居址南西域には炭化物が見られた。周溝及び貯蔵穴は検出されなかった。覆土は、黒褐色ないし、暗褐色の細砂で、レンズ状の堆積を呈する。壁高は30cm前後を測り、しまりのない状態で検出に苦しんだ。

出土遺物は、糸切後高台を付す椀が二個体あり、１は完形である。

時期は、遺物総数200点中須恵器が半数を占めることや覆土の所見から見て、平安時代と推定できよう。　（中野）

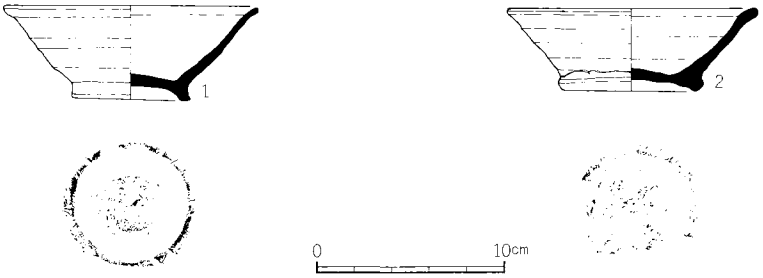






1	暗褐色土層	細砂	4	黒褐色土層	細砂
2	暗褐色土層	細砂	5	黒褐色土層	細砂
3	黒色土層	細砂	6	暗褐色土層	細砂

第６図　Ｈ－１号住居址（1/60）

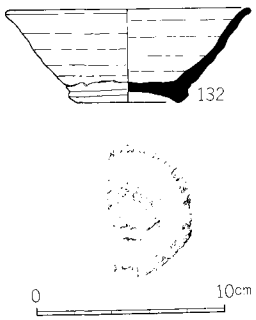


第７図　Ｈ－1号住居址出土遺物(¼)

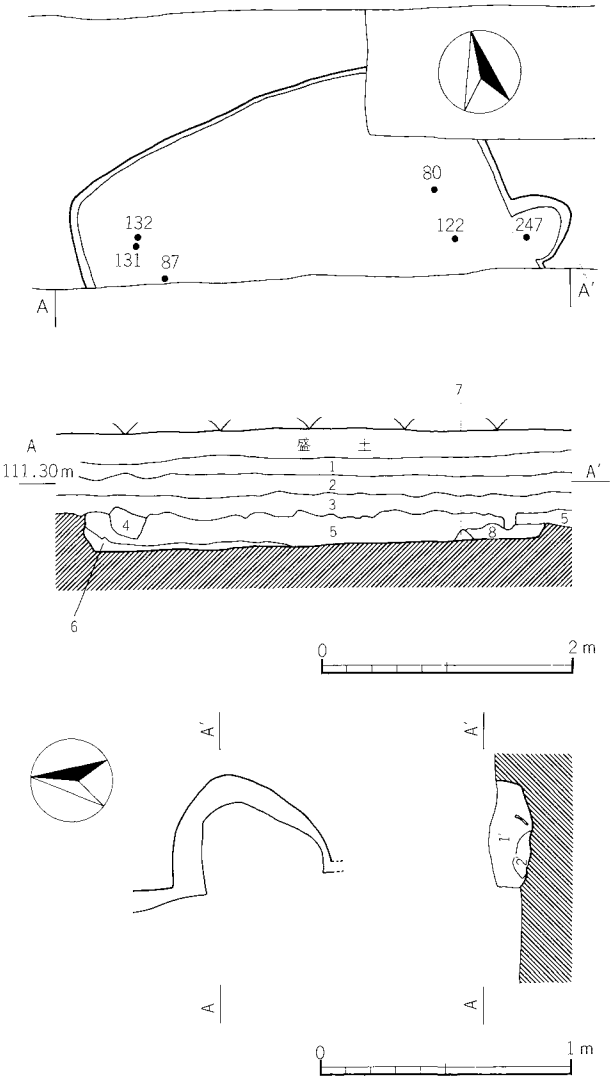
Ｈ－４号住居址

本住居址は、14トレンチ内の東に位置する。トレンチ発掘のため全域を検出できなかったものの、ほぼ整った隅丸方形のプランを呈する。住居内東にカマドを有し、長軸方向で約3.2mを測る。覆土は、黒褐色でよく締まり、微量の白色軽石と炭化物を含む。壁高は、30cm前後でシャープに立ち上がる。床面は凹凸が少なく、堅緻である。カマドは、ソデを持たず焼けが弱い。南北方向で60cm、東方向で80cmの小型のカマドである。遺物は須恵器を中心として258点を数え、そのうち灰釉陶器を15点含んでいる。軒丸瓦を１点出土しているが、上野国分寺に類似するものが見られる。時期は、遺物の所見から10世紀以降の平安時代と推定できる。

（中野）

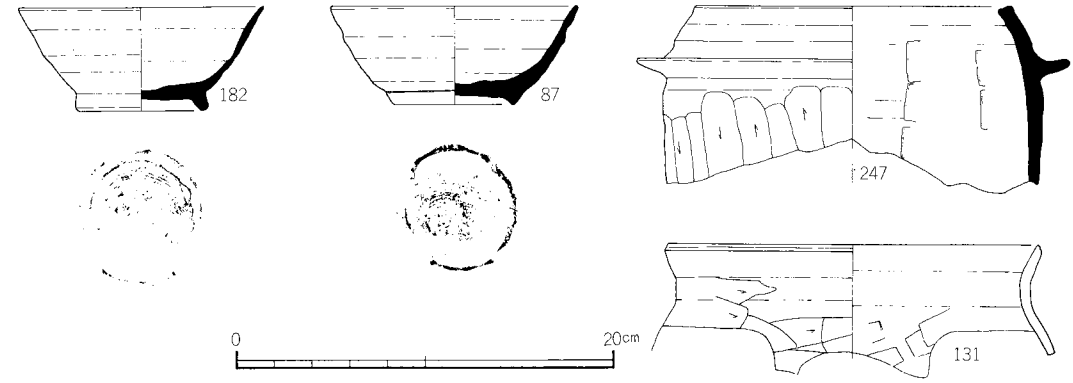


第９図　Ｈ－4号住居址出土遺物(¼)

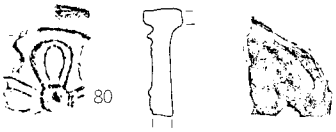


1	暗褐色土層	細砂	6	黒褐色土層	細砂
2	暗褐色土層	細砂	7	暗褐色土層	細砂
3	黒褐色土層	細砂	8	黒褐色土層	細砂
4	黒褐色土層	細砂	1'	黒褐色土層	細砂
5	黒褐色土層	細砂	2'	暗褐色土層	細砂

第８図　Ｈ－4号住居址(1/60)・カマド(1/30)



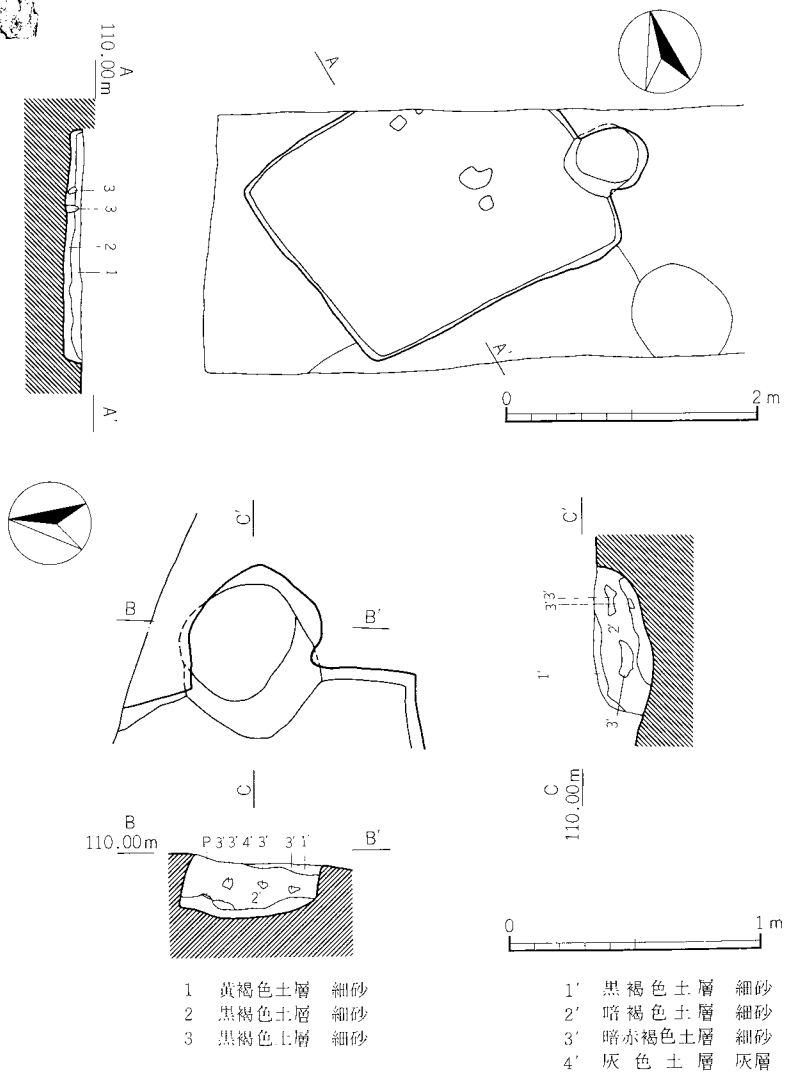
第10図　H－4号住居址出土遺物(1/4)



H－8号住居址

本住居址は、14トレンチ東側の西端に位置する。すぐ南にD－6号土坑とH－20号住居址があり、H－20→D－6→H－8の順で構築されている。平面形は歪んだ長方形で東壁にカマドを持つ。長軸2.4m、短軸1.8mを測る。壁高は、14cmでシャープに立ち上がる。床面は比較的堅緻である。カマドは、良く焼けており、崩落部分が暗赤色、灰層が5cm堆積し、残存は良好であった。遺物は土師器を中心とする。

(中野)



1　黄褐色土層　細砂
2　黒褐色土層　細砂
3　黒褐色土層　細砂

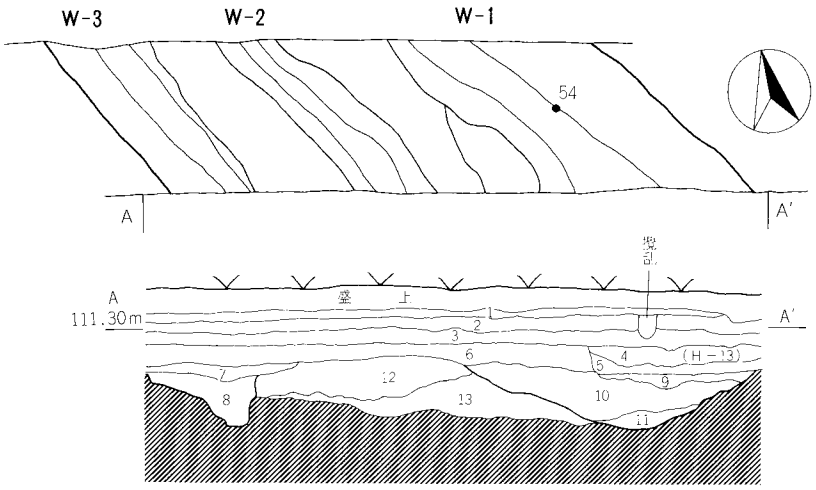
1'　黒褐色土層　細砂
2'　暗褐色土層　細砂
3'　暗赤褐色土層　細砂
4'　灰色土層　灰層

第11図　H－8号住居址(1/60)・カマド(1/30)

W－1・2・3号溝

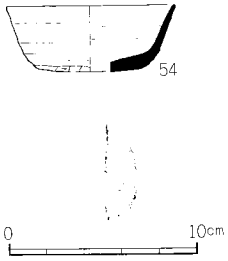
W－1・2・3号溝は、いずれもN－40°～50°－W前後の方位で北西から南東へ偏流する人為的に造成されたものである。水流はどの溝でも確認され、底部にはローリングを受けた遺物が相当量所在していた。B軽石を30%以上含む基本土層のIII層の下で、B軽石降下前の構築である。

（中野）



1　暗褐色土層　細砂
2　暗褐色土層　細砂
3　黒色土層　細砂
4　極暗褐色土層　細砂
5　黒褐色土層　細砂
6　黒褐色土層　細砂
7　黒褐色土層　細砂
8　黒褐色土層　細砂
9　極暗赤褐色土層　細砂
10　暗赤褐色土層　粗砂
11　黒褐色土層　粗砂
12　暗赤褐色土層　粗砂
13　黒褐色土層　粗砂

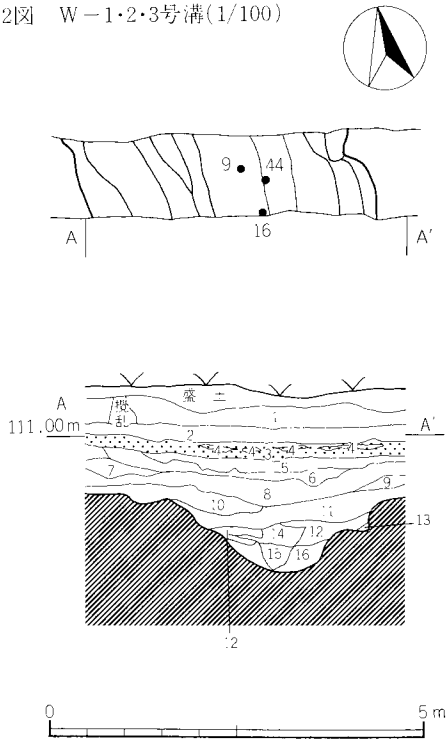
第12図　W－1・2・3号溝(1/100)



第13図　W－1号溝出土遺物(1/4)

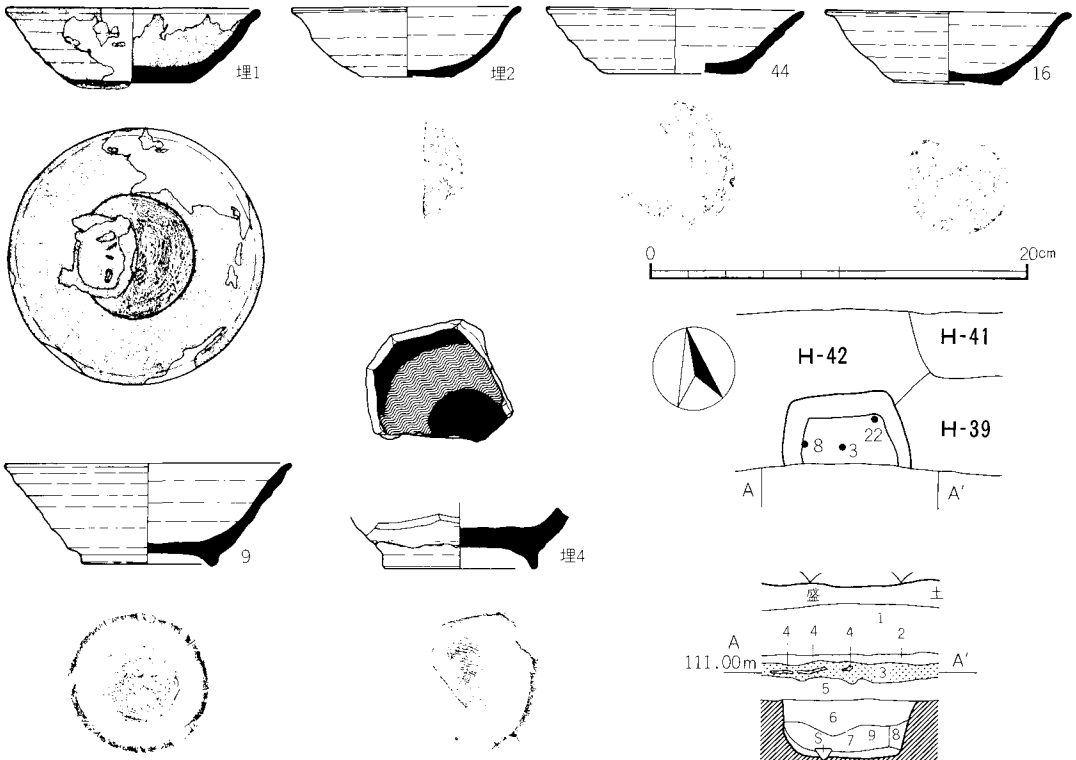
W－23号溝

本溝は、昭和58年度の調査で確認した大溝を南へ延長した位置に所在し、N－1°－Wを測る。断面は、東が一気に落ち込み、西は徐々に落ちる。覆土には、B軽石及びBアッシュがレンズ状に見られるところからB軽石降下時には、すでに埋没していたものと思われる。　（中野）



1　暗褐色土層　細砂
2　暗褐色土層　細砂
3　黒褐色土層　B軽石
4　黒褐色土層　B灰
5　暗褐色土層　細砂
6　黒褐色土層　細砂
7　黒褐色土層　細砂
8　黒褐色土層　粘土
9　黒褐色土層　細砂
10　褐灰色土層　粘土
11　黒褐色土層　粘土
12　黒褐色土層　粘土
13　黒褐色土層　粘土
14　暗褐色土層　粗砂
15　黒褐色土層　粗砂
16　黒褐色土層　シルト

第14図　W－23号溝(1/100)



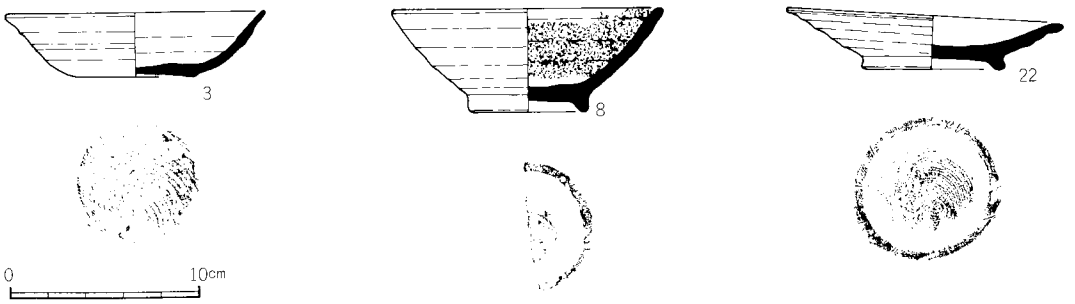
第15図　W－23号溝出土遺物(1/4)

D－18土坑

本土坑は、歪んだ方形で、深さは44cmを測る。底部に安山岩の自然石のほか須恵器3点、他25点を出土している。B軽石の純層に埋没していた。　　(中野)

1	暗褐色土層	細砂	6	暗褐色土層	細砂
2	暗褐色土層	細砂	7	黒褐色土層	細砂
3	黒褐色土層	B軽石	8	暗褐色土層	細砂
4	黒褐色土層	B灰	9	黒褐色土層	細砂
5	暗褐色土層	細砂			

第16図　D－18号土坑(1/60)



第17図　D－18号土坑出土遺物(1/4)

2.　Lトレンチ

14トレンチ東端からほぼ直角方向に延びて、57年度調査1トレンチに接している巾1mのトレンチである。現水田面下の底湿地であるため湧水がひどく、調査の弊害となった。耕作により遺構面をほとんど破壊されていたが僅かに住居址2軒（H—15・18）と溝6条（W—5～10）を検

出した。又、調査区南端ではB軽石下に畦畔状の高まりを検出しているが、調査範囲に制限があり、水田址を検出するまでには至らなかった。57年の調査結果からも本地域付近が集落の東限にあたり、この東方は低地になっていることが確認されている。　（加部）

3．Mトレンチ

幅2m、長さ40mのMトレンチは、住居址13軒、溝2条、土坑7基を検出した。住居址はトレンチ内北側に集中しており、南ほど減少する傾向が見られる。13軒の住居址のうち、石田川式土器を共伴する住居が多い。とくにH－36号住居址は、その傾向が顕著である。H－28・29・30の構築方法は、国分期特有の様想を見せており、連綿とした人々の生活を想起させる。また、溝の2条のうちW－14号溝は、北西から南東へ偏流する。土坑からはかなりの遺物を出土している。覆土の細砂が中心で、炭化物と白色軽石を僅か含む。標高は111.40mで南ほど低い。　（中野）

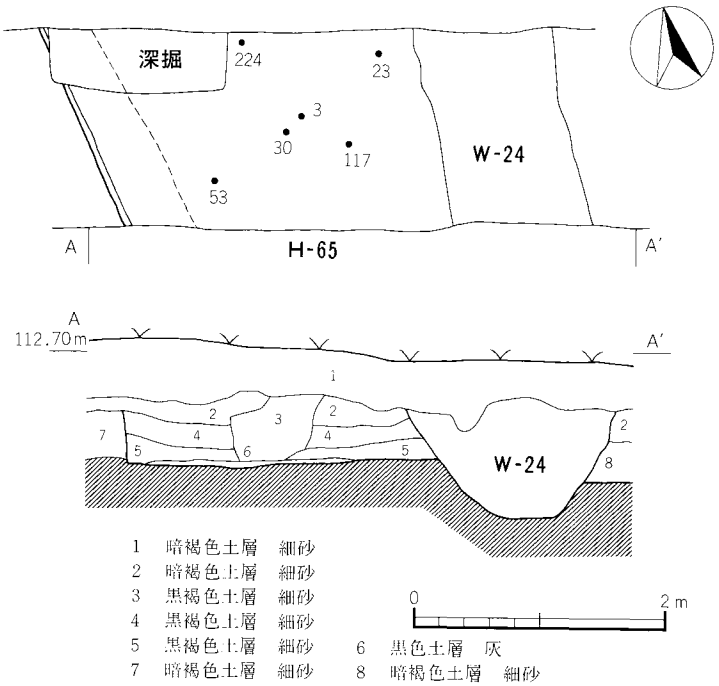
4．3トレンチ

本トレンチは、昭和57年度調査を実施した3トレンチの西側延長部分にあたる。検出された遺構は、住居址11軒、溝4条、土坑6基である。住居址は、ロームより上部の黒褐色土を掘り込んで構築されており、その上多くの重複が見られ、判別に苦しんだ。H－48号住居址からは、猿投系の灰釉陶器椀、「石」のヘラ書きをもつ平瓦が検出されている。溝4条のうち・W－29号溝は、14トレンチのW－23号溝と繋がると考えられる大溝である。　（木暮）

H－48号住居址

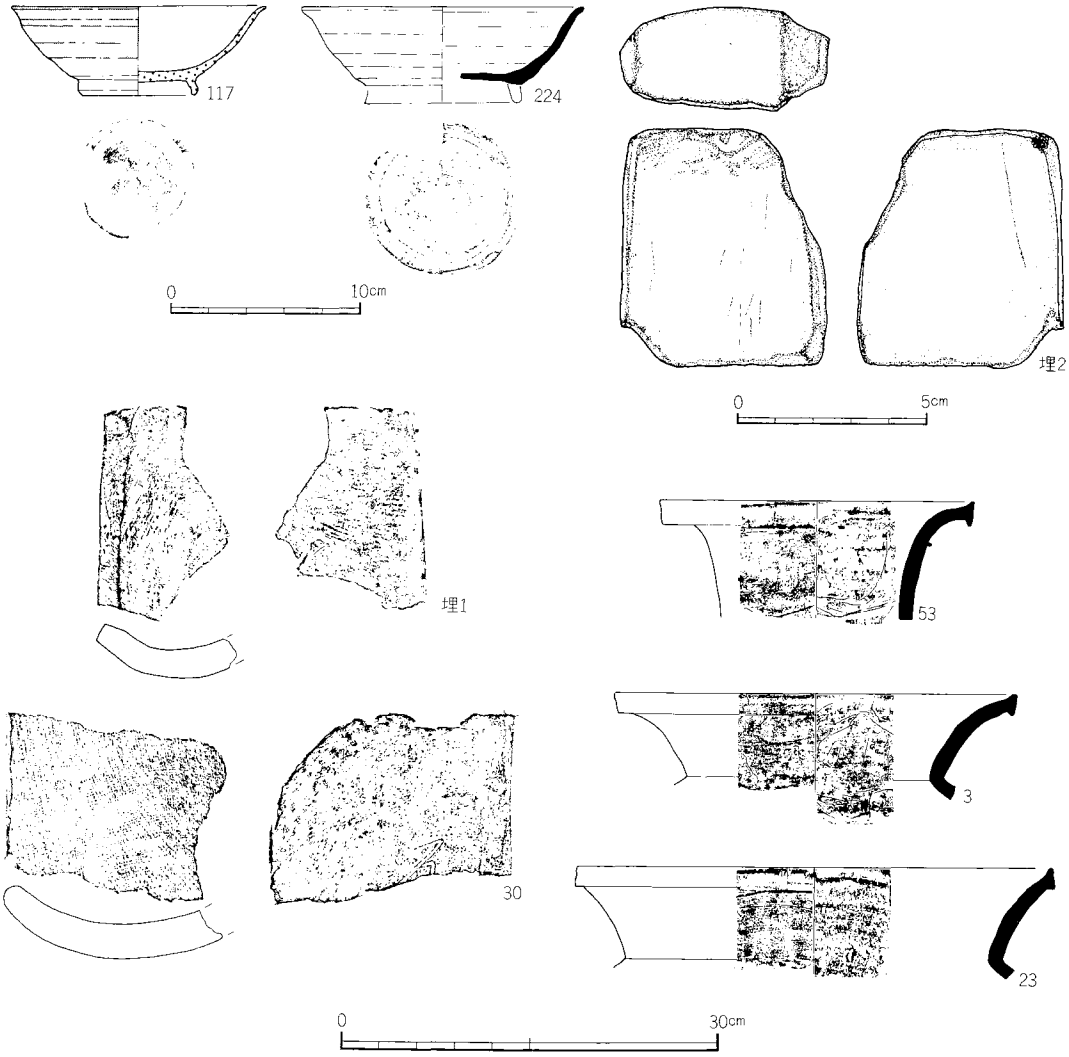
3トレンチのほぼ中央に位置する。H－65号住居址を切って構築されているが、東側をW－24号溝によって切られている。カマドは恐らく東側に付設されていたと想像される。壁高は約10cmを測るが、トレンチ壁面の地断の立ち上がりでは、40cmが確認された。床面は南側中央で堅緻面が拡がっており、その上に炭化物が多く認められた。

遺物は267点検出されている。特に須恵器大甕



第18図　H－48号住居址（1/60）

が集中的に検出されたがあまり接合出来なかった。117の椀は猿投系の灰釉陶器で、K—90の新しい段階と考えられる。猿投窯産の灰釉陶器は、都をはじめとして地方の官衙等にも供給されたと言われるが、本遺跡の場合も、その立地を考えれば首肯できるところである。　　（木暮）

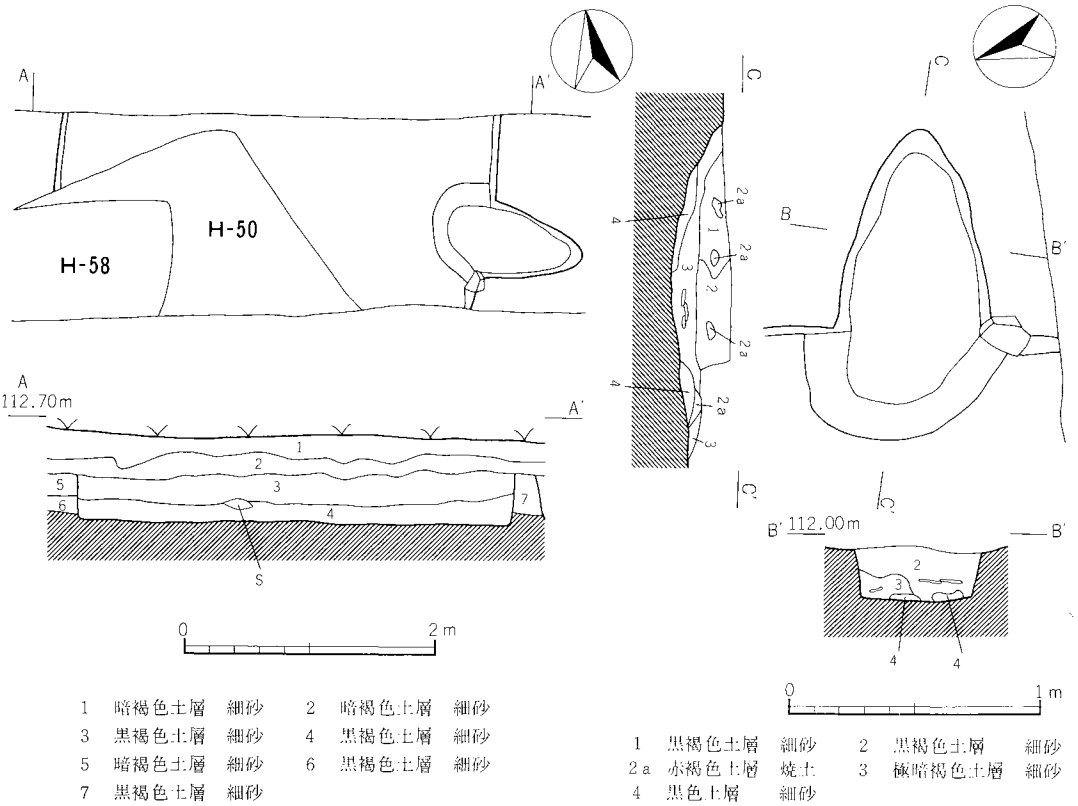


第19図　H－48号住居址出土遺物(¼・½・⅙)

H－53号住居址

3トレンチの西側遺構密集地に所在する。H—59・61・64号住居址、D—30・35・36号土坑を切っているが、H—50号住居址に切られている。東にカマドをもつ方形の住居で、東西軸長3.5mが推定される。壁高は10cmを測るが、トレンチ壁面の地断の立ちあがりは、40cmが確認された。

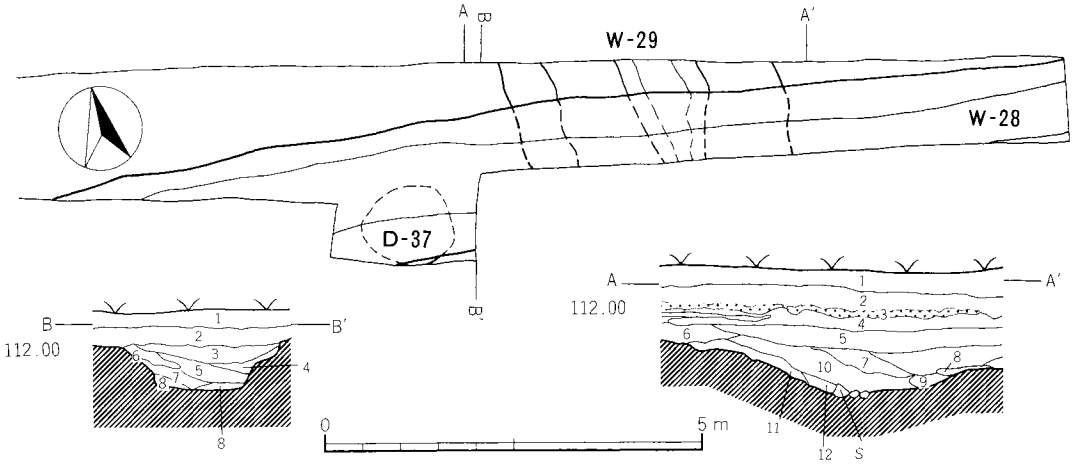
カマドは東壁に付設され、主軸方位N—101°—Eを指す。規模は長さ82cm、幅50cmで、右袖に円礫が使用されていた。遺物は合計101点を検出したが、図示できるものはなかった。遺物の小片および重複関係から、平安時代の住居と考えられる。　　（木暮）



第20図　H－53号住居址(1/60)・カマド(1/30)

W—28・29号溝

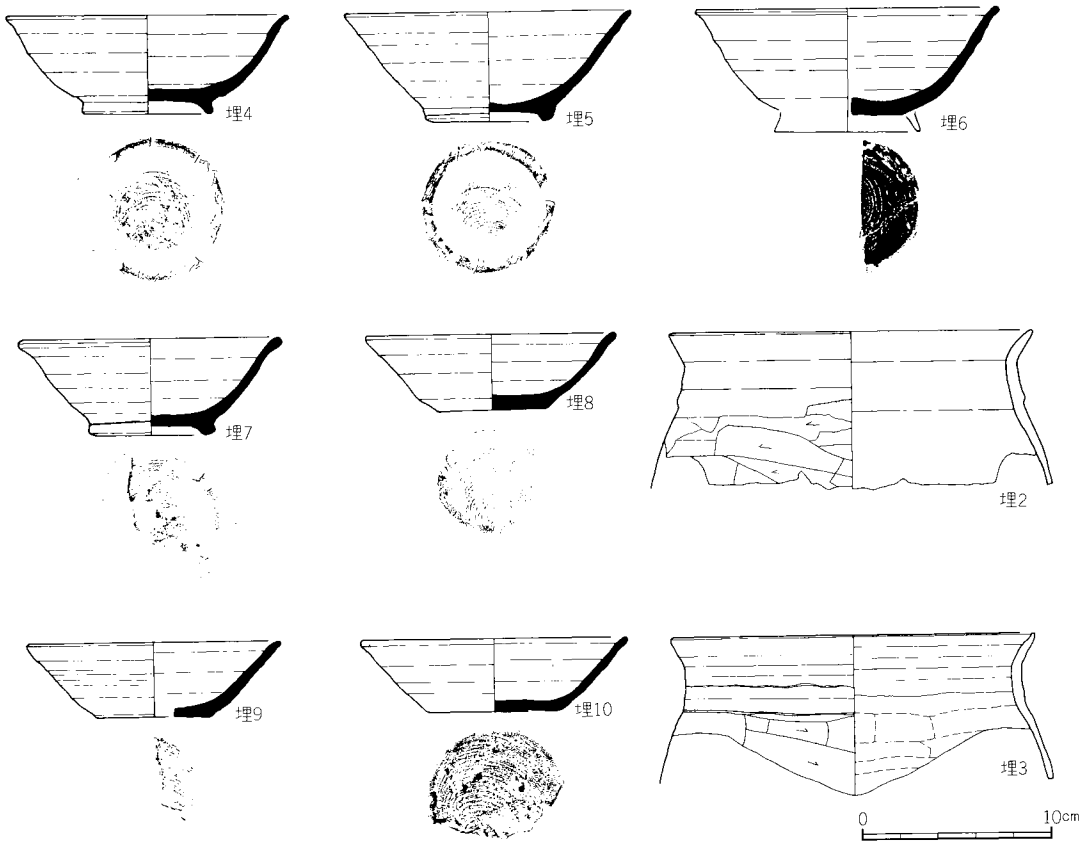
3トレンチの東側から、直交する2条の溝が検出された。W—28号溝は東西方向、W—29溝は南北方向に走行しており、溝底部の細砂の堆積状況から判断すると、前者は西から東へ、後者は北から南へ水流していたものと想定される。新旧関係は、W—28号溝の方が新しい。W—29号溝の覆土からは、浅間B軽石の純層が確認されているが、この軽石層が溝底部からかなり高い位置に存在することから、B軽石降下時には、溝はその機能を失っていたと推定される。一方、W—28号溝は、W—29号溝覆土のB軽石層を切っている。溝の規模は、W—28号溝が、上端幅180cm、下端幅90cm、地表面からの深さ108cmで、断面形は比較的しっかりした逆台形を呈し、主軸方位N—91°—Eを指す。W—29号溝は、上端幅350cm、下端幅40cm、深さ170cm、主軸方位N—4°—Wを指す。溝の底部はロームになっており、肩の上がりが、西側のロームの方が東側より高いことが特徴的である。W—28号溝はトレンチにやや平行するように検出されたが、ここは一部分現状の道路と重複する。現道は一部曲がっているが、走行方向が溝に近いことから、この溝と深い関係をもつ可能性も考えられる。W—29号溝は、位置的に本年度調査した14トレンチのW—23号溝と接続するもので、さらに過年度調査した8W—1号溝と同一である。



1　暗褐色土層　細砂　　5　黒褐色土層　細砂
2　暗褐色土層　細砂　　6　黒褐色土層　細砂
3　暗褐色土層　細砂　　7　黒褐色土層　細砂
4　黒褐色土層　細砂　　8　黒褐色土層　細砂

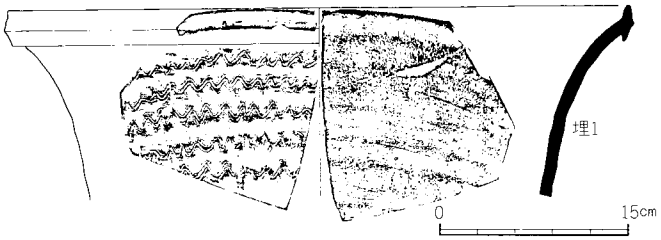
1　暗褐色土層　細砂　　5　黒褐色土層　細砂　　10　黒褐色土層　細砂
2　暗褐色土層　細砂　　6　黒褐色土層　細砂　　11　黒褐色土層　細砂
3　黒褐色土層　B軽石　　7　黒色土層　細砂　　12　黒色土層　細砂
4　暗褐色土層　細砂　　8　暗オリーブ褐色土層　細砂
4a　暗褐色土層　細砂　　9　黒褐色土層　細砂

第21図　W－28・29号溝(1/100)



第22図　W－29号溝出土遺物(¼)

W—29号溝からの出土遺物は、10点ほど図示できた。内訳は、土師器甕2点、須恵器坏3点、椀4点、大甕1点である。時期的に多少のバラツキはあるものの、下限を考えれば10世紀後半頃が至当であろう。　　（木暮）



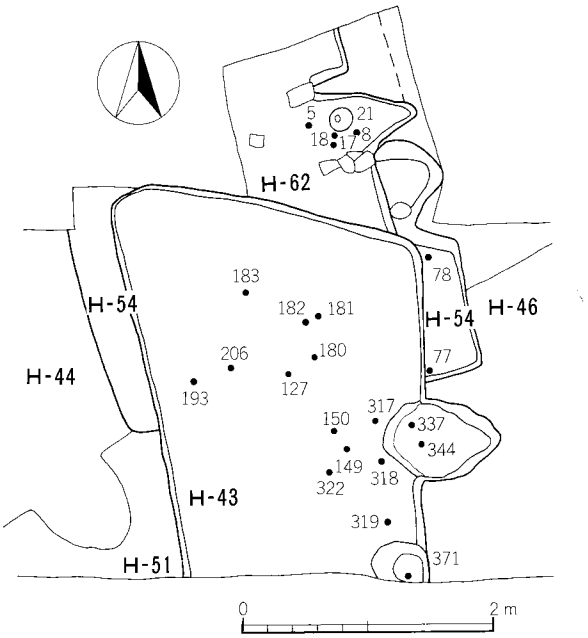
第23図　W－29号溝出土遺物(1/6)

5.　4トレンチ

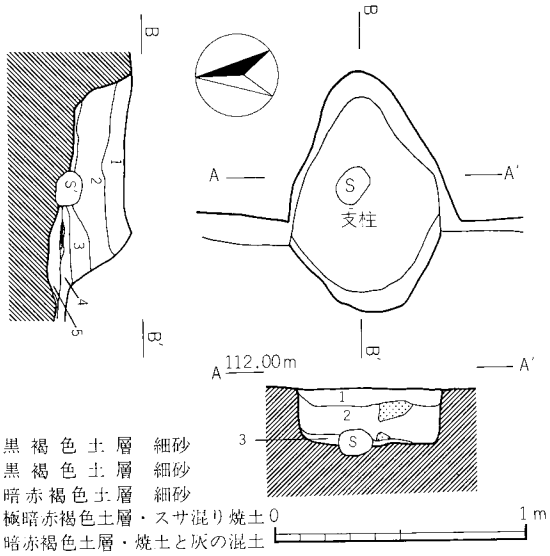
3トレンチの西延長上に位置する。

住居址密集地帯で、古墳時代住居址5軒（H—46・47・54・62・63）奈良平安時代住居址4軒（H—43・44・45・51）、配石遺構1（S－1）土坑3基（D—21・25・30）が僅かな面積の調査区域内に複雑な重複関係を示して混在していた。

遺構はすべてCP混りの黒褐色土層上に構築されており、同質の土なので覆土の見分けが難しく、調査は難航した。　　（加部）



第24図　H-43、H-54、H-62号住居址(1/60)



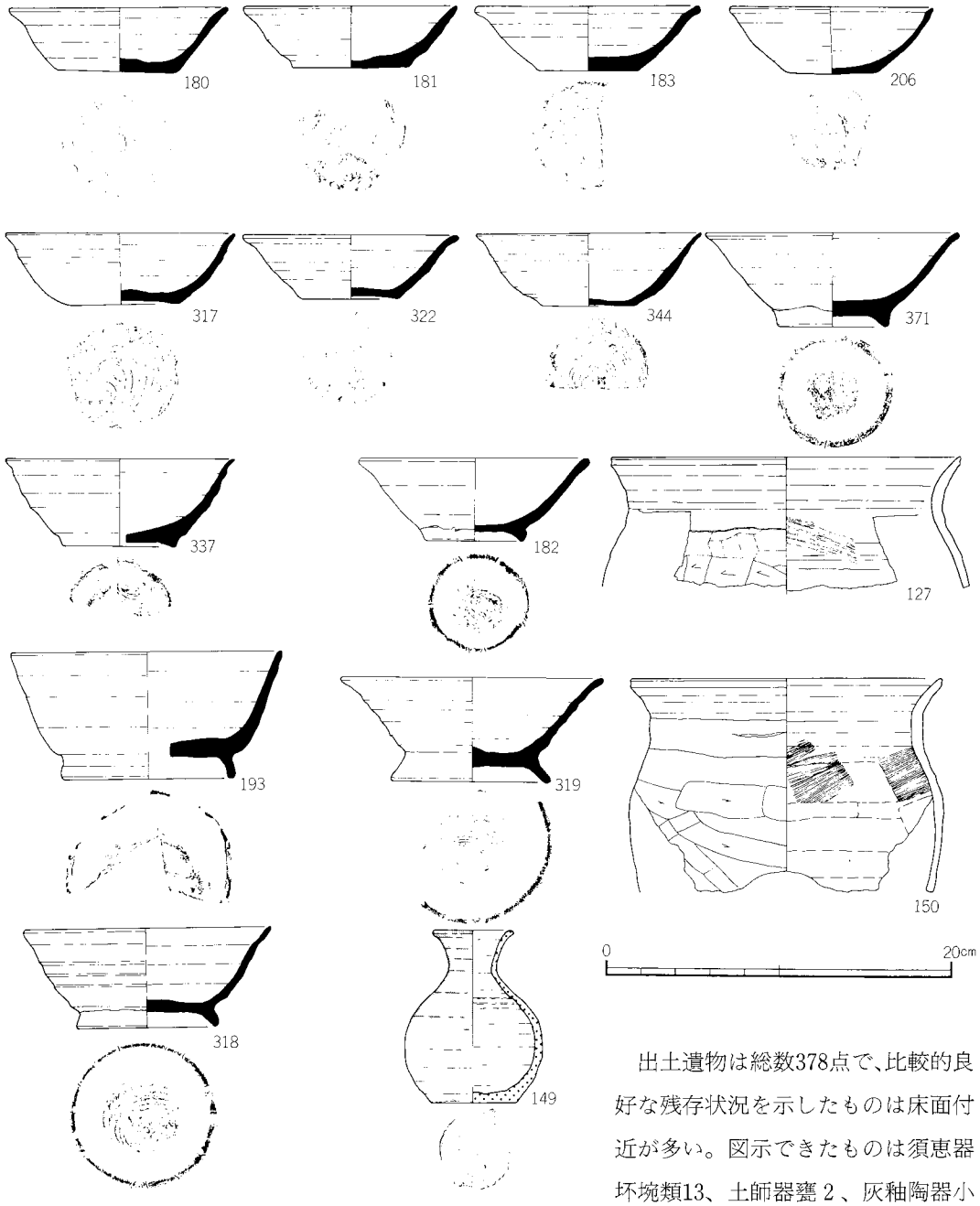
1　黒褐色土層　細砂
2　黒褐色土層　細砂
3　暗赤褐色土層　細砂
4　極暗赤褐色土層・スサ混り焼土
5　暗赤褐色土層・焼土と灰の混土

第25図　H－43号住居址カマド(1/60)

H—43号住居址

4トレンチ中央部に位置する。南端一部が調査区域外のため確認できなかったが、貯蔵穴は確認しており、ほぼ全貌はつかめる。平面形は北壁が南壁より長い不定形で東壁ほぼ中央部にカマドを構築している。

袖は確認されず、上面も削られているため煙道の残りも良くない。燃焼部基底は灰層で中央部に円礫が固定されている。H—44・46・51・54・62と重複関係にあり、そのいずれよりも新しい。　　（加部）

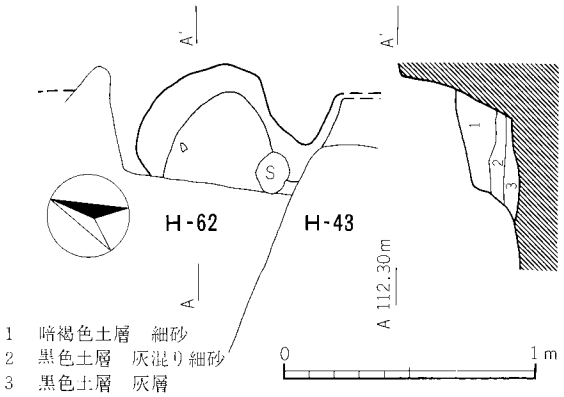


第26図　H－43号住居址出土遺物(¼)

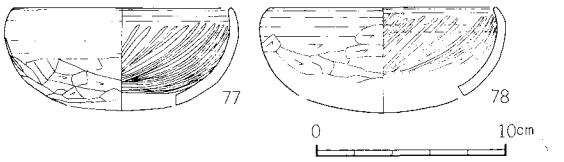
出土遺物は総数378点で、比較的良好な残存状況を示したものは床面付近が多い。図示できたものは須恵器坏埦類13、土師器甕２、灰釉陶器小瓶１であった。甕はいずれも口縁「コ」の字状を呈しており、上半部横方向ケズリが顕著なものである。須恵器埦319は足高高台状を呈し、埦371は貯蔵穴内からの出土であるが、清里陣場編年の３期に比定されるものであり、いずれも10世紀前半代の所産と考えられる。灰釉小瓶は底部糸切り未調整で光ヶ丘１号窯に認められるものであり、10世紀後半代に比定される。全体的に10世紀前半～後半の年代が与えられよう。　（加部）

H－54号住居址

H－43の北方に位置する。重複関係はH－43・44・51・62より古く、H－46よりも新しい。遺構の大半は他の住居址との重複により破壊されているが、大方のプランは摑むことができる。規模が一辺3m前後の方形で、東壁のほぼ中央部にカマドを構築している。袖部はH－62によって破壊されているが、残存部分内壁に一石残っており、近隣するH－62カマド同様石を補強して用いていたと推定される。周溝、ピット、貯蔵穴などはいっさい検出されず、部分的に貼床が施されていた。



第27図 H－54号住居址カマド(1/30)

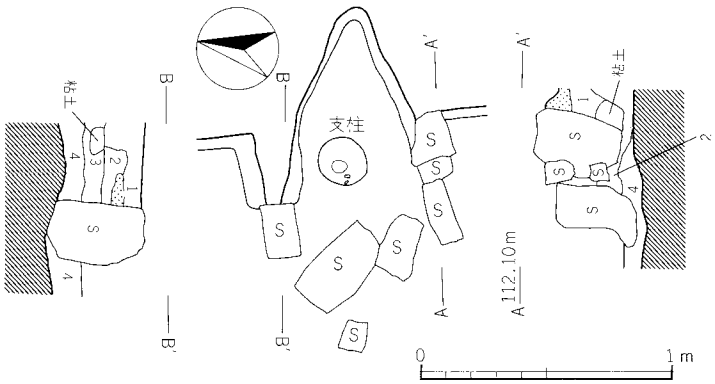


第28図 H－54号住居址出土遺物(1/4)

出土遺物は殆んど全貌を復し難い小破片であったが、僅かに土師器坏が2点図示できた。いずれも素口縁で端部がやや内傾するタイプで内面の暗文状ミガキが顕著である。住居址含土の中からはFAの検出はなかったが、これらの土器はFA下から出土する一群と共通するものであり、5世紀第Ⅳ四半期の年代を比定することができる。なお、カマド立ち割の際、掘り方内より骨片が出土した。種族、部位等は不明であるが隣接するH－62、63でも確認しており、儀礼的なものか興味を引くものである。(加部)

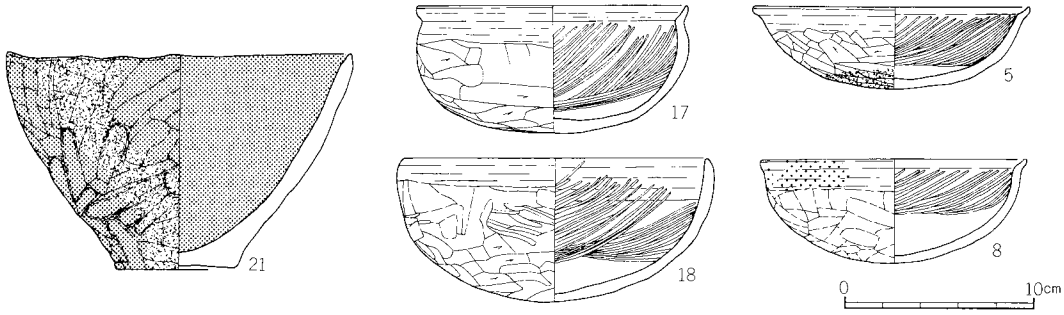
H－62号住居址

カマド周辺部のみを残存する。重複関係はH－43より古く、H－46・54より新しいが西側のプランについてははっきりせず、他の殆どが調査区域外である。従って、H－44・51との切り合い関係は不明であるが、出土遺物からみてそれらより先行すると思われる。



第29図 H－62号住居址カマド(1/30)

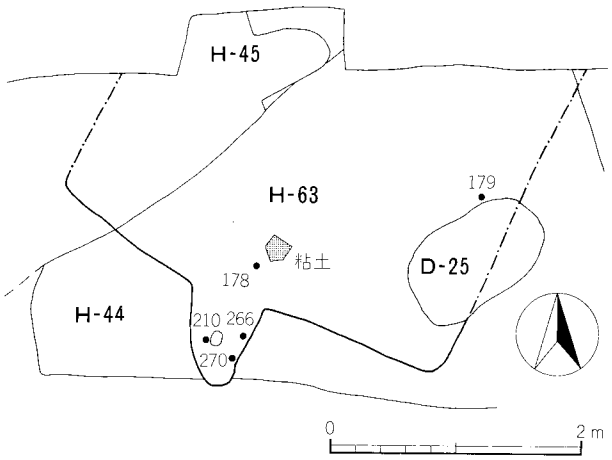
カマドは東壁に位置し、両袖と構架材に染谷川周辺で産出される凝灰岩切石を用いて鳥居状に組んでいたと推定される。燃焼部中央には支柱に利用されたと思われる粗製土器が伏せてあった。この中から骨片が2片出土している。 (加部)



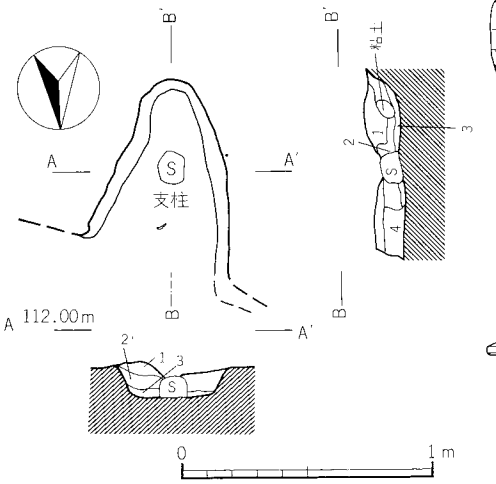
第30図　H－62号住居址出土遺物(1/4)

図示した遺物はすべてカマド周辺部より出土した。いずれも完形品で、破棄されたカマドを覆うような形で伏せてあった。坏類はティピカルな内斜口縁の8とややつぶれた浅身の5、椀と呼ぶにふさわしい深身で口唇の立ちあがる17と素口縁でやや大型の18があり、いずれも内面の暗文状ミガキが顕著である。支柱の21は外面をナデによって輪積痕を消しただけの、胎土調整の粗い特異な鉢である。これに上半部を積んでヘラ削りを施せば普遍的な長胴甕の形態になりうるのであり、一般的には製作途中の段階のものを完成品としている。おそらく当初よりカマド支柱を意識していたのではなかろうか。骨片はこの伏鉢に覆われた中から出土したもので、流動性の激しいカマド内のことなので、どの段階で入れられ、何を意味するのか明らかでない。　(加部)

H－63号住居址

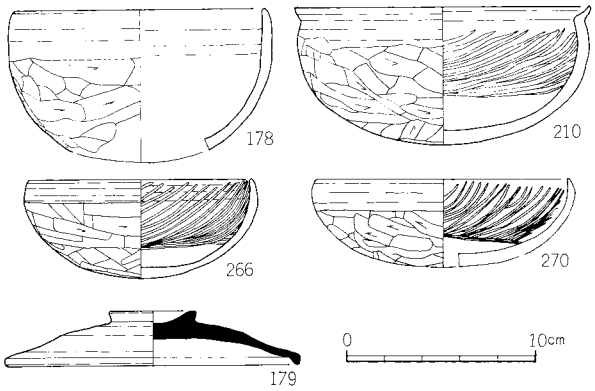


第31図　H－63号住居址(1/60)



1　黒褐色土層　細砂　　3　黒色土層　灰層
2　暗褐色土層　細砂　　4　褐色土層　灰混り細砂

第32図　H－63号住居址カマド(1/30)



第33図　H－63号住居址出土遺物(1/4)

4トレンチ西端に位置する。H—44・45・51・D—25・S—1と重複し、そのすべてに先行する。重複する遺構は本住居址すべての面に及んでおり、壁面はまったく失われているが、床面の広がりから住居址の範囲を確定することはできる。

プランは北壁が調査区域外のため南北規模は不明だが、東西8.3mの方形を呈す。南壁中央部に南西方向に軸を持つカマドを構築していたが、H—44によって上部と袖部を破壊され、僅かに基底部付近が残っていた。燃焼部中央に円礫が据えられ、支柱としていた内壁の焼けは弱く、焼土は少なかった。又、カマド前面に白色粘土の集積が認められたが、構築材に関連するのかどうか明らかでない。なお、カマド掘り方内より骨片が2点出土している。

出土遺物のうち図示できたのは土師器坏4点、須恵器1点であるが、須恵器は明らかに時期の異なるものであり、重複するD—25に伴うものと思われる。坏は素口縁で口唇が内傾して内面を研磨したもの266、270と深身で口縁をほぼ直立する178、内斜口縁でやや立気味の口唇を持つ210の4点が出土している。いずれも5世紀終末～6世紀初頭の所産と思われる。

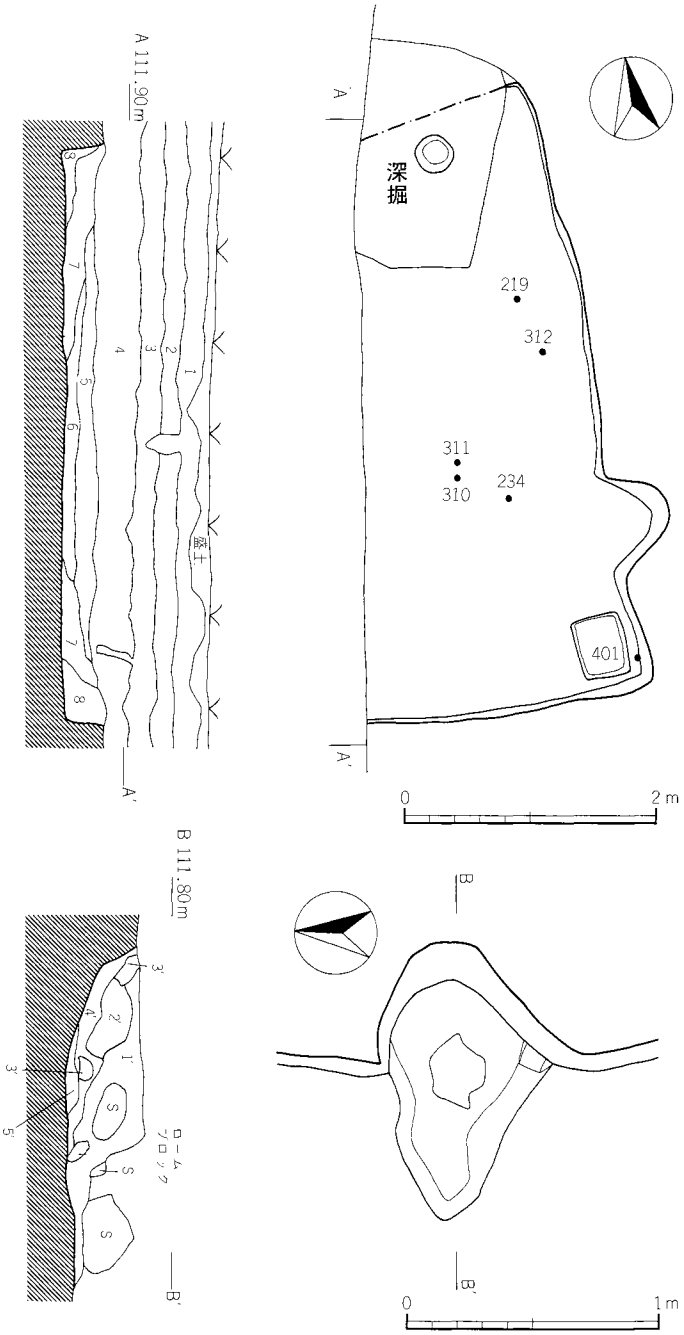
ほぼ同時期と思われる隣接する3軒の住居址のカマド掘り方内からいずれも骨片を出土していることは注目に値する。これらは単に肉類を食していたことを示すだけでなく、カマド祭祀に纏わる儀礼的なものとは考えられないだろうか。　(加部)

6.　Cトレンチ

Cトレンチは、牛池川を西に見おろす台地上にあり、標高は113.0mほどを測る。トレンチ幅は3m、長さは25mほどで、住居址3軒、小規模な溝2条、土坑7基、掘立柱建物址1棟を検出した。H—60号住居址は典型的な古墳時代の住居址で坩を7個体出土した。H—52号住居址は、羽釜を出土する平安時代の住居址である。B—2号掘立柱建物址は、真北方向を指しており、律令時代の建築物と思われる。H—52号住居址から出土した軒平瓦は、この地域が上野国府の所在地であることを改めて想起させる。住居址の分布は、他のトレンチに比べて疎である。　(中野)

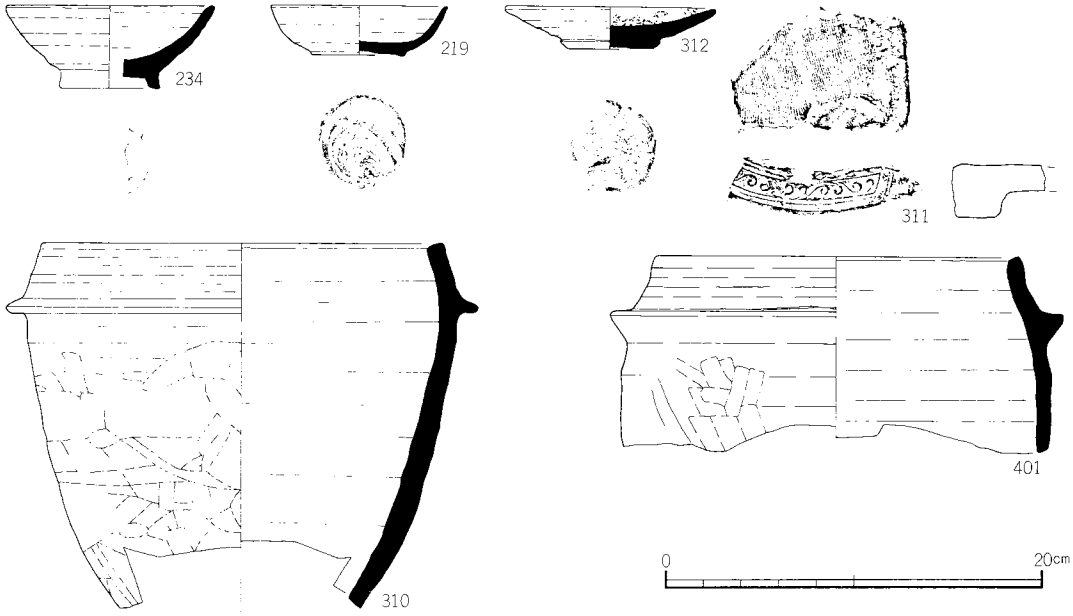
H－52号住居址

本住居址は、Cトレンチの南に位置する。トレンチ発掘のため全体を確認していないが、平面プランは概ね歪んだ方形を呈するものと思われる。長軸方向は4.9mを推定できる。周溝は検出されなかった。貯蔵穴は、方形で、南東の隅にあり、床面からの深さは36cmを測る。埋土内には、灰・炭化物・遺物が混入する。住居の覆土は、細砂でφ2～3㎜の白色軽石を含み、炭化物も微量含む。壁は固くしまっており、シャープに立ちあがる。床面は、凹凸が少なく堅緻でかなりしっかりしている。貼床は全面に施されている。カマドは、残存が良好で火床面には明褐色の焼けた粘土の層が見られた。また、袖石と思われる面取りのある凝灰岩が有り、ススの付着した天井石と思われる緑泥変岩と熱を受けてボロボロになった花崗岩も検出された。出土遺物は、土師器・須恵器・灰釉陶器が436点出土している。2点の羽釜と軒平瓦の出土は注目に値する。本住居址の床下からB－2号掘立柱建物址の柱痕が検出されているところから、B－2の廃棄後に本住居址が構築されたもようである。（中野）



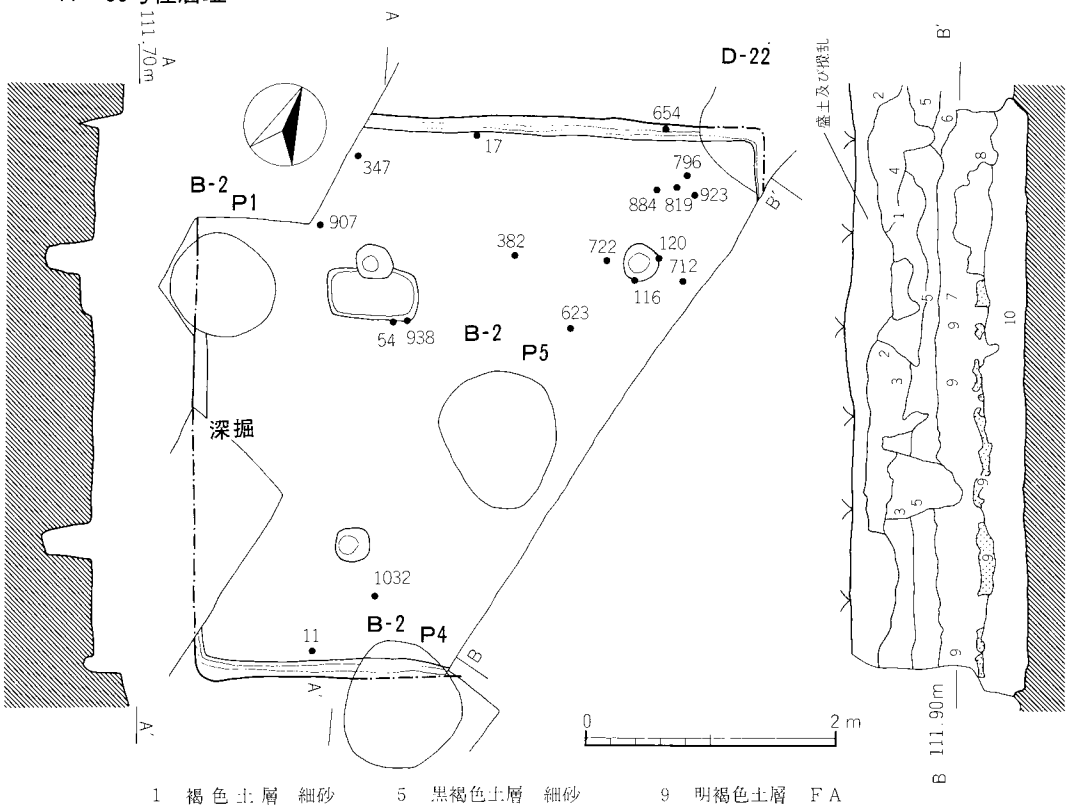
1　褐色土層　細砂
2　暗褐色土層　細砂
3　黒褐色土層　細砂
4　赤褐色土層　細砂
5　暗褐色土層　細砂
6　黒褐色土層　細砂
7　黒褐色土層　細砂
8　黒褐色土層　細土
1'　暗赤褐色土層　細土
2'　暗褐色土層　細土
3'　極暗赤褐色土層　細土
4'　極暗赤褐色土層　細土
5'　明赤褐色土層　焼土

第34図　H－52号住居址(1/60)・カマド(1/30)



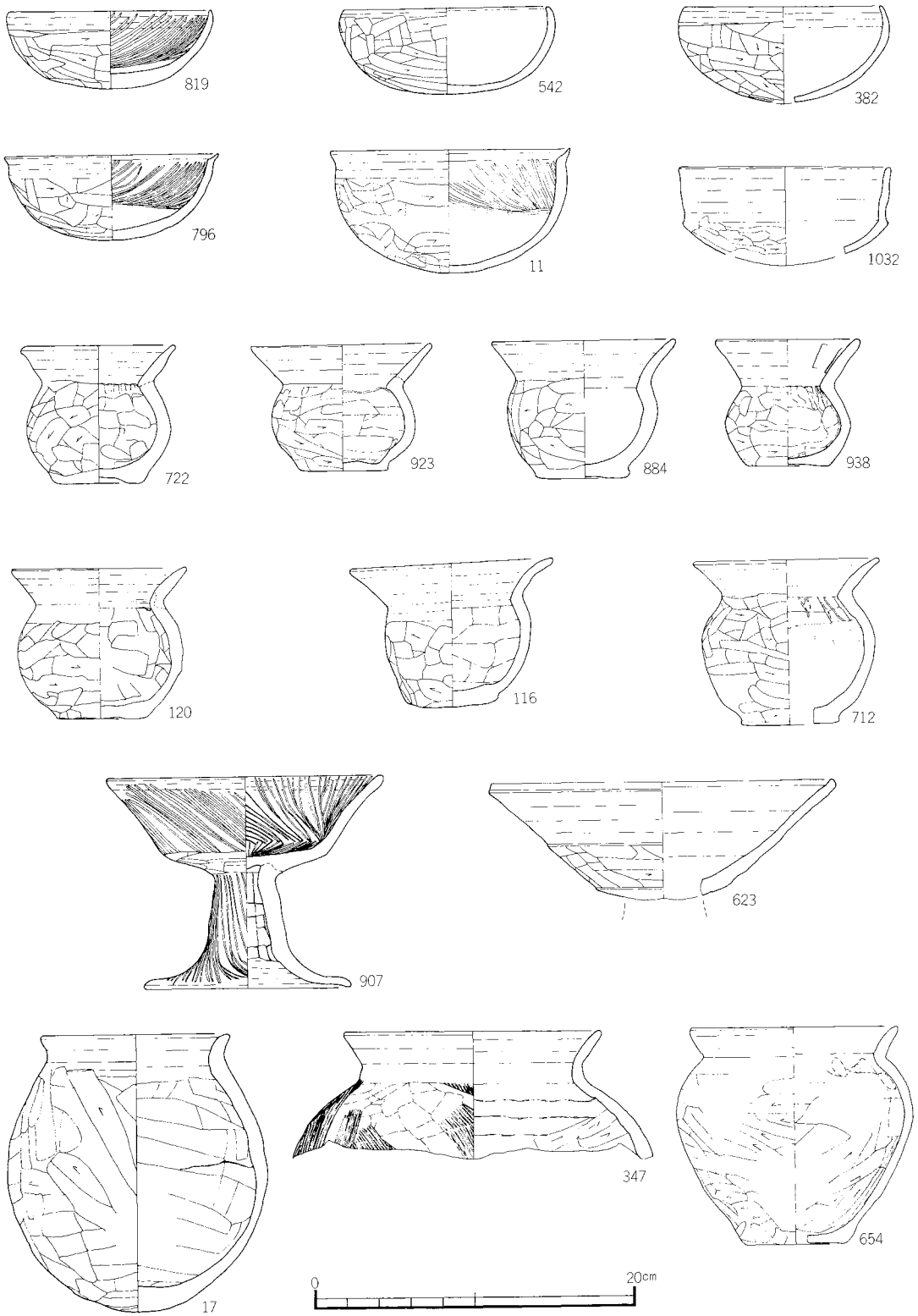
第35図　H－52号住居址出土遺物(1/4)

H－60号住居址



1	褐色土層	細砂	5	黒褐色土層	細砂	9	明褐色土層	FA
2	暗褐色土層	細砂	6	暗褐色土層	細砂	10	黒褐色土層	細砂
3	黒褐色土層	細砂	7	赤褐色土層	細砂			
4	暗褐色土層	細砂	8	黒褐色土層	細砂			

第36図　H－60号住居址(1/60)

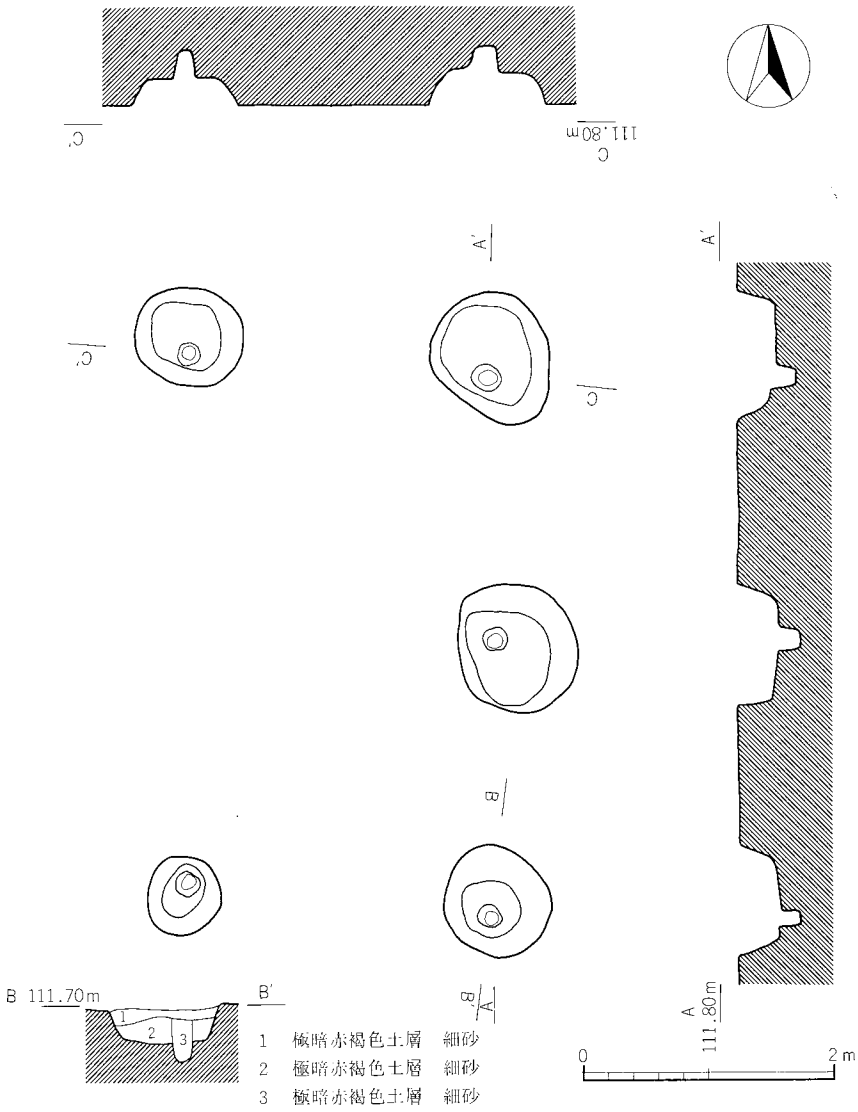


第37図　H－60号住居址出土遺物(¼)

本住居址は、Cトレンチの中央部に位置する。平面形は、整美な正方形を呈する。長軸方向で4.48m、短軸方向で4.42mを測る。柱穴は、3本確認され、床面からの深さは25cm前後である。周溝は明確で、全周しているもようである。覆土は、細砂でφ1～7㎜の軽石を僅か含む。断面の9層にはFA層が見える。確認壁高は、22cmで固くしまっており、シャープに立ちあがる。床面は平らに仕上がり堅緻である。床面直上からは数多くの遺物が検出された。遺物は土師器が中心で、坩が7個体出土したのは注目される。その他には高坏・小壺・内斜口縁坏・模倣坏などが検出された。隣接するD—22・29やB—2号掘立柱建物址は本住居址の廃棄後に構築されたもようで、時期としては鬼高I式期で6世紀の前半には廃棄されていたもようである。（中野）

B—2号掘立柱建物址

本建物址は、Cトレンチのほぼ中央に位置する。建物の方位は、N—0°—Wと、真北を指す。柱穴間の心々距離は、東西方向が2.40m、南北方向が4.16mで、ほとんど整った位置に配置されている。各々の柱穴内には明瞭な柱痕が残り、柱の太さも20cm前後と推定できる。柱穴の最深のレベルは111.16m（平均値）で、ほぼ整った深さを測っている。共伴する遺物は土師器小破片が僅かあるのみである。（中野）



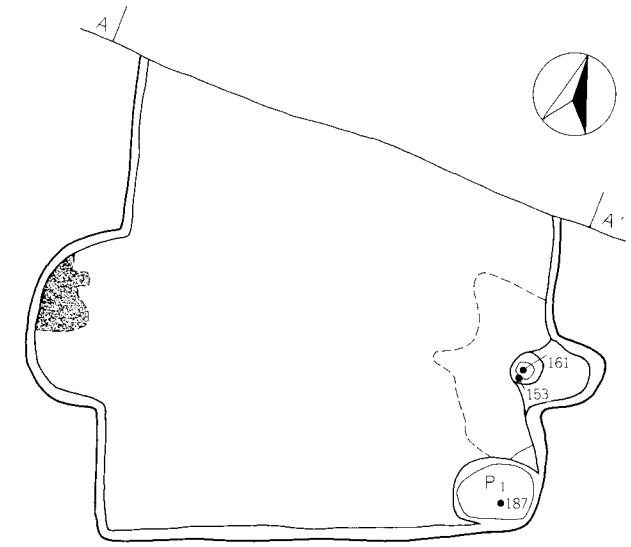
第38図 B—2 掘立柱建物址（1/60）

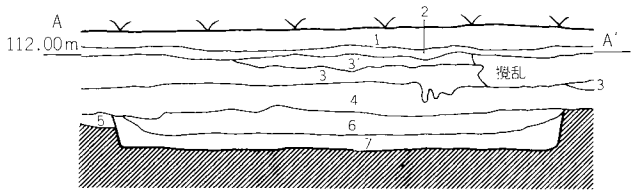
7. 15トレンチ

本トレンチは、牛池川東の低地帯を見おろす微高地に位置する。標高は、約112mを測る。住居址は6軒確認され、そのうち2軒は石田川式土器を出土する。また、F・Aを覆土中に有する住居址が1軒、その他は奈良・平安時代のものである。ほぼ全面的に住居址が構築されており、連綿とした人々の生活の歩みが看取できる。また、北西から南東へ伸びる比較的大規模な2段掘りの溝が1条、土坑が9基、井戸が3基検出された。井戸は割合に大型なものもあり、ロームの地山までしっかりと掘り込まれていた。溝は水流の形跡はなく空堀と推定される。　　(町田)

H－66号住居址

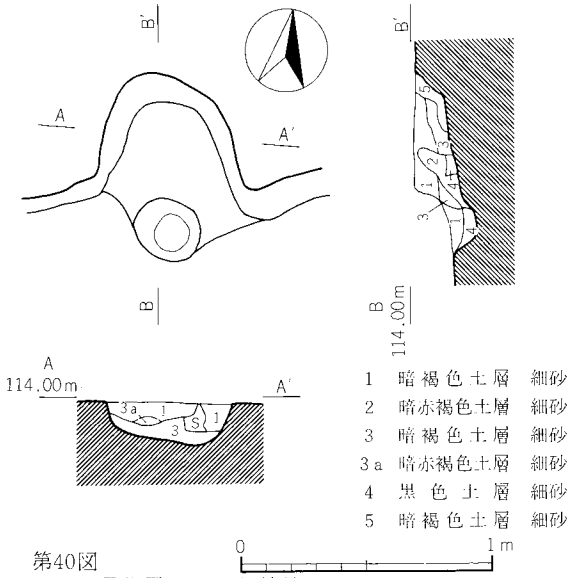
本住居址は、15トレンチ中央のやや東寄りに所在し、H－68号住居址を切って構築されている。トレンチ発掘のため北¼は未発掘だが、ほぼ整った長方形のプランを想定できる。住居内東壁にカマドを有し、西壁にはちょうどカマドと対をなすように半円形の張出部を有する。貯蔵穴は、南東隅にあり床面とのレベル差は20cm前後を測る。平面形は楕円で、ていねいに掘り込まれている。確認壁高は15cmだが、地層断面から判断して40cmほどを推定できる。壁は堅緻で、シャープに立ち上っており、検出は容易であった。床面はよく締まっており、平らで凹凸が少ない。張出部の床面直上には、炭状の炭化物が多少散在する。カマドは、一部が崩落しているものの、良好な残存で幅70cm、長さ80cmを確認した。壁面の焼けぐあいは明瞭で、焚口部には灰かき穴と思われる小ピットがあり、灰が堆積していた。煙道部はゆるやかに立ち上っており、焚口部とのレベル差は40cmを測る。カマド内からは構築材として使用したと思われる安山岩が検出された。遺物としては、貯蔵穴の底部より出土した須恵器坏187があり、国分期のものに比定される。　　(町田)



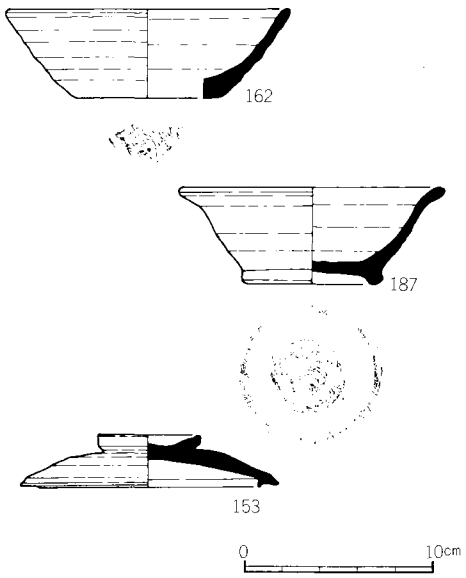


1　暗褐色土層　細砂
2　褐色土層　細砂
3　黒褐色土層　細砂
3'　黒褐色土層　細砂
4　黒色土層　細砂
5　黒色土層　細砂
6　暗赤褐色土層　細砂
7　暗赤褐色土層　細砂

第39図　H－66号住居址(1/60)



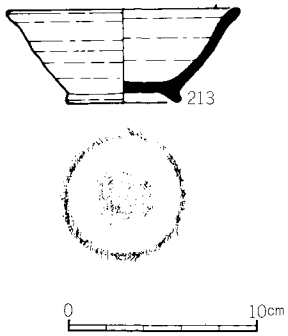
第40図
H－66号住居址カマド(1/30)



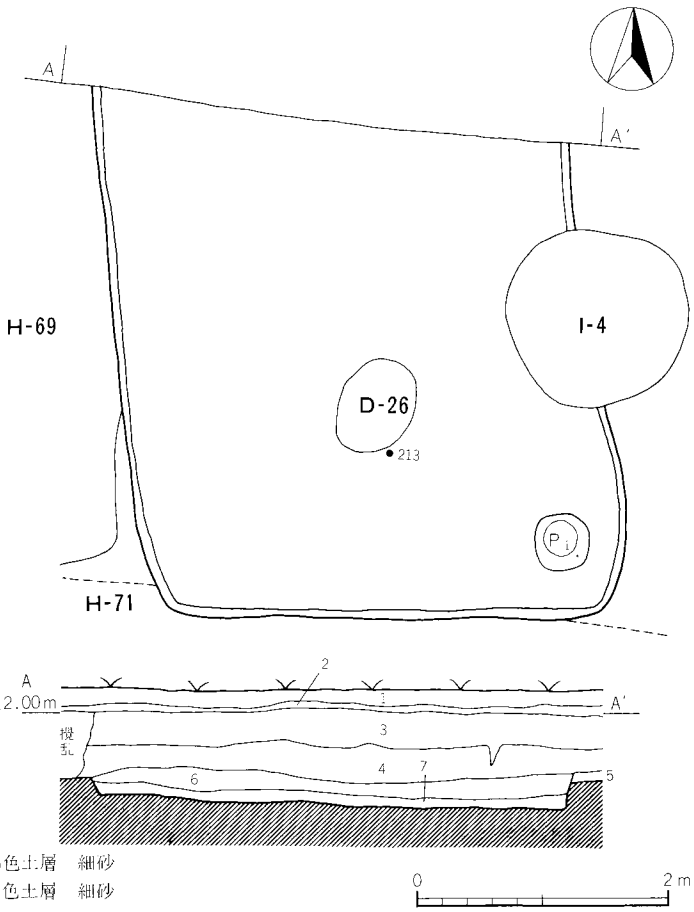
第41図　H－66号住居址出土遺物(1/4)

H－67号住居址

本住居址は、15トレンチ中央西寄りに位置し、H－69号住居址とH－71号住居址を切って構築されている。平面プランは、隅丸の長方形を想定する。壁はシャープに立ち15～18cmを測



第42図　H－67号住居址出土遺物(1/4)

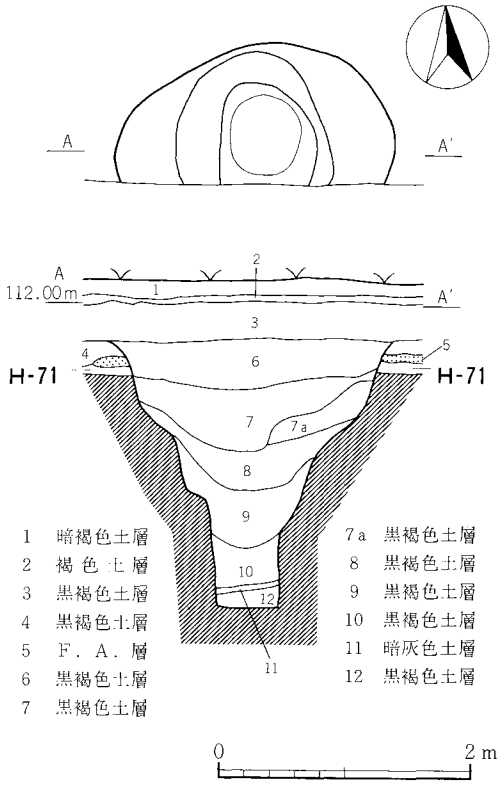


第43図　H－67号住居址(1/60)

る。床面は堅緻で平らに仕上っており、貼床が施されている。カマドは、ちょうどＩ－４号井戸の構築によって破壊・掘削されてしまったもようで焼土を確認したのみである。　（町田）

Ｉ－３号井戸址

本井戸址は、15トレンチ中央南寄りに位置する。15トレンチ南壁断面にあるＦ・Ａ下のＨ－71号住居址を切って構築されている。確認面での平面形は、東西2.1m、南北1.4mを測る楕円形である。一方、底部では、直径50cmほどの円形を呈する。断面形は大きく開いた口が２段階に大きくすぼまり、底部付近では一気に直に落ち込んでロームを掘り込んでいる。深さは、確認面から底部まで約2.1mほどで、かなり大型である。覆土をみると、１～４層にはＢ軽石を多量に含んでいる細砂が見られる。また、６層には暗灰色の灰層があり、本井戸址の廃棄と何らかの関連を想起させる。　（町田）



第44図　Ｉ－3号井戸(1/60)

8．16トレンチ

群馬町に源を発する牛池川は、同町を南東に流れ、前橋市内に入るとやや南に向きを変え、元総社町の南部で染谷川に合流する。総社神社あたりでは、牛池川は神社の東をほぼ南に流れているが、この付近から県道安中・前橋線に至る370mには、牛池川の氾濫原を思わせる谷地状の低地が、現在も明瞭に見られる。谷地の幅は、最も広い箇所で、台地面までの比高は1.5～２m、現牛池川は谷地の西端を流れている。

本トレンチは、南北に長い牛池川の氾濫原の谷地状の低地に、東西に設定したものである。規模は、長さ35m、幅1.5mで、西側については若干拡張した所がある。トレンチの位置は谷地のほぼ中央で、元総社小学校のすぐ東にあたる。この小学校の校庭からは、昭和36～38年の調査で、２棟の掘立柱建物址が検出されている。付近では第１表に掲げた通りたくさんの調査が行われているが、牛池川の谷地状の低地を調査したのは、今回がはじめてである。

調査の結果、本トレンチから検出された遺構は、次の通りである。まず掘立柱建物址の柱穴。三個の柱穴を検出したが、地層断面のみの検出であったため、またトレンチ調査のため全貌は捉えられなかった。しっかりした掘り方を持つ柱穴で、時期は地層断面の判断では、浅間Ｂ軽石降下以前、出土遺物としては10世紀代の灰釉陶器片が確認された。

ついで、大溝一条を検出し、Ｗ－30号溝とした。トレンチの全域が溝内であると思われ、粗砂

の堆積状況から、何度も流れの状態が変化したと考えられる。一応溝としたが、自然の川の可能性が強い。流れの方向は北から南で、覆土に浅間B軽石層が厚く確認された。確認位置はトレンチの東西両端に近い所で、東側については第45図に示した。トレンチの中央部が河床と思われるが、河床まで掘り出せなかった。水の少ない時期の調査であったため、3m程度掘り下げたが、これが狭いトレンチ調査の限界で、河床はさらにその下であった。遺物は、平安時代の土器片が多く出土しており、グリッドごとに取り上げた。図示できたものを第48図に掲げたが、6Gは灯明皿と思われる灰釉陶器、埋2は内面底部に意味不明の墨書のある須恵器坏である。このほか木器2点が出土しており第59図に示した。

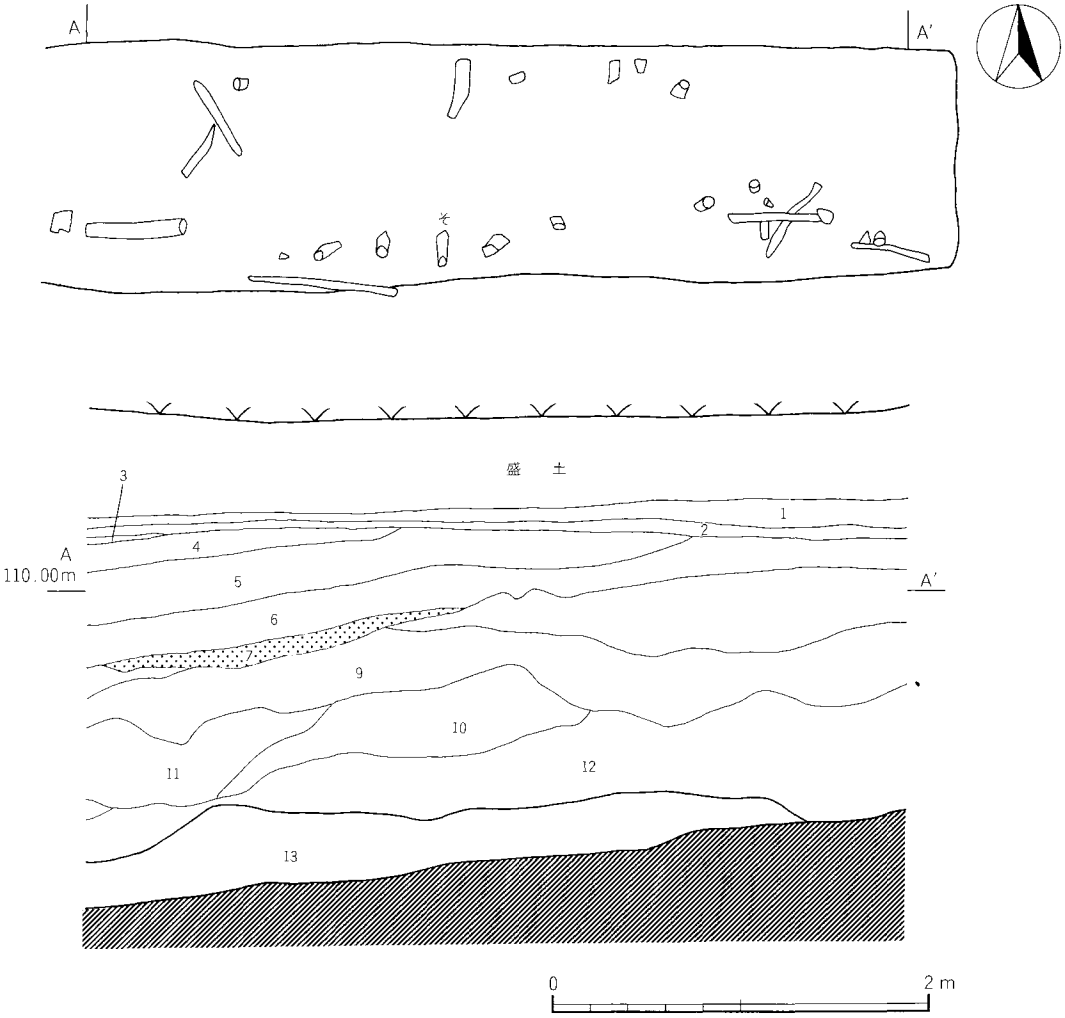
最後に、W—30号溝の下から杭列を検出した。杭列の出土範囲は第5図に示したが、中央欠落部は、W—30号溝によって切られているためである。杭列の検出は、層位的には、6世紀前半に降下したとされるFA層直下の泥炭層からである。古墳時代の所産と考えてよかろう。なお、出土遺物は、トレンチ調査の段階で検出したものについてはその番号を用い、その後拡張し掘り下げた段階で検出したものについては番号の前に拡をつけて表現した。（木暮）

杭列

第5図に示した通り、16トレンチの東側と西側で確認され、便宜上東側を杭列A、西側を杭列Bとした。その平面図は第45・47図に示したが、どちらにも杭以外の自然木、木器、部材等検出された木にかかわるものすべてが含まれている。これら木にかかわるものは、総数で700余点に達した。

まず、これらの木に関する遺物の層位であるが、すべて泥炭層から出土している。そのため残存状況はきわめて良好である。第46図は本トレンチ北拡張部の西壁地層断面図であるが、現地表面（水田面）から80cm下からにぶい褐色のFPF—1が確認され、その直下から褐灰色のFA層、さらにその直下から厚さ80～100cmの泥炭層が確認された。つまり、泥炭層の形成はFA降下以前、換言すれば6世紀初頭以前と言うことになる。泥炭層からは、いくつかの土器も出土しているが、第48図からわかるように、これらの坏は所謂「鬼高I式」の範疇で捉えられ、層位的な知見と符合していると言えよう。

次に杭列の拡がりを考えてみたい。前述したように平面的には雑多な木にかかわるものが含まれているが、この中には明らかに加工した杭を垂直に打込んだり、それに横木を通して補強したりという土木工事の様相が見られるものがある。一方、単なる流木と考えられるものも多い。すべてのものについて、この区別を截然と行うのは不可能である。全体の平面的拡がりは、杭列Aはほとんど直立した杭である。杭列Bでは、北拡張部と東側にしっかりした杭列が検出されており、また、横木を直立した杭にからめて補強している様相も見られた。これに対し、杭列Bの西側や南側は、建築部材や自然木が横たわっている状況である。こうした杭列の拡がりから、直立する杭列は、杭列Bの北拡張部からその東にかけて、さらに杭列Aに直線的に繋がっていく傾向が見てとれる。そして、第46図の地層断面図からわかるように、直立する杭列ラインの上には泥

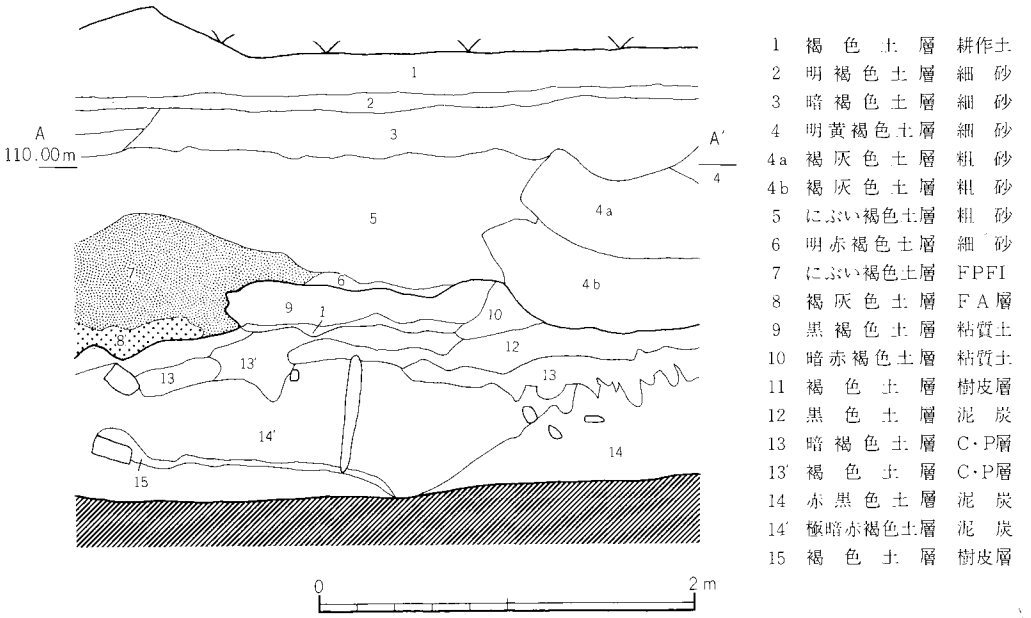


1	黄褐色土層	細砂	6	褐灰色土層	細砂	10	暗赤灰色土層	粘質土
2	明褐色土層	細砂	7	黄褐色土層	B軽石	11	黄灰色土層	細砂
3	暗褐色土層	細砂	8	暗褐色土層	細砂	12	暗赤灰色土層	粘質土
4	暗褐色土層	細砂	9	黄灰色土層	粘質土	13	黒色土層	泥炭
5	黄灰色土層	細砂						

第45図　杭列A（1／40）

炭の高まりが存在することに気づく。以上のことを総合的に考えると、かつてこの地が湿地状の状況にあり、ここに東西ラインに杭を打ち、場合によって横木等で補強し、さらに土を盛り土橋的なものを構築したのではないかと想像される。今後、面的に拡張した調査、特に本トレンチ北西部付近の調査が行われれば、遺構の解明がより進むものと思われる。

木にかかわる出土遺物は、合計700余点である。残存状況はきわめて良好で、物によっては、取り上げた瞬間、若木の青味が残存しているものもあり、樹皮もしっかりしているものが多かった。そのうち、特徴的な遺物を図示し、木器類は最後にまとめた。



第46図　杭列B地断(1/40)

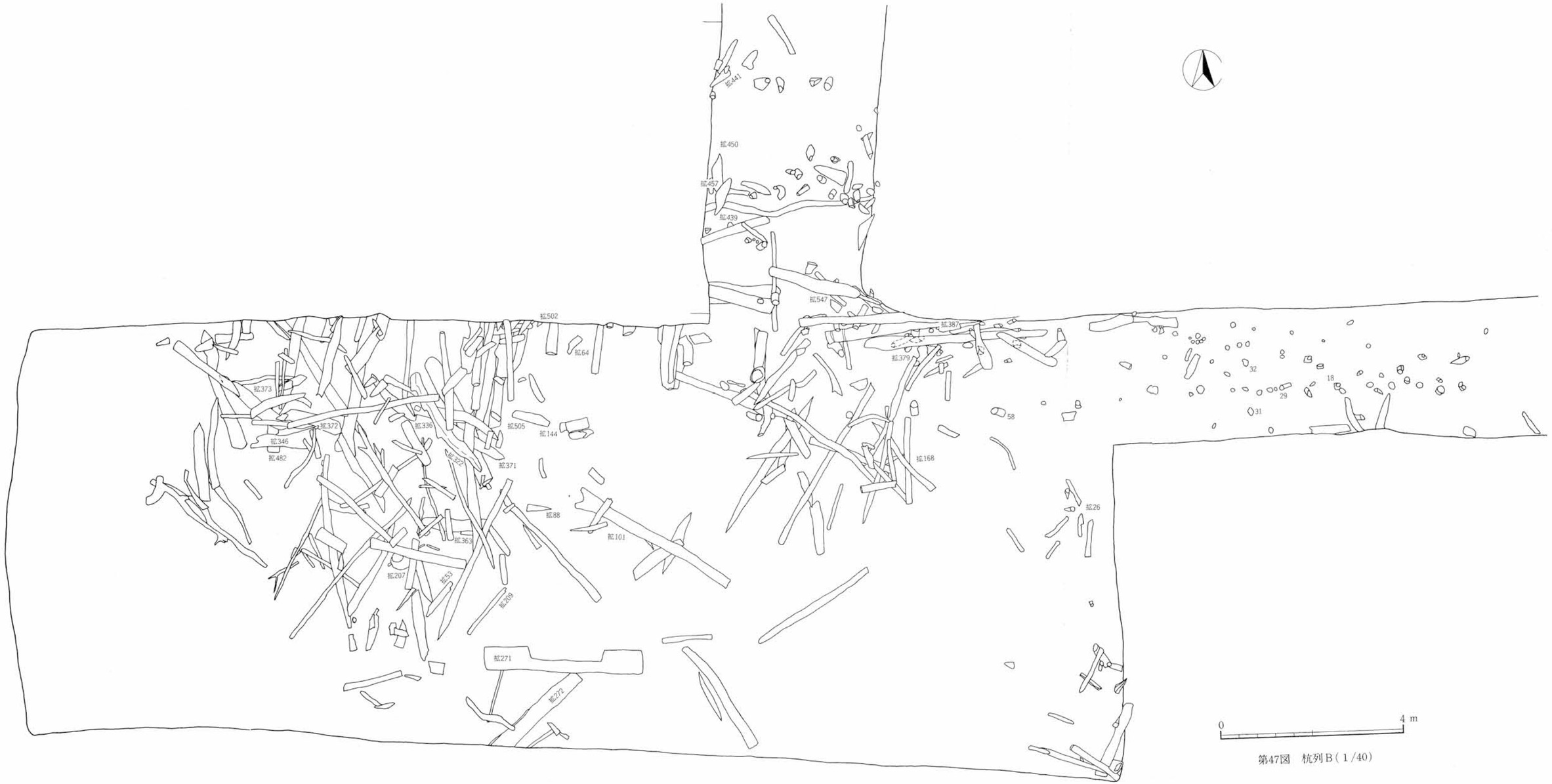
拡322、拡272は、ともに梯子で、その大きさから掘立柱建物に使用されたものと推定される。拡322は、加工された先端部が泥炭層下までつきささっており、梯子を杭に転用した可能性が考えられる。拡272は、水平で検出され、よく加工されている。拡271はその隣から検出された。恐らく何らかの建築部材だと思われるが、類例がない。

拡505、拡346、拡482、拡371、拡101は、竪穴住居、あるいは掘立柱建物址にかかわる建築部材と思われる。拡346、拡101は、柱に用いられた可能性が考えられる。拡371は完形品で、表面は全体に加工が施され、精巧な枘が取り付けられている。

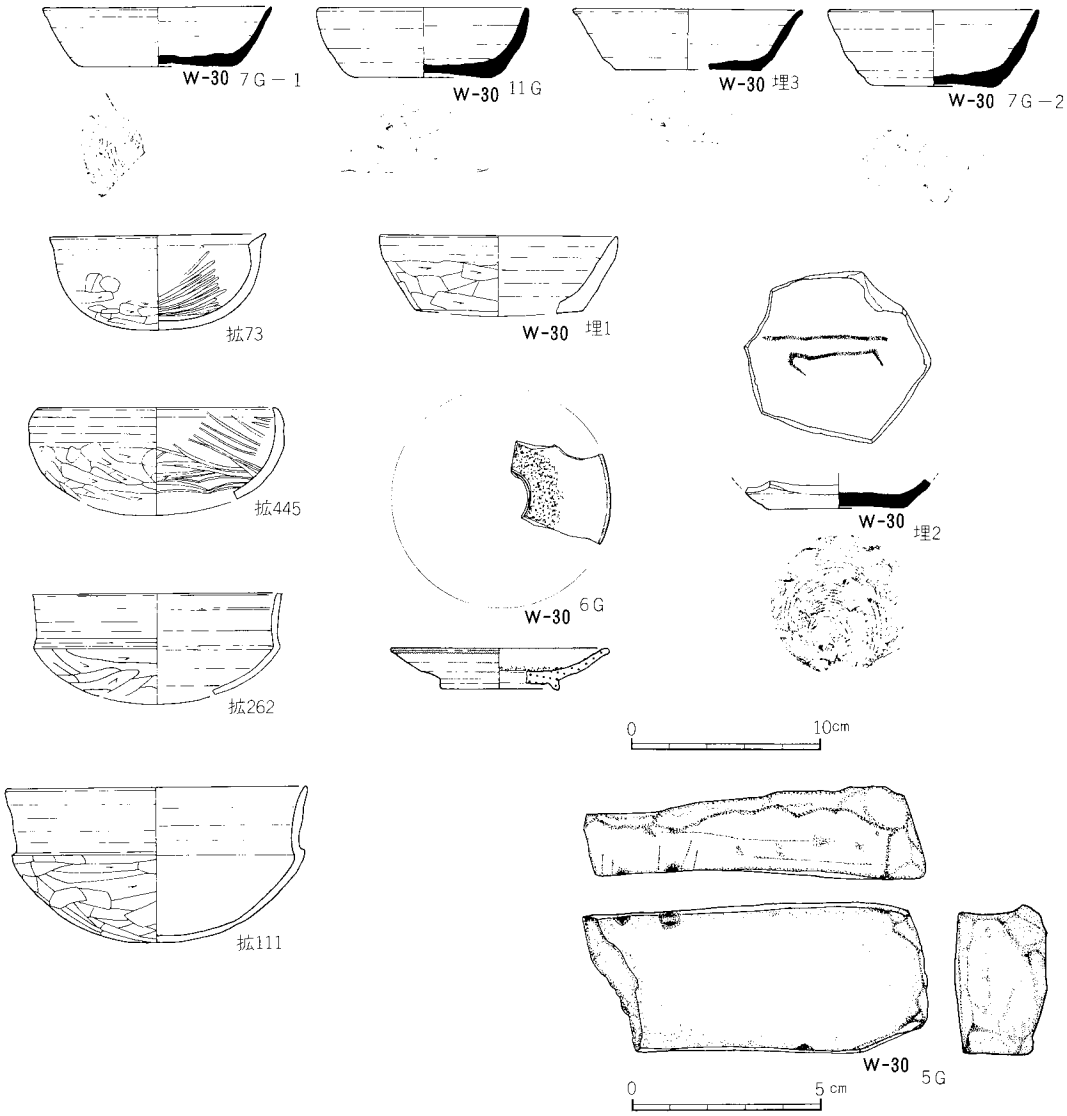
拡336は、中央に長方形の枘穴が施されている建築部材であるが、詳細は不明である。

杭は、多数のなかから19本を図示した。先端は、鋭利な道具で尖らせてあり、鉄器の使用が考えられる。杭は、大きく角材と丸材に分けられ量的には、丸材の方が多い。拡424は、角材の上部を18cmにわたり凹形に刳り貫いている。凹部に板状のものを嵌め込み、物をせきとめるのに用いたと思われる。角材あるいは割材は31・そ・拡450・拡559・29である。角材あるいは割材は、一度何かに用いられたものを、転用して杭にしている可能性も考えられる。そ・31は、なかでもしっかりした角材である。

丸材は、32・拡534・18・拡546・拡531・拡439・拡373・拡372・拡547・拡457・拡387である。32は先端部が欠損している。18・拡379・58は、先端部に大きな特徴がある。一端、細かい削りで全体を細くしたあと、大きな削りで先端を尖がらせている。また均等にまわりから削り込むのではなく、扁平な先端を削り出している。このような削り方を見ると、かなり鋭利な刃物が使用されていたと想像されるのである。拡546は、一回で削られている。拡379・拡372は直径10cmを越える


拡441
拡450
拡457
拡439
拡547
拡502
拡64
拡387
拡379
拡373
拡372
拡346
拡482
拡336
拡505
拡144
拡325
拡371
拡88
拡101
拡363
拡207
拡53
拡209
拡271
拡272
拡168
拡26
58
32
29
18
31
0
4 m

第47図　杭列B（1/40）

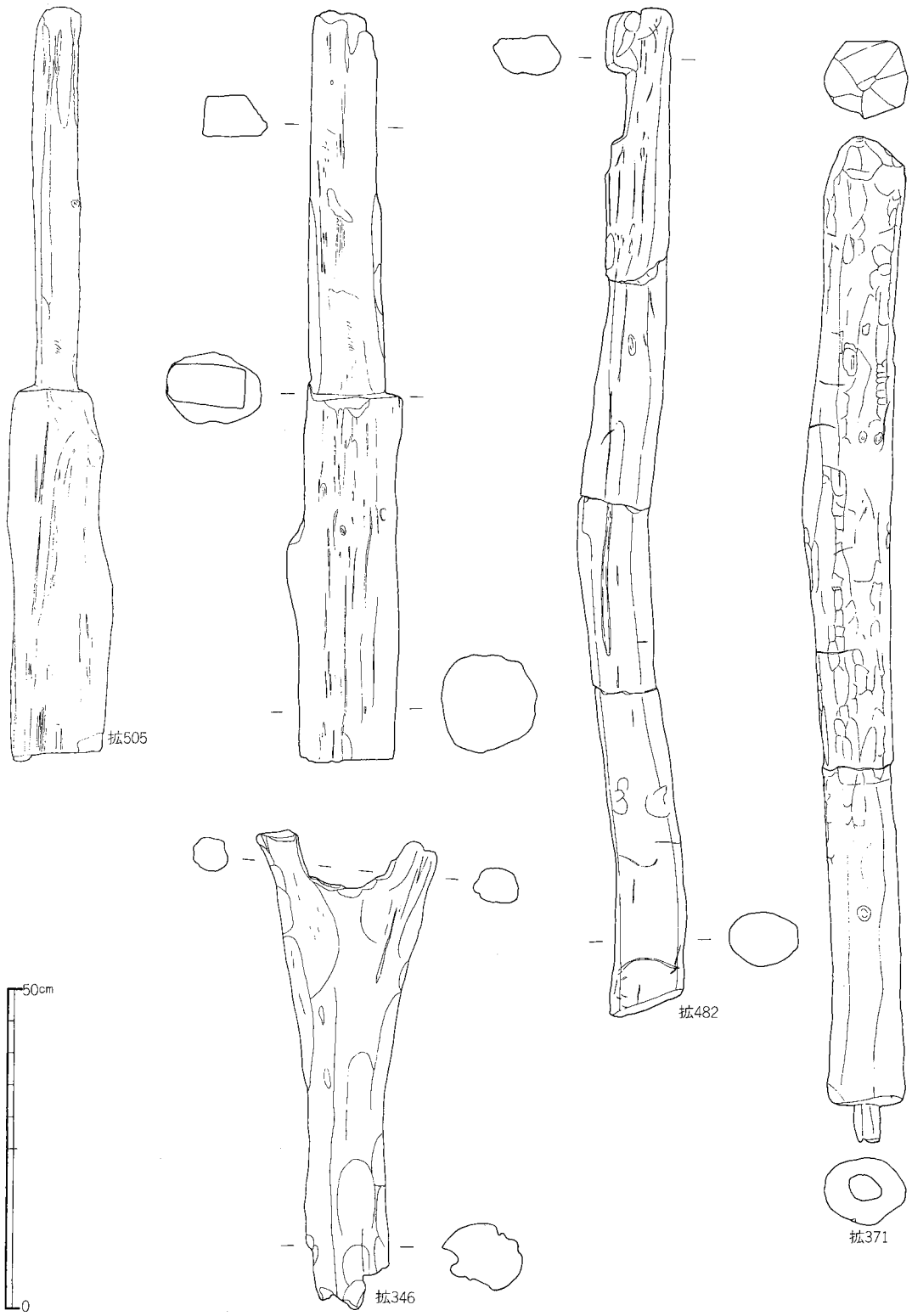


第48図　16トレンチ出土遺物A（¼・½）

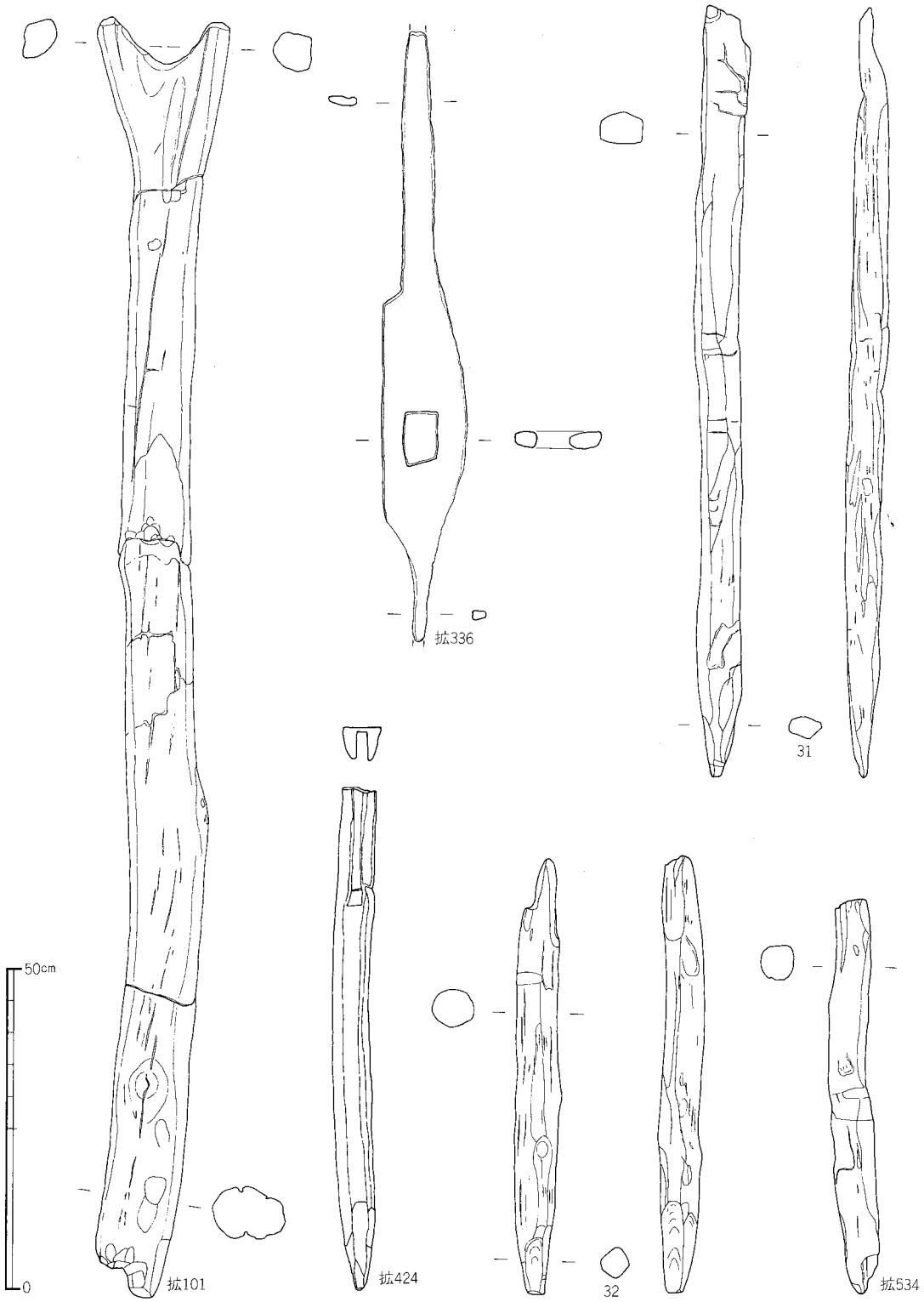
太い丸材の例である。特に373では、杭打ちの際に先端が潰れた様子が見られる。同様な潰れは、拡457の先端部からも見られた。

杭の長さは直立している場合、長くて120cm程度である。これは、泥炭の厚さ、あるいは残存を可能にする環境に依っているためで、土橋建築当時の長さであったとは思われない。また、杭の先端は多くの場合、泥炭層下のC軽石層、あるいは、灰色シルト層に達していた。したがって、杭の取り上げには思わぬ時間を要した。　（木暮）

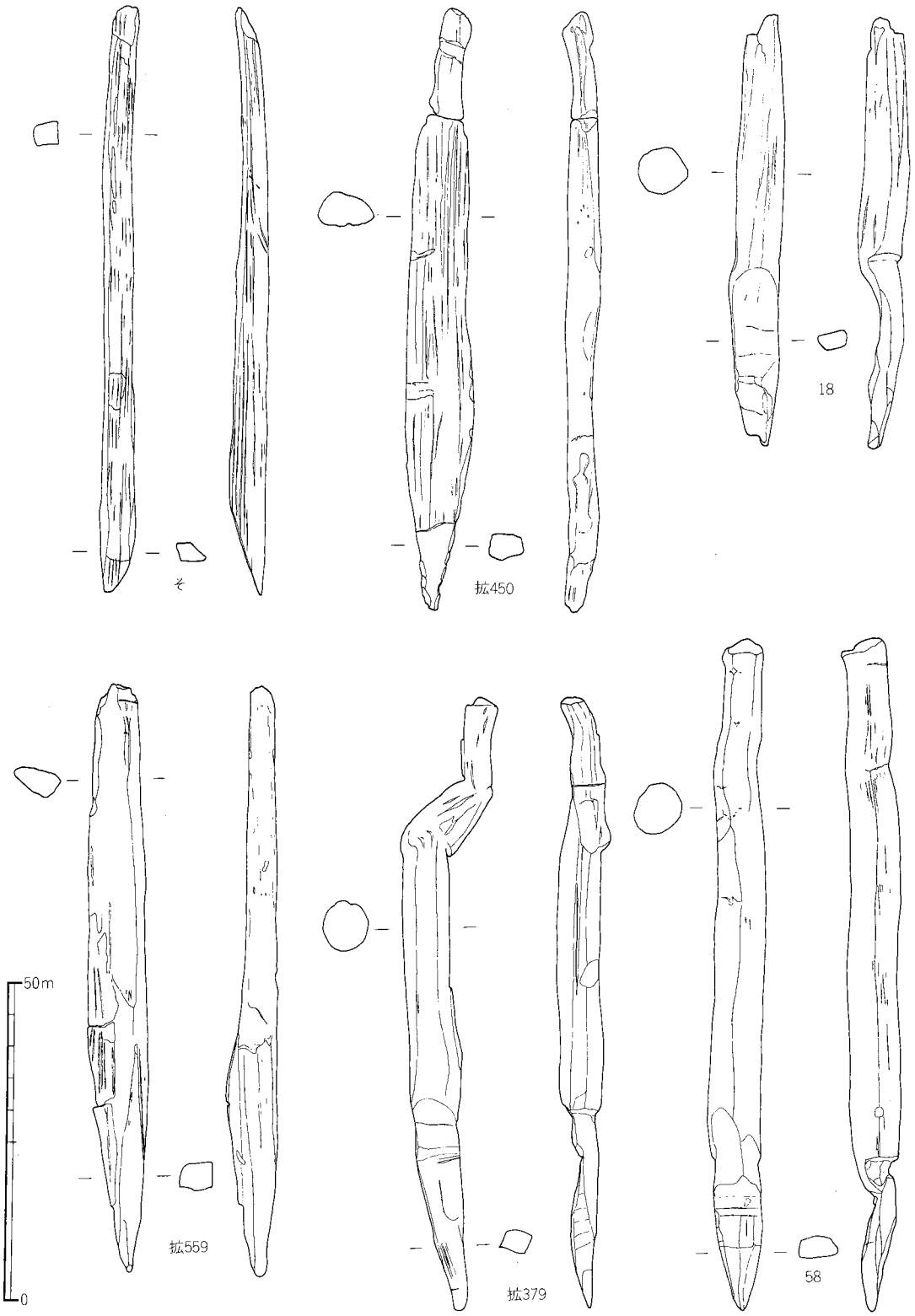
第49図　16トレンチ出土遺物B（1/10）



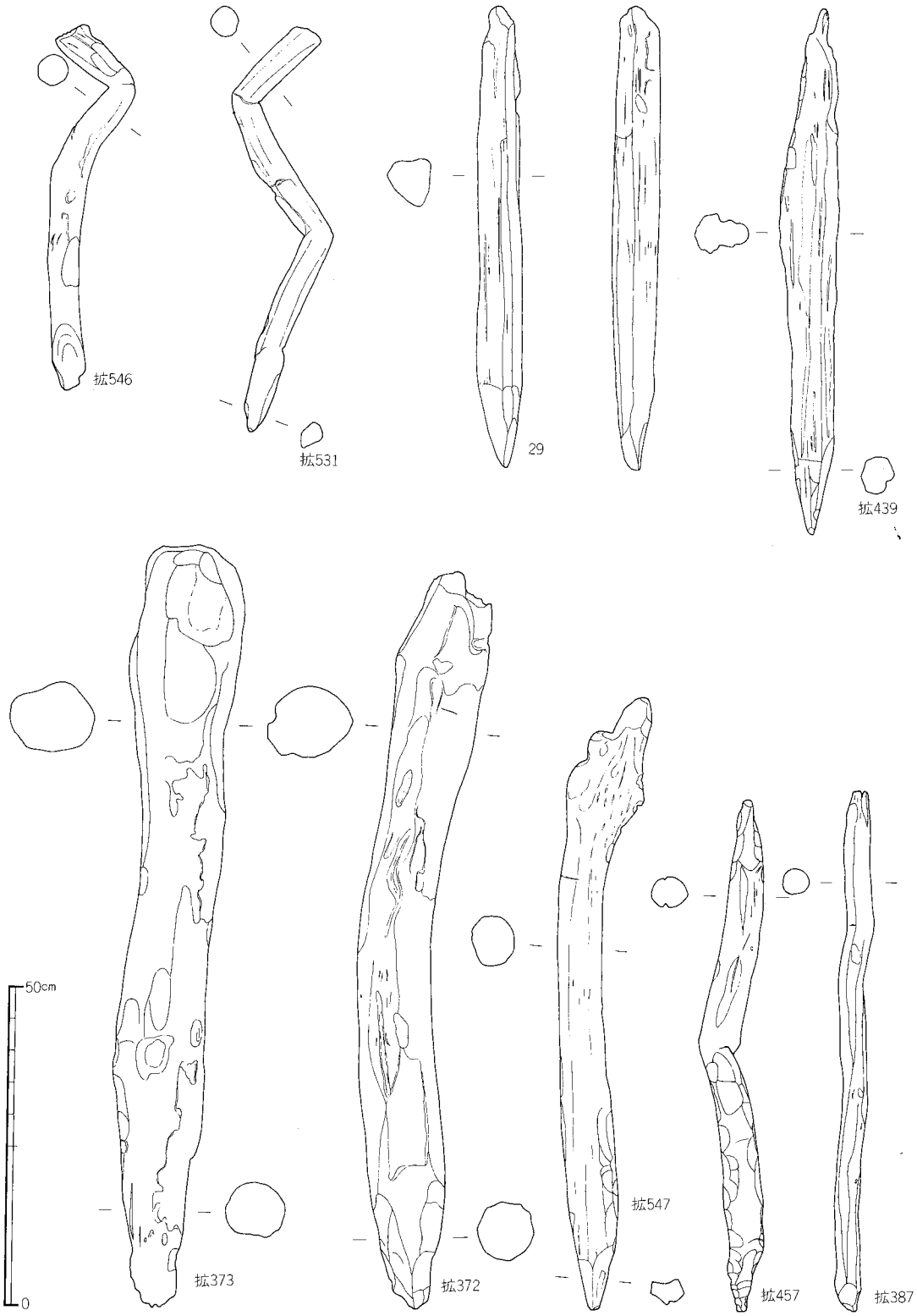
第50図　16トレンチ出土遺物C（1/10）



第51図　16トレンチ出土遺物D（1/10）



第52図　16トレンチ出土遺物E（1/10）



第53図　16トレンチ出土遺物F（1/10）

木　器

鋤

ＦＡ下泥炭層より２点出土している。いずれも破損しており、基部先端と刃部の大半を欠いているが、基部と刃部の境に見られる突起と抉り込みから、所謂ナスビ形着柄鋤と推定される。(註１)

拡502の基部は傘状に幅を拡げる三角形で、扁平な刃部は断面逆台形を呈する。刃部の平面形は残存部分からみて股状には作らず、刃部先端は丸いか、U字形鉄製刃先の装着が考えられる。板目取りで表面の腐朽は著しい。

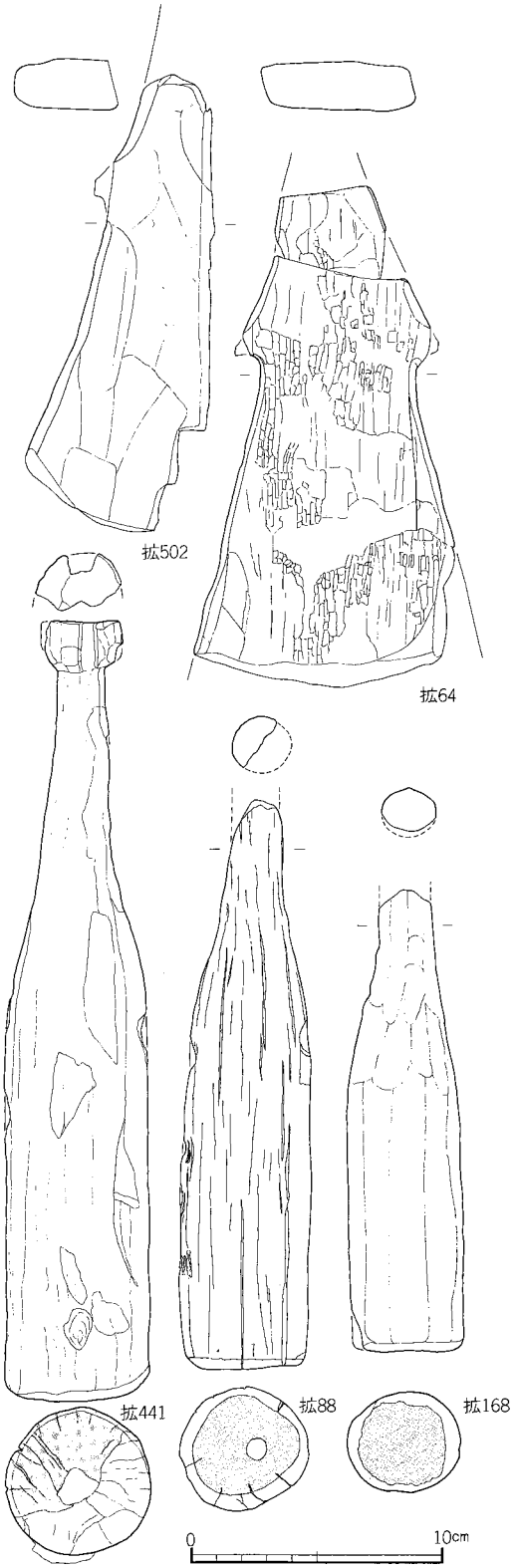
拡64も基部先端と刃部の大半を破損、特徴的な突起部分も欠いているが、抉り込みの痕跡と残存形態から拡502と同形態の鋤と推定される。

これら木製品の出土は、近年、東日本でも各地で確認されており、県内では高崎市日高遺跡例が著名である。西日本的農耕技術の伝播と関連して注目に値するものである。　　(加部)

竪杵

ＦＡ下泥炭層より出土した。図示した以外にも拡441の握り部先端の突起と同形態の破片があり、２タイプ、総計４点が出土した。

拡441はほぼ完存しており、全貌の知れる唯一の史料である。頭部は樹皮をはがした原木の太さと思われ、芯を中心とした木取りで握り部を削って突起を造出させている。頭部には打撃痕があり、磨滅しているが体部にはないことから竪杵であると判断した。これに対して拡88、拡168は大きさもやや小型で、握り部径も小さい。両者ともに頭部は磨滅しており、握り部の頭は折れたものと推測される。木取りは拡441と同じであり、両頭の杵であったと思われるが、大きさ材質ともに異なり、明らかに別個体である。(加部)



第54図　16トレンチ出土　木器(1/3)

不明木製品（桝？）

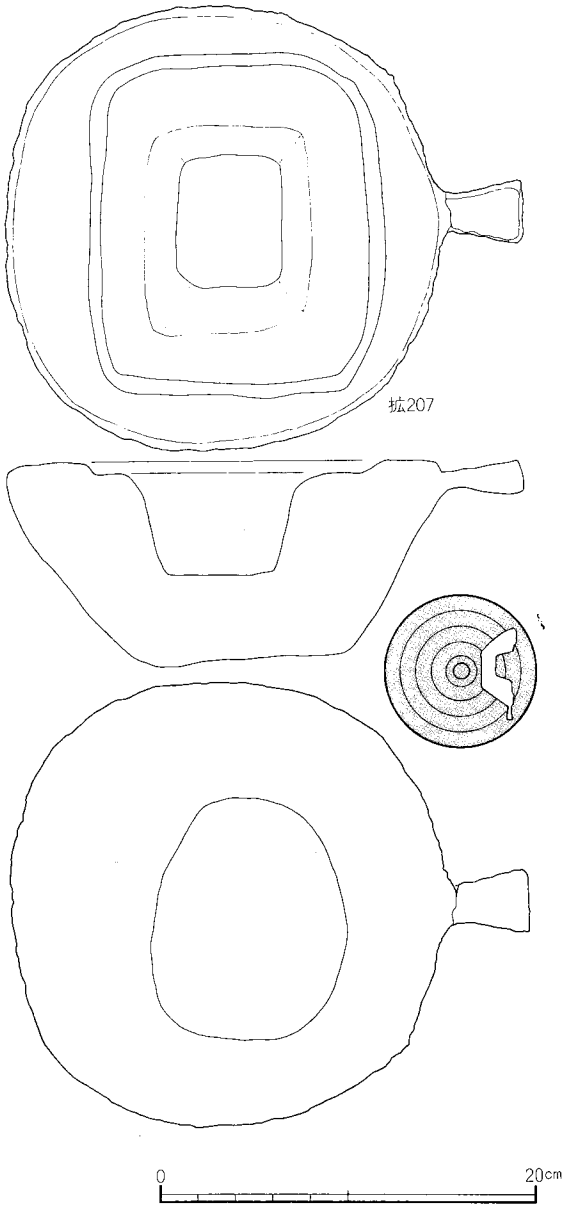
ＦＡ下泥炭層より出土。一木造りで、円錐台形の本体と把手状突起部分を削り出し、内面を一段の差をもって隅丸方形に刳り抜いて凹面を造形している。木取りは図示した通り木芯をさけており、内外面随所に成形刃痕が見られる。突起部分は把手としては脆弱で、本体の全重量を支えるのは困難であるため、他材との接触部に当る枘的な性格を有するものと推測される。

轆轤を使わない点と外形が一見類似することから、刳物の可能性(註2)も考えたが、純粋な容器としては収容量が少なく、肉厚な造りはむしろ建築部材を彷彿させる。管見では現存する類例はなかったが、部材と容器の中間的性格を有するものとして、四世紀代の家型埴輪に表現されている桝(註3)の可能性が指摘されている。しかし形態的にやや疑問も残るので、これらの解明は今後の検討に委ねたい。ちなみに中央凹面の一段目までの収容量は0.25ℓを測る。　　（加部）

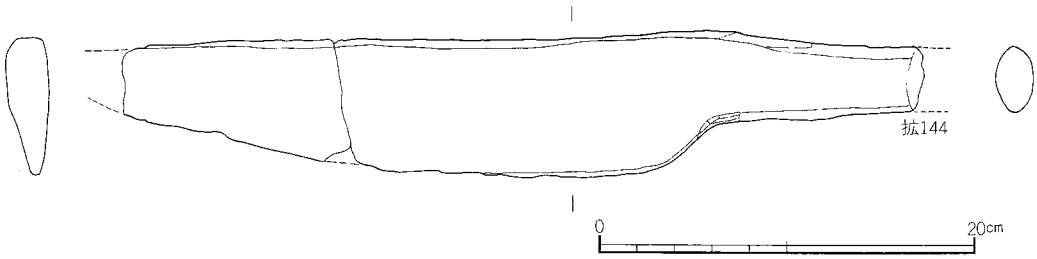
櫂状木製品

現状では片刃の鉈状を呈すが、原型は、両刃の櫂状を呈していたと推定される。

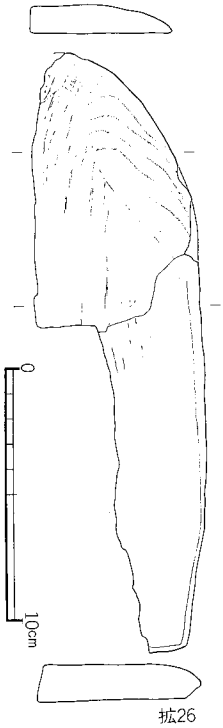
柄の末端と刃部片面と先端を欠損しており、加工は比較的丁寧で、板目取りである。全体に磨耗が著しい。　　（加部）



第55図　16トレンチ出土木器(¼)



第56図　16トレンチ出土木器(¼)



拡26

不明木器

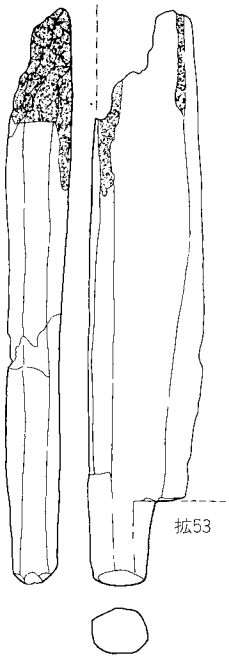
ＦＡ下泥炭層より出土。先端と推定される曲線部から片側末端部は残存しているが、他の大半を欠損しており、全貌を知ることはできない。板目取りで、体部片面は平らで、片面のみ縁をうすくして刃部を構成しており、よく磨滅している。用途の比定は困難であるが、丁寧な加工が特筆される。（加部）

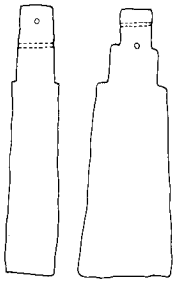
部材・扉

厚さ4.5cmを測る分厚い扉材である。軸受部と合わさる磨滅した出枘を一木で削り出しており、その付近のみしか残存しない。木取りは板目で、加工は比較的丁寧に行い、角を落して隅丸に整形している。一部炭化しており、投棄された廃材の様相を呈している。ＦＡ下泥炭層中より出土。（加部）

部材・支脚

ＦＡ下泥炭層より出土。やや歪んだ加工の台形状角材の上端小口に二段の出枘をつくり出し、正面と側面方向から交差する目釘によって上部構造にとりつけられていたものと思われる。着地面は平らで磨滅が著しい机や案の脚部である。底面から天板までの高さは出枘が突出しなければ21.2cmである。（加部）

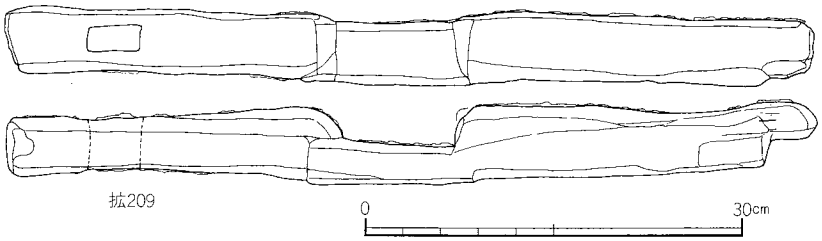

拡53


拡363

部材、台脚？

ＦＡ下泥炭層より出土。角材の端部にＬ字形の切欠きを入れ枘をつくり出す。その逆面のほぼ中央部に相欠きの仕口を施し、枘の逆側端部付近にそれぞれ切欠きの面と直交方向に枘穴をあける。

木取りは丸太材を中心から４分割したものを角材として仕上げており、切欠きには厚さ３㎜程度の鑿状工具の使用が考えられる。（加部）

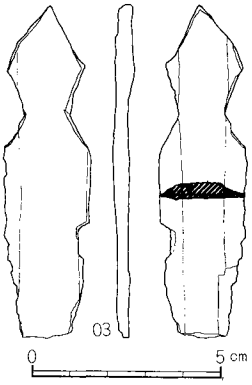


拡209

第57図　16トレンチ出土木製品（⅓・⅙）

斎串？

ＦＡ下泥炭層より出土。板目材の両側面を薄く削って断面台形状にした後、ナナメ下方→ナナメ上方の順序で切り込みを施し、左右一対のＶ字形抉りを入れている。上端も圭頭状に切り欠いており、あたかも人形のような形状を呈している。下半部は切り折りされているため下端が圭頭状を呈すか、剣先状になるか明らかでないが、残存部分からみても所謂『斎串』と呼ばれている削りかけの範疇に含められるものである。



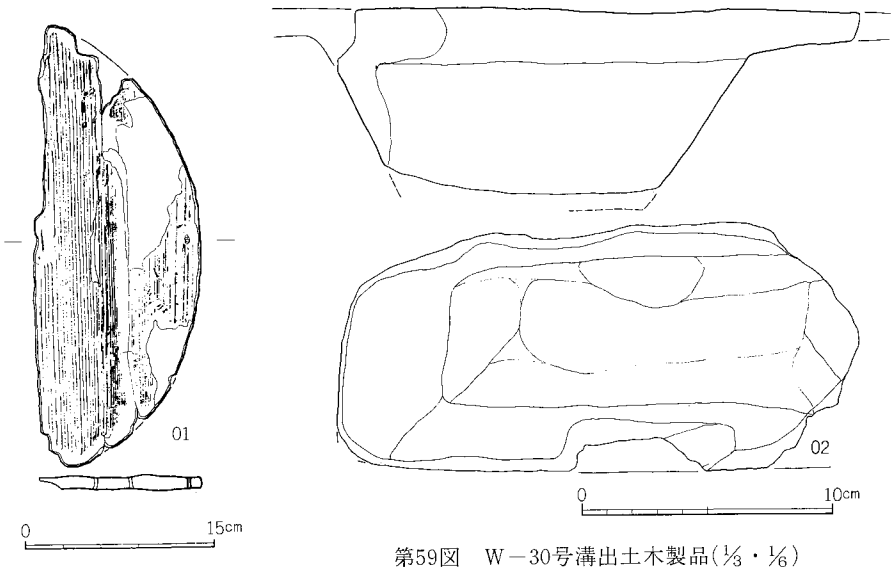
第58図　16トレンチ
出土木製品

斎串の型式分類に照らし合わせてみると、黒崎（註4）（1976）分類ではＥ類に近いが、切り欠き数が４対以上と限定されるとするならば、該当するものはない。金子（註5）（1976）分類ではやはり切り欠き数に限定がないとすれば、ＡⅥ類かＢⅥ類に含まれることになり、奈文研（註6）（1985）分類のＢⅥ類、ＣⅥ類に相当する。但し、金子分類では７世紀後半、奈文研分類では７世紀第Ⅲ四半期以降に出現するものであるとされており、特筆される断面台形の形態を重視するならば、例外を項目化した奈文研分類のＤ類に含むのが妥当であろうと思われる。

現在、日本最古とされる斎串は天理市和爾森本遺跡（註7）ＳＥ03出土品で伴出土器より６世紀中頃とされている。側面両削ぎの形態を見れば、湖西線（註8）ＣＷ130～139出土品の６世紀後半に上端圭頭部に稜をもつものがあり、断面形態は図示されていないが、Ｖ字形の切り込みは２対以上になると思われる。近年の調査では静岡県大谷川河川改修の西大谷２区（註9）で古墳時代の、斎串が出土しており、山賀遺跡（註10）からも７世紀初頭とされる長い斎串の出土が見られる。以上のように斎串の類例は古墳時代には確実に存在し、その時期も６世紀中頃まで遡ることができる。今回の出土品が確実に斎串であるとするならば、その初源はさらに５世紀末頃まで半世紀は遡ることになる。

斎串の性格については出土遺構の多様性から用例や性格について限定できないが、金子氏は、黒崎分類の基本タイプが680年前後には殆ど出揃っている事実を重視し、その段階に大きな画期があったことを指摘して、７世紀後半以降のものを所謂木製模造品として、それ以前のものと一線を画する考え方を示している。確かに金子氏の云うように古墳時代のものとそれ以降のものを同一視して扱うことには抵抗を感じるが、古墳時代に代表される石製模造品の形態で、材質を木に変えただけの品もある事実（註11）から、むしろ金子氏が指摘している前者のもの、即ち天武朝以前の品にこそその用語をあてる方が、年代観を踏まえる上ではより整理されるのではないだろうか。

斎串の起源について、『豊受皇太神宮年中行事今式』をもとに呈示された。削りかけ＝鉾説（註12）は、その引用史料がはたして近世以前に遡るものかどうかという問題もあるが、『延喜式』段階においては限定的な使用状況である鉾も、それ以前には武器としての普及状況を示したものであり、特に儀器的に用いられたのは広鋒のタイプで、斎串の雛型となりうるのは形態的に見ても実用的な狭鋒鉾であろうと推定される。斎串であるならば最古品となりうる本品が、一見鎬とも見れる側面両削ぎを持つことは、これらの説を考える上で興味深い。　（加部）



第59図　W－30号溝出土木製品(⅓・⅙)

容器、(蓋板)

平安時代の溝底部より出土。

やや楕円型を呈する。板目取りで、現存部に一ヵ所のみ小孔を確認。一部炭化している。

不明木製品、

平安時代溝底部より出土。一木造りで厚さ2cmの板状部下半に天板よりも肉厚な逆台形の脚部が付され、あたかも狙のような形態をなしていたと推定される。天板厚さ1.7cm。加工は丁寧である。　(加部)

9.　17トレンチ

本トレンチは、今年度の調査区の最も北に位置し、ほぼ東西方向に設定されている。標高は、約114mを測る。確認された遺構は、住居址3軒、溝3条、近現代の井戸址2基である。住居址は、いずれもW—33によって攪乱を受けている。住居址の分布状況を見ると、14トレンチのような重なり具合いは見られない。W—33は、ほぼ東西方向を指す規模の比較的大きい溝である。覆土の所見から見て、古代までは遡ることはないもようである。位置的には、閑泉樋遺跡の大溝のちょうど3町南に位置しており、昭和58年度に検出した溝・昭和59年度Kトレンチで確認した溝と同一のものである。上幅約5m、下幅約2m、深さ約1mで水流の形跡は見られない。　(町田)

10.　Kトレンチ

本トレンチは、昭和59年度に調査されたものである。本来なら、『元総社明神遺跡III』として報告されるべきであるが、諸般の都合により今年度の調査結果と合わせて報告するものである。

本トレンチは、南側において竪穴住居址とみられる遺構と、溝1条を確認した。H—1号住居址は、カマド部分のみが検出されただけで、大部分が未発掘区に入る。カマドは、黒灰色の灰の散布や焼土が有り、間違いなくカマドとしての使用された形跡である。遺物は、南壁と北東壁沿いを中心にして出土し、小破片で実測に耐えるものは無かった。器形等から判断すると、和泉期又は鬼高期初頭頃のものと言えよう。

また、溝は東西方向に走向し、上幅約5.6m、下幅約2.5m、深さ約1.1mを測る。3回の段掘りによる掘削が想定される。出土遺物は、土師器・須恵器・灰釉陶器などで、中世城館址との関連も想像できなくもない。閑泉樋遺跡の東西方向の大溝のちょうど3町南にあたる。　(町田)

V　ま　と　め

1　住　居　址

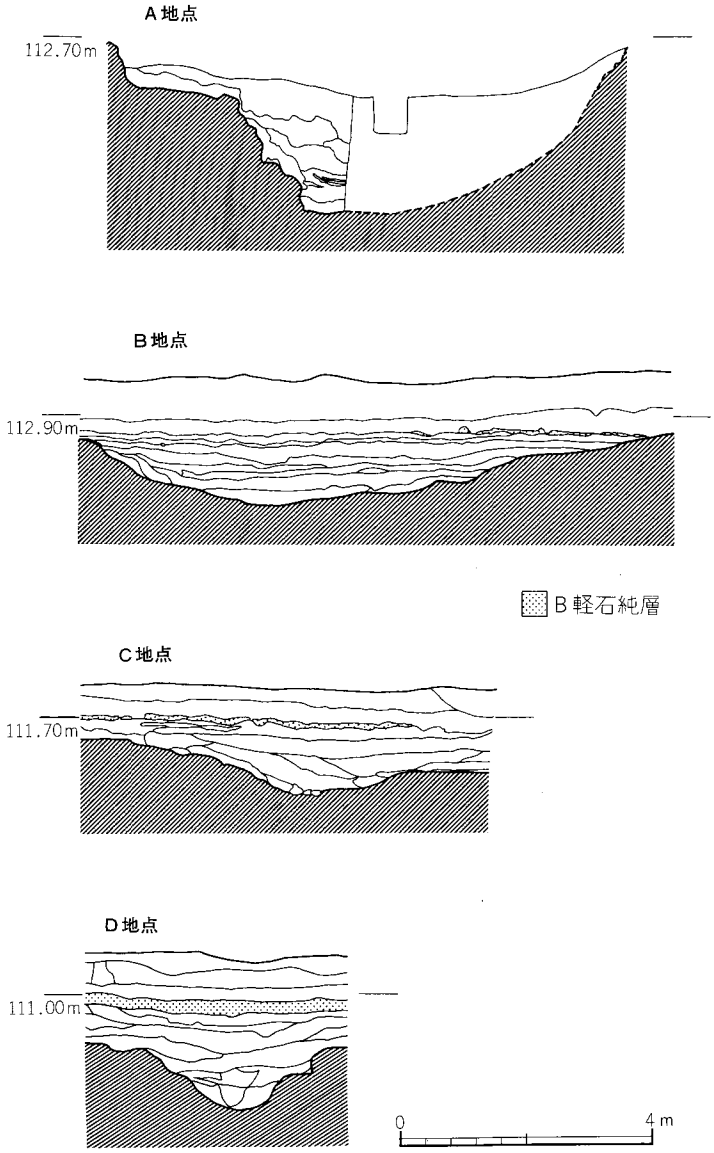
今年度の発掘調査はすべてトレンチ調査であり、ほとんどの遺構はその一部分を確認しえたに過ぎなかった。検出した74軒の住居址の年代別内分けは、古墳時代前期13軒、後期14軒、奈良平安時代47軒であった。古墳時代前期の住居址は14TrとMTrに多く、比較的床面が浅い位置に構築されているため、後世の遺構に破壊されていることが多い。石田川期の集落分布を見ると、14Tr３軒、MTr５軒、４Tr２軒で、３・15・17Trに各１軒ずつ検出された。規模はいずれも大きく、一辺６m以上を測ると推定され、H―14号住居址に至っては８mを越えると思われる。調査範囲では炉址を検出したものは皆無であったが、すべての当該期住居址に付くと推定され、四本柱による主柱穴によって上屋を支えていたと思われる。床面は浅間C軽石混りの黒色土により貼床され、周濠は四周を巡っているものが多い。後期の鬼高期に比定される住居址は調査区の北方に多く、３Tr４軒、４・15Tr各３軒、CTr２軒、M・17Tr外１軒で確認された。これらのうち住居覆土中にFA純層を検出した住居址はH―60・70・71の３軒確認されている。FAは検出されなかったが、H―54・62・63・72もほぼ同時期の遺物を出土している。この時期の住居址は遺物の量も多く、内容も優れており、群馬県内の当該期の住居址と比較しても卓越していることは指摘できよう。国府設置期の奈良時代前半の住居址は４Trと３Trで確認されており、底部ヘラ切りの須恵器坏身、素口縁土師器坏のセットを検出している。主軸の方向性等の規則性は看取できない。又、遺物量も普遍的であり、特筆されるものは何ひとつない。平安時代の住居址は43軒で重複が著しく、壁高も僅かなものが多かった。平面プランは正方形ないし長方形で床面積は古墳時代に比べて小型であった。集落分布は調査区南方に多く14Trで24軒、MTrで７軒と半分以上を集中させているが、LTrでは２軒のみであり、57年度調査１Trで東方に地形が若干落ちることから、この辺が本台地集落の東限ではないかと考えられる。MTrでも当該期の住居址は14Tr側の北方に集中することから南限はこのトレンチ内で納まると推定される。14・MTrでは短期間に於いて住居変遷が何期にも渡ったことが伺い知れる。土器の型式差にあらわれない住居址の切り合いが５～６軒に渡るものは珍しくなく、同時存在はありえないことから、これら住居址の存続期間は10年以内と流動性の激しかった地域であることは最大の特徴であろう。

古墳時代以降のカマドを持つ住居は時期を問わず東壁に附すものが多いが、若干北・南・西カマド等も検出されており、規則性は見出されない。これら竪穴住居址の他、掘立柱建物址が２棟確認されている。B―１号掘立柱建物址は台地下の16Trで検出されており、牛池川の氾濫原という位置から、その性格が注目される。柱穴は隅丸方形を呈すと推定され構築時期は柱穴内から出土した灰釉陶器片などから10世紀に比定されると考えられる。B―２号掘立柱建物址はこの東側の台地縁辺部に立地しており、柱穴間距離が整った数値を測り、形状はすべて円形で柱痕は明瞭に確認することができた。建物主軸が真北方向を指すことから遺構の性格が注目される。(町田)

2　溝　　址

本調査で検出された溝址は40条に及んでいる。これらのほとんどが古代末～中近世に機能した水路と考えられるが中には古いものもある。古墳時代と推定されるものはW－2・16・17・18・20・31・35でW－18と20は石田川期の遺物を出土した。W－2は14TrのW－1・3の間を平行して流れており、古墳時代終末期の遺物を多数出土している。国府の占地する直前段階の時期を想定できる。W－31は15Trで検出された確認面で幅2m深さ0.6mの溝で逆台形の法面が直線的な掘り方を呈しており注目される。時期は6世紀代の遺物を出土している。W－35は17TrのH－73号住居址（7世紀代）の床面下で検出された上幅2m、深さ1.5mの大溝で下層部には砂層ラミナの推積があった。

これら以外のほとんどの溝から平安時代の遺物を多数検出しているが、水流による流れこみの可能性が多く、土層からは浅間B軽石降下以降と推定されるものも多い。こうした中でW－1は遺物量も多く、所謂真間期の遺物のみ限定して出土しているのは特筆される。W－23・29は同一の溝と推定され、58年度調査検出の8W－1、6W－1の南延長上に当る溝である。覆土上面には浅間B軽石純層を確認しており、溝底面はかなりの水流があったと思われる浸食と砂層ラミナが認められる。遺物はローリングを受けた磨滅したものが多く10世紀代が下限であると考えられる。これらの溝はほぼ真北方向に方位を取り、日高条里と合致する。(付図参照)。この他17Trで東西に縦断して約40m検出したW－33は確認面



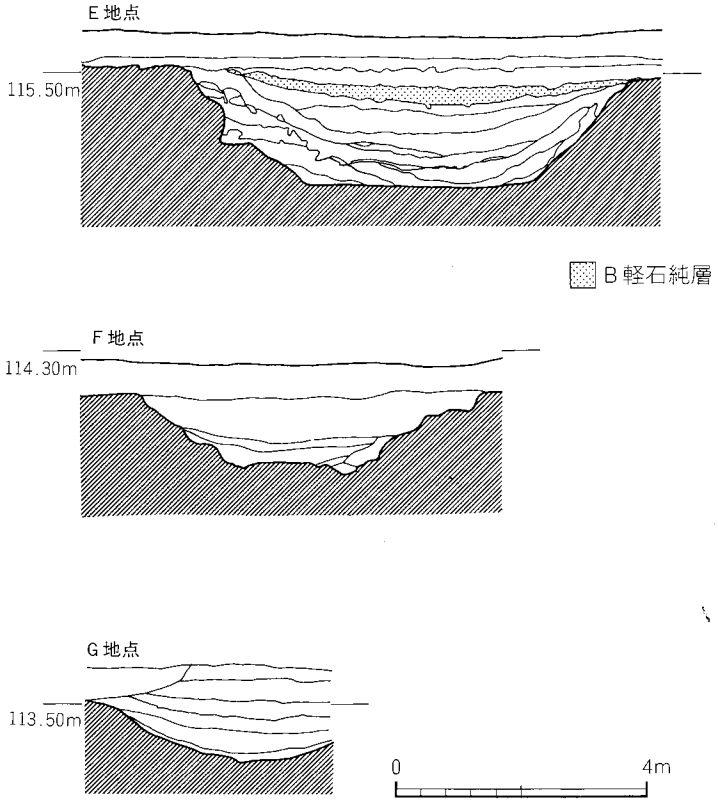
第60図　南北方向の溝(1/120)

で幅５ｍの大溝で時期は中世まで下がるが、やはり日高条里に一致する。

本年度の発掘調査及び、現在までの調査成果を踏まえ、関連遺構についてまとめてみたい。

付図の１町のメッシュは昭和58～60年度に確認された南北方向の大溝の確認地点（Ｄ・Ｃ地点等）と東西方向の大溝の確認地点（Ｅ地点）を基にして作成した。これら溝の位置関係は興味深い重なりを示している。

昭和58年調査９Ｗ－１（Ａ地点）は本調査Ｗ－23・29の１町西に位置する。又、逆方向の東へ１町の地点には昭和41年度検出の南北方向の溝（上幅2.5ｍ下幅1.5ｍ、深さ0.3ｍ）に符合する。一方東西方向では閑泉樋遺跡大溝（Ｅ地点）の１町南に東西方向の溝が昭和41年度調査で検出されている。この溝は上幅１ｍ、下幅0.3ｍ、深さ0.4ｍの規模で断面形態は逆台形で36ｍにわたって確認されている。さらに３町南では昭和59年度にＦ地点、60年度にＧ地点で東西方向の溝が検出され、同一の溝と判断した。但しこれらはすべて同時期ではなく浅間Ｂ軽石降下以前のものと以後のものに大別される。



第61図　東西方向の溝

溝の断面形及び覆土については、Ｂ軽石下の閑泉樋遺跡（Ｅ地点）では整美な逆台形を示すが同じくＢ軽石下のＢ・Ｃ・Ｄ地点では明確な逆台形を示さない。これは水流による浸食が著しかったためであろう。Ｂ軽石降下以降のＡ・Ｆ・Ｇ地点は中世ないし近世の様相を示している。

本調査区のある台地は榛名山東南麓の末端部分に当り、自然地形自体が北西から南東へと微傾斜で下がっている。調査区西端は牛池川の氾濫原で分断されているためＣＴｒでは東から西への溝の流れが想定されるが、ＬＴｒの東側の現水田面は一段下がっており、台地の東端を画すると思われる。集落分布もここで切れることから、この東方は当時も水田が営まれていた可能性が強く、ＬＴｒで５条検出されている溝はトレンチ南端で確認された畦畔状遺構とともにこれらに関連するものと考えられる。

（中野）

3　杭　　列

牛池川の氾濫原と思われる谷地状の低地に発掘調査が初めて行われ、今までの調査結果に新しい成果が加えられた。それは何よりもまず、多数の木製品を検出した点であろう。木杭・梯子・建築部材・木器等、特殊な環境においてのみ残存可能な貴重な遺物が多数得られた。また、こうした遺物がＦＡ降下以前の泥炭層中から出土した事実は、時期の特定ということでも意義深い。

現在、総社神社から県道安中・前橋線に至る牛池川の南北に長い谷地は、６世紀初頭以前の段階においては、湿地状を呈していた。一本のトレンチであるため範囲は限定できないが、西側については、本トレンチの西側で前橋台地を構成する地山面が出て高くなっており、泥炭は消える。東側については、本トレンチ東の現道路付近で立ちあがりが見られ、泥炭層はなくなるようである。南限、北限については、不明である。いづれにしても、このような湿地状の所に東と西を結ぶために計画的な土木工事が行われ、杭が打たれ横木が渡され、土橋状の遺構が造られたと思われる。この遺構がいつ廃棄されたか定かではなかいが、ＦＡ層の美しい堆積の状況から、少くとも降下後においては使用された痕跡を認めない。その後、ＦＡの泥流（ＦＰＦ－１）が、この流域に厚く堆積していることが知られる。さらに時代が下ると、Ｂ軽石層を覆土とする大きな流れが存在していたことが確認された。

牛池川左岸の台地上からは、すでに所謂石田川期・鬼高期の集落の存在が確認されている。こうした近くの古墳時代の住居と、この土橋状の遺構は恐らく無縁なものではなかろう。また、泥炭層中から出土した建築部材・農具等も、出土地点からそう遠からぬ所で使用されていたはずである。つまり、付近の集落の人々が、何らかの理由でこのような土橋状の遺構を築いたと推定される。40mも及ぶ大規模なものであるから、こうした大土木工事の背景には、やはり地域の有力者の存在が想像されてくる。うがった見方をすれば、類例のない大きな部材は、こうした有力者に関係があるのではなかかと考えられてもくる。

時代が下ると、土橋状の遺構はＦＡ層やＦＰＦ－１によって埋没する。大きな掘り方を持つピットの存在は、10世紀段階になると、この谷地にも掘立柱の建物が建築された可能性を示すものである。しかしながら、ほぼ同じ時期に、大きな流れがあったことも窺える。該地は、推定国府域内にあるが、Ｂ軽石降下以前の段階で、かなり大きな流れがあったと考えられる。したがって、現在も残る谷地は、10世紀段階では、さらに深い規模で存在していたことになる。国府域は未だ確定されていないが、もし該地が、域内であるとすれば、かなり地形的に自然な状況が保たれていたことが理解される。換言すれば、国府は、自然の地形に大きく左右されることとなる。

調査の結果に基づいて、地形変遷を中心に推論を述べた。何分きわめて狭いトレンチ１本では全貌の把握はきわめて困難である。今後、付近を調査することがあれば、土橋状の遺構の性格がもっとはっきりとしてくるであろうし、同時に平安時代などの状況にも目を向け状況を摑む必要も出てこよう。　　（木暮）

註

1) 黒崎直「古墳時代の農耕具――ナスビ形着柄鋤を中心として――」『研究論集』III、奈良国立文化財研究所学報第28冊（1976）
2) 兵庫県吉田南遺跡出土品　『木器集成図録――近畿古代篇』　奈良国立文化財研究所史料第27冊（1985）
3) 大阪府美園遺跡、三重石山古墳例が知られる。石野博信氏御教示。
4) 黒崎直「斎串考」『古代研究』10　元興寺文化財研究所（1976）
5) 金子裕之「古代の木製模造品」『研究論集』VI　奈良国立文化財研究所学報（1979）
6) （注２）文献に同じ
7) 『天理市和爾、森本遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第45冊　（1983）
8) 田辺昭三編『湖西線関係遺跡調査報告書』（1983）　滋賀県教育委員会
9) 『大谷川発掘調査概要』７　静岡県埋文（1983）
10) 「近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書」『山賀』（その３）　（1984）大阪府教育委員会
11) 時枝務「高崎市西島遺跡の木製剣形模造品」『考古学ジャーナル』240　（1984）　ニューサイエンス社
12) 斎藤忠・向坂鋼二『伊場遺跡遺物篇』Ⅰ　伊場遺跡発掘調査報告第３冊（1978）浜松市立郷土資料館

その他参考文献

岸田治男『元総社明神遺跡Ⅰ』土地区画整理事業に先立つ埋蔵文化財確認調査概報（1983）前橋市教育委員会
岸田治男・福田瑞穂『元総社明神遺跡Ⅱ』土地区画整理事業に先立つ埋蔵文化財確認調査概報（1984）前橋市教育委員会
前原豊・江部和彦『柿木遺跡』（1984）前橋市教育委員会
中沢悟　「出土土器の分類と編年」『清里・陣場遺跡』（1982）㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団
尾崎喜左雄・松島栄治『昭和41年度上野国府跡発掘調査概報』（1967）上野国府跡発掘調査委員会・前橋市教育委員会
尾崎喜左雄・松島栄治『昭和42年度上野国府跡発掘調査概報』（1968）上野国府跡発掘調査委員会・前橋市教育委員会
尾崎喜左雄・松島栄治・井上唯雄『昭和43年度上野国府跡発掘調査概報』（1969）上野国府跡発掘調査委員会・前橋市教育委員会
前原豊　「閑泉樋遺跡」『前橋市文化財報告書第13集』（1982）前橋市教育委員会
木暮誠　「上野国府の現在」『前橋市文化財調査報告書第15集』（1985）前橋市教育委員会
尾崎喜左雄「国府推定地の発掘調査」『前橋市史』第１巻（1971）前橋市史編さん委員会
唐沢保之・井野修二・前原豊・加部二生　『草作遺跡』（1985）前橋市埋蔵文化財発掘調査団
茂木由行「群馬県における鬼高式土器の編年」　『群馬考古通信』第９号（1984）群馬県考古学談話会
橋本博文・加部二生「Ⅶ　群馬県」『古墳時代土器の研究』（1984）古墳時代土器研究会

Ⅵ　遺物観察表

遺物番号	器　形	寸　法	器形の特徴	外面調整	内面調整	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
H—1 1	須恵器 埦	13.0 5.2 6.5	やや内湾気味に立ちあがり、口唇付近で外反する。	底部右回転糸切り後つけ高台。体部全面回転ナデ調整。	全面回転ナデ調整。	①にぶい黄橙色②良好③1/4④やや粗⑤内面一部に二次焼成痕あり。
H—1 2	須恵器 埦	(13.3) 4.3 7.0	ほぼ直線的に立ち上がり、口唇付近で外反する。	底部糸切。つけ高台後ナデ。体部全面回転ナデ調整。	全面回転ナデ調整。	①灰黄褐色②良好③1/3④やや粗⑤酸化炎焼成。
H—4 132	須恵器 埦	(13.0) 5.0 5.3	やや内湾気味に立ちあがり、口唇付近で外反する。	底部右回転糸切り後つけ高台。体部全面回転ナデ調整。	全面回転ナデ調整。一部回転ヘラケズリ。	①灰色②良好③1/3④密
H—4 182	須恵器 埦	(13.0) 5.5 (6.6)	高台から丸味を持って立ち上がり、直線的に外反する。	底部右回転糸切り後つけ高台。体部全面回転ナデ調整。	全面回転ナデ調整。	①浅黄色②良好③2/3④密
H—4 87	須恵器 埦	13.1 5.2 6.3	三角の高台から、丸味を持って立ち上がり直線的に外反する。	底部右回転糸切り後つけ高台。体部全面回転ナデ調整。	全面回転ナデ調整。	①にぶい橙色②良好③2/3④密⑤酸化炎焼成。
H—4 247	須恵器 羽釜	16.8 — —	口縁部を内傾させる。鍔は断面三角形でやや上方を向く。	口縁～鍔横ナデ。胴部縦方向ヘラケズリ。	口縁部ユビオサエ後横ナデ。体部ヘラナデ。	①にぶい橙色②良好③1/8④密⑤酸化炎焼成
H—4 131	土師器 甕	(19.8) — —	口縁付近の破片。口縁形態はコの字状を呈す。	口縁部ナデ後一部ヘラケズリ。体部横方向ヘラケズリ。	口縁部ヨコナデ。体部ヘラナデ。	①橙色②良好③1/10④密⑤内外面ともに二次焼成痕あり。
W—1 54	須恵器 坏	(9.1) (3.5) (5.8)	矮小化ピーク時の坏身である。底部はやや丸味を帯びる。	体部回転ヘラケズリ後ナデ。底部手持ちヘラケズリ。	ロクロ水びき成形。底部中心は他よりうすく仕上がる。	①灰色②良好③1/3④密⑤7世紀第Ⅱ四半期。
W—23 埋1	須恵器 坏	13.5 3.9 6.6	平底の底面から開き気味に外傾し、口縁付近で外湾する。底部に籾痕あり。	底部右回転糸切り後未調整。体部回転ナデ調整。黒漆の付着が著しい。	全面回転ナデ調整。と思われるが、黒漆が厚く付着しているため観察できない。	①浅黄色②良好③1/1④密⑤漆混合の容器として使用。
W—23 44	須恵器 坏	13.7 3.5 7.0	直線的に大きく外反する。ケズリにより体部の凹凸が著しい。	底部右回転糸切り後未調整。体部回転ヘラケズリ後ナデ調整。	全面回転ナデ調整。一部に油煙の付着が見られる。	①灰白色②良好③2/3④密⑤内外面ともに一部油煙が付着する。
W—23 埋2	須恵器 坏	(12.2) 3.7 (4.9)	体部下半は丸味を帯び、口唇付近で大きく外湾する。	底部右回転糸切り後未調整。体部回転ナデ調整。	全面回転ナデ調整。底面に後刻による線刻あり。	①灰白色②良好③1/6④密⑤外面底部付近二次焼成。
W—23 16	須恵器 坏	(13.1) 3.8 5.7	体部上半に丸味を持ち、口唇付近で大きく外湾する。	底部右回転糸切り後一部ナデ。体部回転ナデ調整。	全面回転ナデ調整。	①灰色②良好③7/8④密⑤内面一部油煙付着。

遺物番号	器形	寸法	器形の特徴	外面調整	内面調整	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
W—23 9	須恵器 埦	15.1 5.3 7.1	高台から直線的に外反する。ケズリにより体部の凹凸著しい。	底部右回転糸切り後一部高台。体部回転ヘラケズリ後回転ナデ調整。	全面回転ナデ調整。	①灰色②良好③⅞④密⑤内面一部油煙付着。
W—23 埋4	須恵器 瓶　？ (転用硯)	— — (8.0)	器肉が厚い袋物の底部。高台から丸味を帯びて立ち上がる。	底部右回転糸切り後つけ高台。体部回転ナデ調整。	転用硯のため全面墨が付着。中心部は磨滅している。	①灰色②良好③底部⅓④密⑤胎土中に黒色鉱物粒を含む。
D—18 3	須恵器 坏	13.8 3.4 6.5	底部から丸味を帯びて直立し大きく外反する。	底部右回転糸切り後未調整。体部回転ナデ調整。	全面回転ナデ調整。	①灰白色②良好③¾④密⑤口唇部黒色付着物あり。
D—18 8	須恵器 埦	(14.3) 5.5 (6.2)	高台からやや丸味を帯びてスマートに外反する。	底部右回転糸切り後つけ高台。体部全面回転ナデ調整。	全面回転ナデ調整。	①灰白色②良好③½④精良⑤外面二次焼成。内面油煙付着。
D—18 22	須恵器 皿	14.6 2.8 7.5	高台から大きく外反する。歪みがひどい。	底部右回転糸切り後つけ高台。体部全面回転ナデ調整。	全面回転ナデ調整。底部は磨耗が著しい。	①灰色②良好③⅔④密⑤内面重ね焼痕明瞭。燻焼成。
H—48 117	灰釉陶器 埦	13.4 4.8 (6.0)	三日月高台2類。丸味を持って立ち上がり、口唇付近で外湾する。	体部回転ヘラ調整。底部は回転糸切り痕をヘラケズリ、ナデ調整を消す。	回転ナデ調整。施釉は漬け掛けによる。見込み部には施釉がない。	①灰色②きわめて良好③⁹⁄₁₀④精良⑤猿投系。K—90の新しい段階。
H—48 224	須恵器 埦	14.7 — —	高台を欠損する。体部は丸味を持って立ち上がり口唇付近で外反する。	底部右回転糸切り後つけ高台。体部全面回転ナデ調整。	全面回転ナデ調整。	①灰色②良好③⅔④密
H—48 53	須恵器 甕	(24.8) — —	比較的直立するが、口縁部のみの小破片のため詳細不明。実測図より開く可能性あり。	口縁部回転ナデ調整。	残存部分すべて回転ナデ調整。	①灰色②良好③¹⁄₁₀④密⑤白色針状鉱物を少量含む。
H—48 3	須恵器 甕	(31.8) — —	口縁部は頸部から急激に立ち上がり、ゆるやかに外反する。	口縁部回転ナデ調整。	口縁部回転ナデ調整。頸部指頭圧痕。胴部ヘラナデ。	①灰色②良好③⅞④密⑤外面やや燻焼成気味。白色鉱物粒を含む。
H—48 23	須恵器 甕	(37.6) — —	口縁部は「く」の字状に湾曲して立ち上がりほぼ直線的に外反する。	口縁部回転ナデ調整。	口縁部回転ナデ調整。頸部指頭圧痕一部ヘラケズリ	①灰色②良好③¹⁄₁₀④密⑤白色鉱物粒を含む。
H—53 101	須恵器 埦	14.5 — —	高台部欠損。体部は内湾気味に立ち上がり端部で若干開く。	底部右回転糸切り後つけ高台。体部底面回転ナデ調整。	全面回転ナデ調整。	①灰色②良好③⅔④密⑤口唇部一部酸化炎焼成。

遺物番号	器形	寸法	器形の特徴	外面調整	内面調整	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
W—29 埋4	須恵器 埦	(14.9) 5.2 6.8	高台から丸味を帯びて立ち上がり、口唇付近でやや外反する。	底部左回転糸切り後つけ高台。体部回転ナデ調整。	全面回転ナデ調整。	①灰白色②良好③⅝④密⑤やや酸化炎焼成気味。
W—29 埋5	須恵器 埦	(15.2) 5.8 (6.8)	雑な高台からスマートに立ち上がり、ほぼ直線的に外反する。器肉はうすい。	底部右回転糸切り後つけ高台。体部回転ナデ調整。	全面回転ナデ調整。	①灰黄色②良好③⅓④密⑤やや酸化炎焼成気味。内面は燻焼成気味。
W—29 埋6	須恵器 埦	(16.2) — —	高台を欠損する。丸味を帯びて立ち上がり、口唇付近で外反する。	底部右回転糸切り後つけ高台。体部回転ナデ調整。	全面回転ナデ調整。底部中央がやや突出する。	①灰白色②良好③⅓④密
W—29 埋7	須恵器 埦	(13.9) 5.1 6.0	雑な高台を付する。やや丸味を帯びて立ち上がり、口唇付近で外反する。	底部右回転糸切り後つけ高台。体部回転ナデ調整。	全面回転ナデ調整。	①灰白色②良好③⅜④密⑤やや酸化炎焼成気味。
W—29 埋8	須恵器 坏	13.3 4.0 5.7	やや丸味を帯びて立ち上がり、直線的に外反する。	底部右回転糸切り後未調整。体部回転ヘラケズリ後ナデ調整。	全面回転ナデ調整。	①灰白色②良好③¼④密
W—29 埋2	土師器 甕	(19.2) — —	口縁部付近のみ残存。所謂、「コ」の字状口縁を有する。	胴部ヘラケズリ。頸部より上半はナデ。	ヨコナデ。	①にぶい橙色②良好③1/10④密
W—29 埋9	須恵器 坏	(13.4) 4.0 (6.2)	ほぼ直線的に外反する。端部で若干厚みを増す。	底部右回転糸切り後未調整。体部回転ナデ調整。	全面回転ナデ調整。	①灰色②良好③⅛④密⑤やや酸化炎焼成気味。
W—29 埋10	須恵器 坏	(14.2) 3.9 (7.0)	ほぼ直線的に立ち上がり、口縁付近で外反する。	底部左回転糸切り後未調整。体部回転ナデ調整。	全面回転ナデ調整。内面の磨耗が著しい。	①淡赤橙色②やや不良③⅓④粗。φ0.3cmの小石を混入する。⑤酸化炎焼成。
W—29 埋3	土師器 甕	(19.3) — —	口縁付近のみ残存。所謂「コ」の字状口縁を有する。	胴部ヘラケズリ。頸部より上半はナデ。	胴部横方向ユビナデ。口縁部ヨコナデ。	①橙色②良好③口縁部⅛④密⑤内外面黒色付着物。
W—29 埋1	須恵器 大甕	(49.3) — —	口縁付近のみ残存。波状文を施し、端部は直立して折り返しを有す。	口縁部ヨコナデ後、波状文を施す。端部もヨコナデ。	ヨコナデ。	①灰色②良好③口縁部⅛④密。

遺物番号	器形	寸法	器形の特徴	外面調整	内面調整	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
H—43 180	須恵器 坏	12.6 3.7 6.8	体部は直線的に立ち上がり、口縁端部でやや外反する。	底部右回転糸切り後ヘラ状工具により中心部を調整。	全面回転ナデ調整。	①にぶい黄橙色②良好③1/4④密⑤内外面に黒班あり。油坏か。
H—43 181	須恵器 坏	12.4 3.6 6.8	体部は丸味を帯びて立ち上がり、口縁端部でやや外反する。	底部右回転糸切り後未調整。体部回転ナデ調整。	全面回転ナデ調整。中心部ロクロ痕による凹みあり。	①灰白色②良好③1/4④密⑤外面二次焼成痕あり。
H—43 183	須恵器 坏	12.9 3.7 (5.8)	体部は内湾気味に立ち上がり、端部で大きく外反する。	底部右回転糸切り後未調整。体部回転ナデ調整。	全面回転ナデ調整。	①灰白色②良好③1/2④密⑤内外面ともに下半部に二次焼成痕あり。
H—43 206	須恵器 坏	11.7 3.9 5.2	体部は丸味を帯びて内湾気味に立ち上がる。	底部右回転糸切り後未調整。体部回転ナデ調整。	全面回転ナデ調整。底部に搾痕がある。	①淡黄色②良好③1/3④密⑤内面底部二次焼成
H—43 317	須恵器 坏	13.3 4.2 6.3	体部は丸味を持って立ち上がり、端部で外反する。若干あげ底気味。	底部右回転糸切り後未調整。体部回転ナデ調整。	全面回転ナデ調整。	①灰白色②良好③9/10④密⑤底部燻焼成。重ね焼痕か？。
H—43 322	須恵器 坏	12.5 3.7 5.5	体部は内湾気味に立ち上がり、端部で外反する。若干あげ底。	底部右回転糸切り後未調整。体部回転ナデ調整。	全面回転ナデ調整。	①にぶい橙色②良好③1/4④密⑤酸化炎焼成
H—43 344	須恵器 坏	13.0 4.2 5.3	体部は丸味をもって内湾し、端部で外反する。	底部右回転糸切り後未調整。体部回転ナデ調整。	全面回転ナデ調整。	①灰白色②良好③1/3④密⑤内外面二次焼成痕あり。
H—43 371	須恵器 埦	14.6 5.5 6.4	高台からやや内湾気味に立ち上がり、端部でやや外反する。	底部糸切り後高台を貼付け、右回転ロクロナデ調整。	全面回転ナデ調整。	①淡黄色②良好③2/3④密⑤底部外面のみ二次焼成痕あり。
H—43 337	須恵器 埦	(13.3) 5.1 (6.4)	やや低く丸い高台から内湾気味に立ち上がり端部で外反する。	底部右回転糸切り後、付け高台。体部回転ナデ調整。	全面回転ナデ調整。	①浅黄色②やや不良③1/3④やや粗⑤一部酸化炎焼成。
H—43 182	須恵器 埦	13.3 4.8 5.6	不均一な高台から丸味を持って立ち上がり端部で外反する。	底部右回転糸切り後付け高台。体部回転ナデ調整。	全面回転ナデ調整。油煙付着後磨滅されて光沢を帯びる。	①灰黄褐色②良好③2/3④密⑤一部酸化炎焼成
H—43 127	土師器 甕	20.1 — —	口縁部付近を残存。「コ」の字状を意識した甕である。	胴部上半横方向ヘラケズリ。口縁部横ナデ。	胴部上半部ヘラ状工具によるナデ。口縁部横ナデ。	①にぶい黄褐色②良好③1/10④密⑤外面二次焼成痕あり。
H—43 193	須恵器 埦	15.6 7.4 9.8	腰は丸味を帯び、口縁は直線的に延び、端部は蓋受けのため直立している。	底部糸切り後つけ高台。回転ナデ調整。体部回転ナデ調整。	全面回転ナデ調整。	①灰白色②良好③1/2④密⑤内面黒色付着物。

遺物番号	器　形	寸　法	器形の特徴	外面調整	内面調整	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
H—43 319	須恵器 埦	15.1 6.0 9.2	所謂足高高台から直線的に外反する。削り調整による凹凸が著しい。	底部右回転糸切り後高台を貼付け周辺部ナデ調整。	全面回転ナデ調整。	①にぶい黄橙色②良好③3/8④密⑤酸化炎焼成
H—43 150	土師器 甕	18.0 — —	「コ」の字状口縁。胴部最大径は上半部にあり、口径を上回らない。口唇部外側に沈線が入る。	胴部上面ユビオサエ後横方向ヘラケズリ。頸部と口縁部、ユビオサエ後横ナデ。	胴部ヘラ状工具によるナデ。口縁部と頸部、横方向ナデ。	①にぶい橙色②良好③1/8④密⑤外面二次焼成。
H—43 318	須恵器 埦	14.4 5.8 8.1	均一な高台から丸味を持って立ち上がり、口縁端部で外反する。	底部右回転糸切り後つけ高台。体部回転ナデ調整。	全面回転ナデ調整。	①灰色②良好③9/10④密⑤内外面ともに黒班を有す。
H—43 149	灰釉陶器 小　瓶	4.6 10.0 4.8	底部平底。胴部は球形を呈し、大きく外反して口縁に至る。	底部右回転糸切り未調整。胴部下半回転ヘラケズリ、体部～口縁部回転ナデ調整。	全面回転ナデ調整。	①灰白色②良好③3/8④精良⑤外面上半部自然釉。
H—54 77	土師器 坏	11.5 —	丸底。ゆるやかに直立してやや内傾する素口縁坏。	手持ちヘラケズリ後、口縁部のみヨコナデ。	暗文状ミガキを放射状に施す。	①明赤褐色②良好③1/8④密⑤外面二次焼成痕あり。
H—54 78	土師器 坏	12.0 —	底部を欠くが、丸底で、口縁端部がやや内傾する。	手持ちヘラケズリ後口縁部のみヨコナデ。	暗文状ミガキを放射状に施す。	①橙色②良好③1/8④密⑤外面のみ二次焼成痕あり。
H—62 21	土師器 鉢	18.3 11.3 6.3	長胴甕下半部の器形を呈する。当初よりカマド支柱を意識しているものと思われる。粗製である。	全面、指頭によるナデ。これに上半を積んでヘラケズリを施せば長胴甕になると思われる。	カマド支柱として使用した際の付着物が著しく、器表は明らかでない。	①橙色②良好③1/1④密⑤外面焼土付着一部二次焼成
H—62 17	土師器 坏（埦）	14.4 6.7	丸底。比較的深味で口縁部は直立気味の内斜口縁。	手持ちヘラケズリ後。口縁部のみヨコナデ。	体部は暗文状ミガキを放射状に施し口縁部はヨコナデ。	①橙色②良好③1/1④密⑤内外面ともに一部に赤色塗彩がある。
H—62 5	土師器 坏	14.7 4.4	浅味の扁平な内斜口縁坏。	手持ちヘラケズリ後、口縁部のみヨコナデ。	工具使用のナデ後、暗文状ミガキを放射状に施す。	①橙色②良好③1/1④密⑤外面底部に二次焼成痕あり。
H—62 18	土師器 坏	16.1 7.6	丸底。比較的大型の器形で口縁部をほぼ直立させる。	体部手持ちヘラケズリ。上半部は一部ミガキを施し、口縁部をヨコナデ。	暗文状ミガキを放射状に施し、中心部には『×』印のミガキがある。	①明赤褐色②良好③1/1④密⑤内面部分的に黒色付着物。

遺物番号	器形	寸法	器形の特徴	外面調整	内面調整	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
H—62 8	土師器 坏	14.1 5.5	丸底、ゆるやかに直立する内斜口縁。	手持ちヘラケズリ。部分的にユビナデ。口縁部ヨコナデ。	全面ナデ後、体部上半に暗文状ミガキを放射状に施す。	①橙色②良好③1/1④密⑤外面に一部赤彩が認められる。
H—63 178	土師器 坏	13.4 —	底部を欠く。深身で口縁部を直立させる。素口縁坏。	体部手持ちヘラケズリ。口縁部ヨコナデ。	ヨコナデ。	①にぶい橙色②良好③1/6④密⑤内外面ともに二次焼成。
H—63 210	土師器 坏	15.7 7.3	丸底、比較的大型で深身。直立気味の内斜口縁を付す。	体部手持ちヘラケズリ。口縁部ヨコナデ。	体部上半に暗文状ミガキを放射状に施す。口縁部はヨコナデ。	①橙色②良好③5/6④密⑤外面底部に二次焼成痕あり。
H—63 266	土師器 坏	12.0 5.2	丸底。ゆるやかに直立してやや内傾する素口縁。	体部手持ちヘラケズリ。口縁部ヨコナデ。	全面ナデ後、体部上半に暗文状ミガキを放射状に施す。	①橙色②良好③5/6④密⑤外面底部に二次焼成痕あり。
H—63 270	土師器 坏	(13.4) —	丸底でゆるやかに直立。やや内傾する素口縁坏。	体部手持ちヘラケズリ。口縁部ヨコナデ。	全面ナデ後、体部上半に暗文状ミガキを放射状に施す。	①橙色②良好③1/6④密
H—63 179	須恵器 蓋	15.6 2.9 4.6	カエリの無い浅身の坏蓋。中央部のへこむ凹状のつまみを付す。口唇部は直に下に折れる。	天井部中心部より1/2の範囲まで回転ヘラケズリ。それより外方はナデ調整。	全面ナデ調整。口唇周辺のみ変色しており、身と重ね焼きした痕跡と思われる。	①灰白色②良好③3/4④密
H—52 234	須恵器 埦	11.1 4.4 (5.3)	全体に丸味を帯びた器形で比較的高い高台を付している。	回転ナデ調整。つけ高台後ナデ。	回転ナデ調整。	①黄灰色②良好③1/6④密⑤外面二次焼成。
H—52 219	カワラケ 皿	9.4 2.6 5.0	やや丸味を帯びた器形で低い高台を付す。	底部右回転糸切り後未調整。体部回転ナデ調整。	回転ナデ調整。	①橙色②良好③5/6④密⑤酸化炎焼成。
H—52 312	カワラケ 皿	11.2 2.2 4.6	柱状高台。小型で浅身の皿。稀有な存在である。	底部右回転糸切り後未調整。体部回転ナデ調整。	回転ナデ調整。油煙付着。	①橙色②良好③9/10④粗⑤酸化炎焼成。皿としては異形であり托を灯明皿に転用か。
H—52 310	須恵器 羽釜	21.3 — —	胴下半部を欠損する。比較的口縁部を内傾する羽釜。鍔はややだれた三角形を呈す。	全面ヨコナデ後、胴部不定方向ナデ。	ヨコナデ。	①にぶい黄橙色②良好③5/6④密⑤内外面二次焼成。
H—52 401	須恵器 羽釜	19.3 — —	胴上半部の一部のみ残存する。口縁部は比較的直立し、断面正三角形の鍔を持つ。	全面ヨコナデ後。胴部不定方向ナデ。	ヨコナデ。	①褐灰色②良好③1/6④密⑤内外面二次焼成。

遺物番号	器　形	寸　法	器形の特徴	外面調整	内面調整	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
H−60 819	土師器 坏	12.5 4.8	やや口唇部を内傾させる素口縁坏。丸底で半球形を呈す。	体部手持ちヘラケズリ後、口縁部のみヨコナデ。	ヨコナデ後、暗文状ミガキを上半部に施す。	①赤褐色②良好③1/1④密
H−60 542	土師器 坏	12,7 5.3	口唇部を内傾させる素口縁坏。丸底で、器表の荒れが著しい。	体部手持ちヘラケズリ。口縁部のみナデ。	ヨコナデ後、暗文状ミガキを施すと思われるが荒れが著しく詳細は不明。	①赤褐色②良好③2/3④密
H−60 382	土師器 坏	12.2 —	口唇部をかなり内傾させる素口縁坏。	体部手持ちヘラケズリ後、口縁部のみナデ。	ナデ。器表荒れ著しい。	①橙色②良好③1/3④密
H−60 796	土師器 坏	13.3 5.3	口唇部をやや上向きに短く突出させる内斜口縁坏。	体部手持ちヘラケズリ後。口縁部のみヨコナデ。	上半部暗文状ミガキ。口唇部ヨコナデ。	①明赤褐色②良好③1/1④密
H−60 11	土師器 坏	(15.0) 7.7	口唇部をやや上向きに外反する深みの内斜口縁坏。	体部手持ちヘラケズリ。口縁部ヨコナデ。	上半部暗文状ミガキ。口唇部ヨコナデ。	①橙色②良好③1/2④密⑤口唇部のみ変色している。
H−60 1032	土師器 坏	13,2 —	口縁部をやや外反しながら直上させる。外稜はやや突出。	体部手持ちヘラケズリ。口縁部ヨコナデ。	ヨコナデ。	①橙色②良好③1/5④密⑤外面二次焼成。
H−60 722	土師器 坩	(9.7) 8.6 5.3	口縁部をやや内湾気味に外反する。若干底上げ気味の平底。体部は丸味を帯びる。	体部ヘラケズリ。口縁部ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。体部ユビナデ。	①にぶい橙色②良好③1/3④密⑤外面一部赤色塗彩
H−60 923	土師器 坩	11.3 7.9 5.5	口縁部はほぼ直線的に外反する。底部平底若干底上げ気味。	体部ヘラケズリ。口縁部ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。体部ユビナデ。	①にぶい橙色②良好③2/3④密⑤外面二次焼成。
H−60 884	土師器 坩	11.4 8.7 5.8	口縁部はほぼ直線的に外反する。底部平底。若干底上。	体部ヘラケズリ。口縁部ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。体部ユビナデ。	①橙色②良好③9/10④密⑤外面一部赤色塗彩か？
H−60 938	土師器 坩	(8.8) 7.9 5.2	口縁部は直線的に外反する。底部平底でややあげ底気味である。	体部ヘラケズリ。口縁部ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。体部ユビナデ。	①橙色②良好③2/3④密
H−60 120	土師器 坩	(11.0) 9.4 5.5	口縁部は直線的に外反する。底部平底であげ底気味。	体部ヘラケズリ。口縁部ヨコナデ。	口縁部ヘラナデ。体部ヘラナデ。一部ユビナデ。	①にぶい橙色②良好③2/5④密
H−60 116	土師器 坩	12.8 9.0 5.6	ややいびつな器形最大径は口縁にあり、直線的に延びて口唇付近で大きく外反する	体部、底部ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。	体部ユビナデ。口縁部ヨコナデ。	①橙色②良好③5/6④密⑤一部赤色塗彩。

遺物番号	器形	寸法	器形の特徴	外面調整	内面調整	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
H—60 712	土師器 坩	(11.4) 10.3 (6.0)	平底、胴部球形、口縁部はやや開き気味に外反する。	体部～底部ヘラケズリ。口縁部ヨコナデ。	体部ユビナデ。口縁部ヨコナデ。	①明赤褐色②良好③⅖④密⑤凝口縁による成形。
H—60 907	土師器 高坏	17.3 13.2 (12.8)	坏部は一段外稜を有し、直線的に外反する。脚部はスマートな裾開きで、ややエンタシス状を呈する。	坏部、外稜より上半と脚部に暗文状ミガキを施し、脚部の接合部はナデにより接着させる。	底部と上半部で異った方向の暗文状ミガキを旋す。脚部内面はユビナデ裾部は回転ヨコナデ。	①橙色②良好③⅚④密⑤外面一部二次焼成。
H—60 623	土師器 高坏	21.4 — —	脚部を欠損する。坏部は直線的に外反し二段の弱い外稜を有す。	不定方向ヘラケズリ後上半部のみヨコナデ。	ヨコナデ。	①橙色②良好③坏部⅚④密⑤外面一部二次焼成。
H—60 17	土師器 小型甕	(15.6) 17.4	胴下半部に最大径をもつ寸胴な器形底部平底。	全面手持ちヘラケズリ後口縁部のみヨコナデ。	不定方向ヘラケズリ後口縁部ナデ。	①にぶい黄橙色②良好③¾④密⑤外面二次焼成。胴部に顕著な凝口縁。
H—60 347	土師器 壺	15.8 — —	胴下半を欠損する。球胴型を呈し、やや内湾気味に口縁を外反する。	不定方向ヘラケズリ後ハケメ調整。口縁部はヨコナデ。	胴部ヘラケズリ後部分的にナデ調整。口縁部ヨコナデ。	①にぶい橙色②良好③⅙④粗⑤外面赤色塗彩。
H—60 654	土師器 小型甕	12.7 13.7 (6.2)	底部平底。胴部上半に最大径をもつ。口縁部は短くやや内湾気味に外反する。	胴部下半手持ちヘラケズリ。上半部ナデ。口縁部ヨコナデ。	不定方向ヘラケズリ後上半部のみヨコナデ。口縁部ヨコナデ。	①橙色②良好③⅗④密⑤外面二次焼成。
H—66 162	須恵器 坏	(15.2) 4.7 (7.6)	やや丸味を帯びて外反する。ケズリにより凹凸激しい。	底部右回転糸切り後未調整。体部回転ヘラケズリ後ナデ調整。	全面回転ナデ調整。	①にぶい橙色②良好③⅙④密⑤内外面二次焼成。
H—66 187	須恵器 埦	(14.0) 5.2 7.2	やや丸味を帯びて立ち上がり、口縁付近で外湾する。高台は粗雑な造り。	底部右回転糸切り後つけ高台。体部ナデ調整。	全面回転ナデ調整。	①灰色②良好③¾④密⑤外面重ね焼の痕跡を有す。
H—66 153	須恵器 蓋	13.8 2.8 5.5	かえりを有す浅身の坏蓋。大形のつまみを附する。	回転ヘラケズリ後ナデ調整。	全面回転ナデ調整。	①灰色②良好③⅚④密⑤外面一部に自然釉付着。
H—67 213	須恵器 埦	(12.4) 4.9 5.8	やや丸味を帯びて立ち上がり、口縁付近で外反する。全体にいびつで高台も粗雑。	底部右回転糸切り後つけ高台。体部回転ヘラケズリ後ナデ調整。	全面回転ナデ調整。	①灰白色②良好③⅗④密⑤内外面一部に二次焼成。

遺物番号	器　形	寸　　法	器形の特徴	外 面 調 整	内 面 調 整	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
W—30 7G—1	須 恵 器 坏	(12.2) 3.2 (8.0)	ほぼ直線的に外反する。全体的にやや歪んでいる。	底部右回転ヘラ切り後未調整。体部回転ナデ調整。	全面回転ナデ調整。	①灰色②良好③⅙④精良⑤内面自然釉一部付着。外面底部重ね焼痕あり。
W—30 11G	須 恵 器 坏	(5.5) 3.7 (7.2)	平底。体部内湾気味で丸味を帯びる。	底部右回転糸切り後未調整。体部回転ナデ調整。	ロクロミズビキ成形。	①灰色②きわめて良好③⅓④密⑤外面自然釉付着。
W—30 埋3	須 恵 器 坏	(12.2) 3.4 (7.7)	ほぼ直線的に外反し、口縁部付近で外湾する。	底部右回転糸切り後未調整。体部回転ナデ調整。	ロクロミズビキ成形。	①灰白色②良好③⅙④密⑤外面一部二次焼成。
W—30 7G—2	須 恵 器 坏	(11.2) 4.1 (6.5)	やや内湾気味に直立し、底部との境に沈線状凹みを持つ。	底部右回転糸切り後未調整。体部回転ナデ調整。	全面回転ナデ調整。	①灰白色②良好③⅙④密
16Tr 拡73	土 師 器 坏	(11.5) 5.0	球胴型の体部にやや直立気味の内斜口縁を付す。	体部手持ちヘラケズリ後口縁部のみヨコナデ。	体部ナデ後、放射状ミガキ。口縁部ナデ。	①にぶい橙色②良好③⅙④密
W—30 埋1	土 師 器 坏	(12.6) 4.1 (8.8)	平底。直線的に外反し、口縁部でやや内湾気味に直立する。	体部手持ちヘラケズリ後、口縁部のみナデ。	全面回転ナデ調整。	①橙色②良好③⅙④密⑤胎土中に金雲母を含む。所謂相模型坏か？
16Tr 拡445	土 師 器 坏	(12.6) —	球胴型を呈す素口縁坏。	体部手持ちヘラケズリ後口縁部のみナデ。	体部ナデ後、やや乱れた放射状ミガキ。	①にぶい橙色②良好③⅙④密
16Tr 拡262	土 師 器 坏	(13.2) —	極端な外稜を持つ模倣坏。口縁部も面取りして、しっかり作る。	体部手持ちヘラケズリ。口縁部ヨコナデ。	ヨコナデ。	①橙色②良好③⅙④密⑤内面黒 or 赤色付着物。
16Tr 拡111	土 師 器 坏	(15.9) 8.2	極端な外稜を持つ大型の模倣坏。丸底で深身、作りも丁寧。口縁部はやや開き気味。	体部手持ちヘラケズリ。口縁部ヨコナデ。	ヨコナデ。	①明赤褐色②良好③⅞④密⑤胎土中に酸化鉄を混入する。
W—30 6G	灰釉陶器 皿	(11.6) 2.2 (6.2)	口径はやや小さく、高台部からゆるやかに立ち上がり、口唇部でやや外反する。底部中央に穿孔あり。	ロクロミズビキ、付け高台。底部に油煙付着。	ロクロミズビキ。自然釉付着。底部中央に焼成前の沈線があり、それに沿って穿孔されている。	①灰白色②きわめて良好③⅙④精良⑤灯明皿として使用されたと思われるが、油煙は底部外面が著しく体位は不明である。
W—30 埋2	須 恵 器 坏	— — 7.2	底部付近のみ残存。平底。	底部右回転糸切り後未調整。ややいぶし気味。	回転ナデ調整。底部に墨書あり。	①灰色②良好③⅙④密⑤内面に墨書を持つことから特殊な用途が考えられる。

H-1号住居址(西から)

H-1号住居址(南西から)

H-8号住居址(南西から)

H-8号住居址カマド(西から)

D-18(北から)

W-23(北から)

W-1・2・3(西から)

14トレンチ調査風景(東から)

図版２

H-53号住居址(西から)

H-53号住居址カマド(西から)

W-28号溝(西より)

３トレンチ大溝検出作業風景

W-29北壁地断(南西から)

W-29号溝底部(西から)

H-43号住居址(西から)

H-43号住居址カマド(西から)

H-63号住居址カマド掘方骨出土状態(北から)

H-62号住居址、遺物出土状態(南から)

H-62号住居跡カマド(南から)

H-62号住居跡、骨出土状態(南から)

H-62号住居跡 カマド(西上から)

H-62号住居跡カマド(南から)

B-2号掘立柱建物址とH-52号住居跡(北西から)

H-52号住居址カマド(西から)

図版４

B-2 掘立柱建物址ピット５（東上から）

H-60号住居址（西から）

15トレンチ 全景（西から）

H-66号住居址（南から）

H-67号住居跡（南西から）

I-３号井戸（北から）

16トレンチ杭列出土状況（西から）

16トレンチ拡張部全景（西から）

板材・梯子等出土状況（南から）

部材・梯子出土状況（南上から）

16トレンチ杭列（北から）

建築部材出土状況（南から）

16トレンチ拡張部杭列（南東から）

16トレンチ拡張部木製品出土状況（南西から）

16トレンチ拡張部杭列（南から）

16トレンチ拡張部部材出土状況（北から）

図版6

16トレンチ調査風景(東から)

調査区遠景(手前16トレンチ)

17トレンチ景

KトレンチW-1号溝

KトレンチW-1号溝

KトレンチH-1号住居址カマド

H-1.2

W-23埋2

H-4.182

H-4.132

D-18.3

H-1.1

W-23.16

W-1.埋5

W-23.埋1

W-23.9

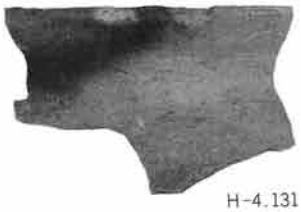
W-23.44

W-23.埋3

D-18.8

D-18.22

H-4.247


H-4.131

H-4.80

図版8

H-43.131

H-43.275

H-43.180

H-43.322

H-43.183

H-43.181

H-43.318

H-43.182

H-43.337

H-43.319

H-43.317

H-43.193

H-43.371

H-43.149

W-29.埋2

W-29.埋3

W-29.埋1

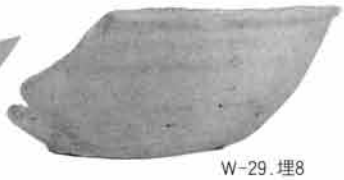
H-48.224

W-29.埋10

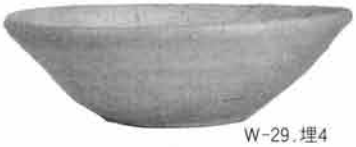
H-48.117

W-29.埋7

H-53.101


W-29.埋8

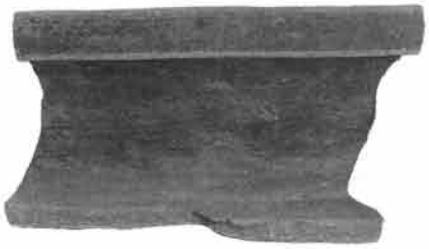
W-29.埋5


W-29.埋4

W-29.埋9

H-48.53

H-48.23


H-48.3

H-48.30平瓦

H-48.埋1

図版10

H-60.819

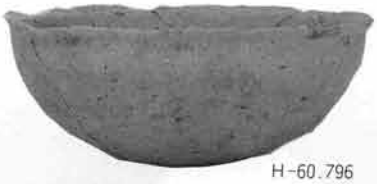
H-60.542

H-52.234

H-60.382

H-60.1032

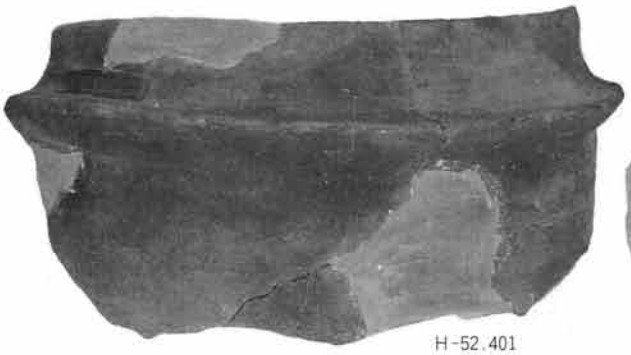
H-52.219

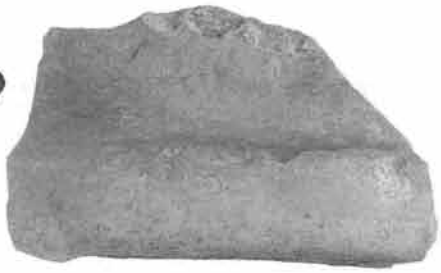

H-60.796

H-60.11

H-52.310

H-52.312


H-52.401


H-52-311

H-60.884

H-60.116

H-60.712

H-60.938

H-60.923

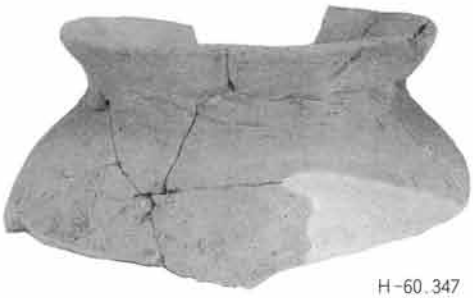
H-60.120

H-60.623

H-60.907

H-60.722

H-60.17


H-60.347

H-60.654

図版12

H-63.257

H-62.18

H-62.17

H-62.8

H-63-200

H-62.5

H-63.270

H-63.127

H-63.178

H-63.179

H-62.21

H-43.150

拡73

6G

拡262

5G

7G

11G

拡445

埋1

7G

H-66.162

埋3

H-66.153

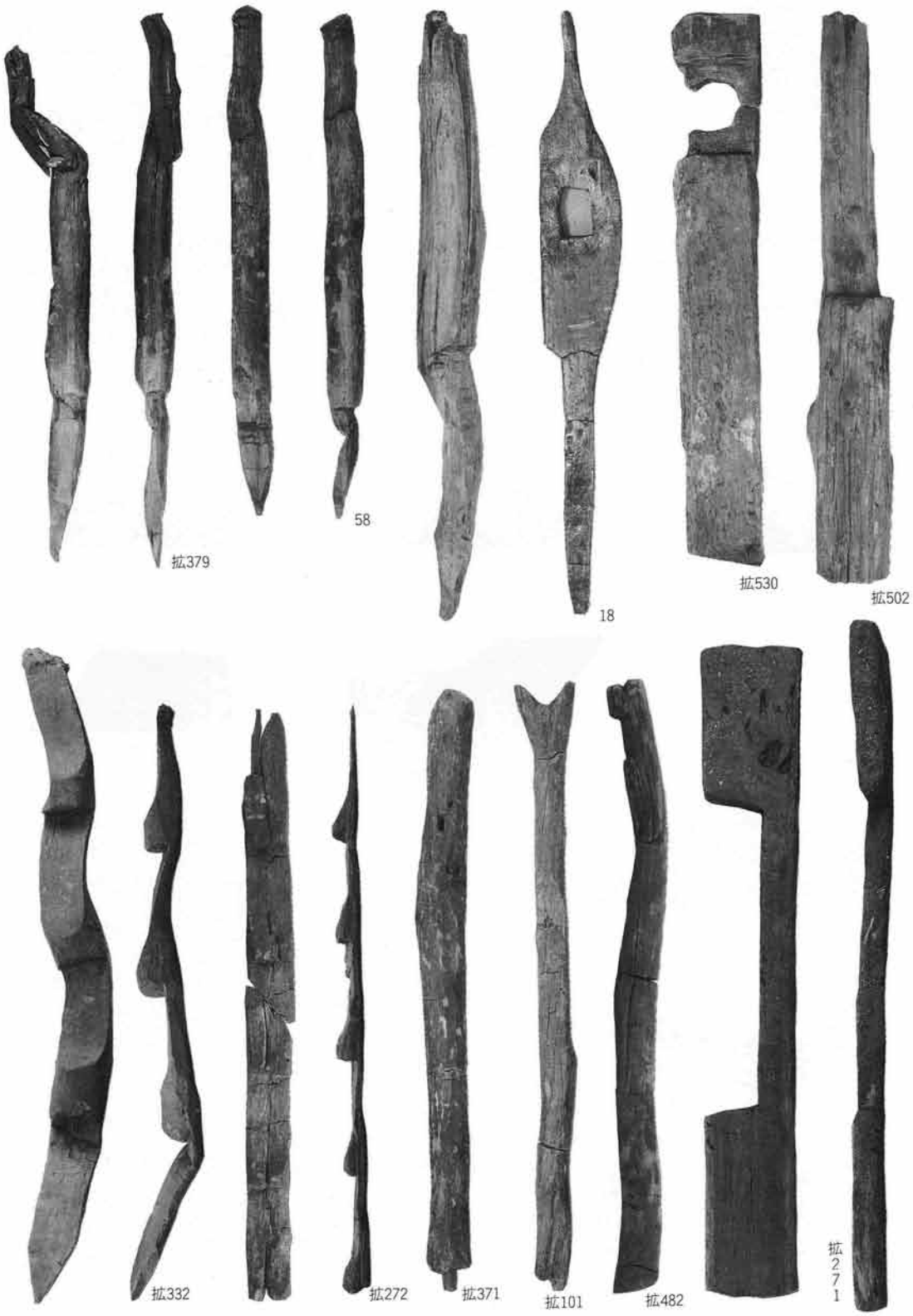
埋2

H-67.213

H-66.187

拡111

図版14



拡207

02

拡209

144

441

26

拡88

拡168

03

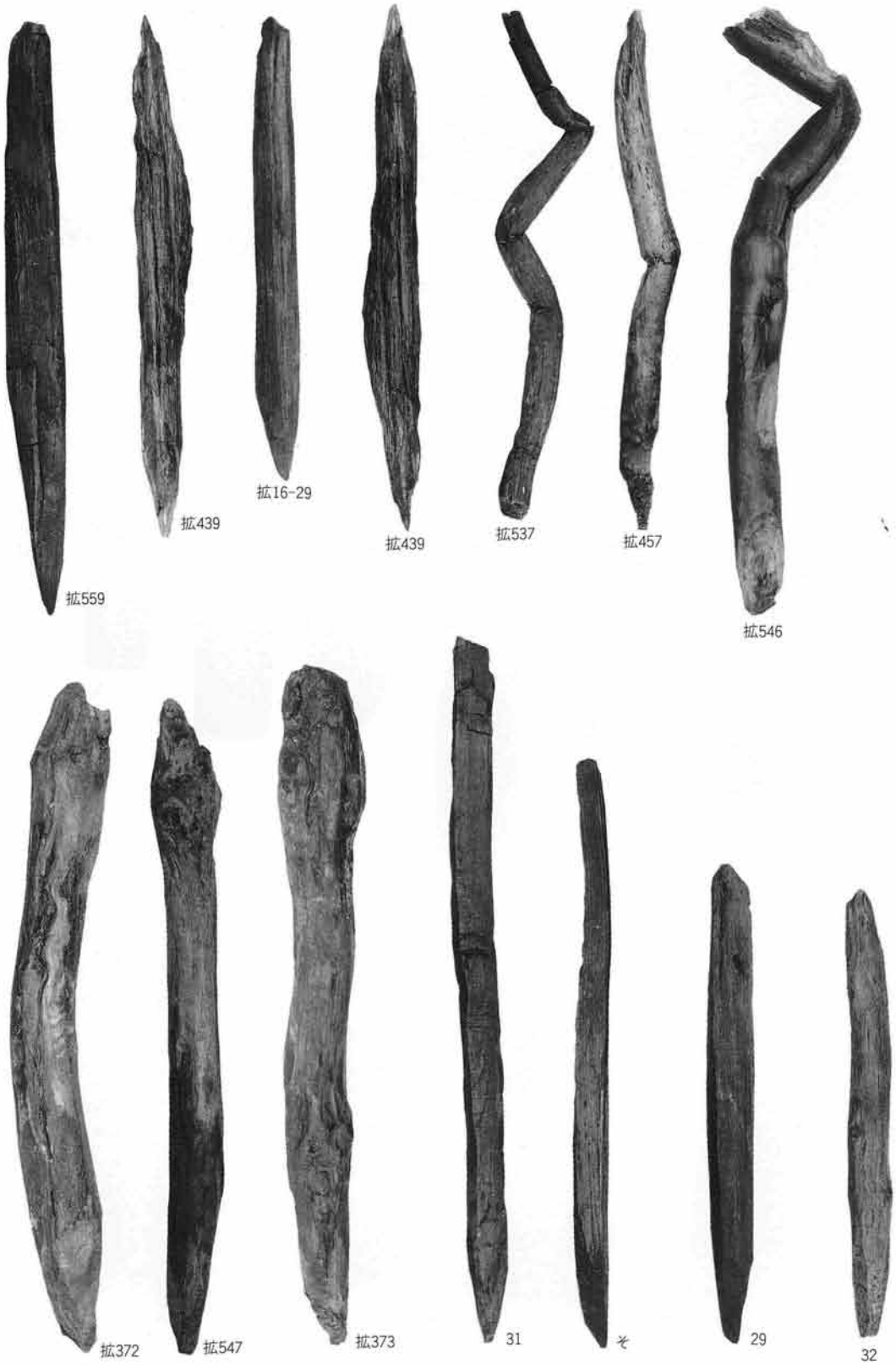
363

拡53

拡502

01

図版16

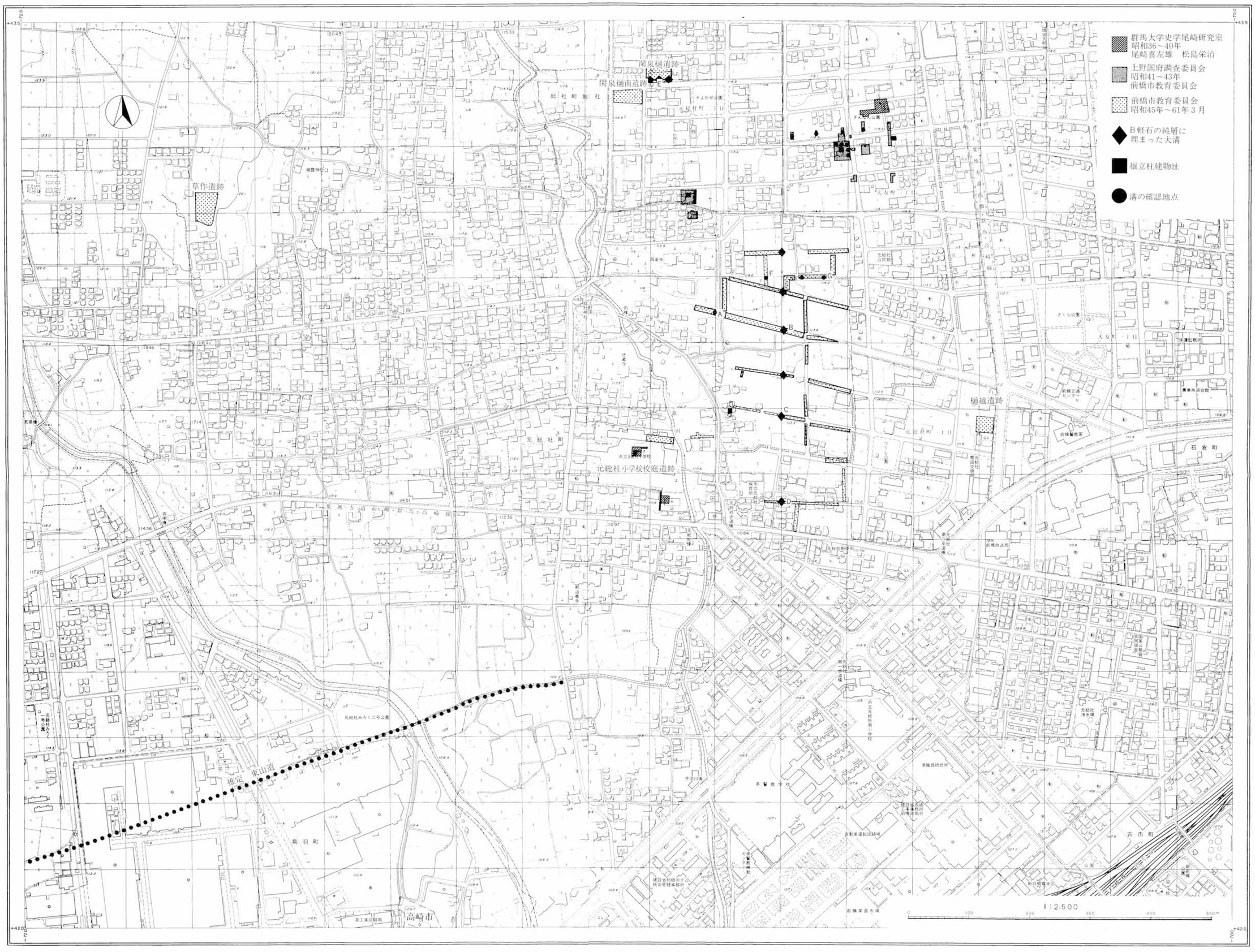


元総社明神遺跡　III・IV

昭和61年3月30日　印刷
昭和61年3月31日　発行

発行　前橋市埋蔵文化財発掘調査団
前橋市大手町二丁目12－1

印刷　朝日印刷工業株式会社
前橋市元総社町67



付図　上野国府域における現在までの発掘調査区域（1/5,000）